569-14
1200501516827
569
14

納本

岩波文庫
1391—1393

モンゴル史

下巻

田中萃一郎譯補

岩波書店

235

帝國圖書館藏

岩波文庫
1391—1393

蒙古史（ソード）

下卷

田中萃一郎譯補

岩波書店

昭和十三年・帝國圖書館

569-14
730
121

目次

第二編

第一章

成吉思汗の家族に分與せる所領軍隊：二、拖雷監國：一四、總會議：一四、窩闊台の推選：一四、窩闊台の初政：一六、一軍を波斯に派す：一八、金人との戰：一九、陝西全部の占領：二一、拖雷の遠征：二三、四川の蹂躪：二三、河南々部の侵略：二三、窩闊台黃河を渡る：二五、蒙古兩軍の聯絡：二五、金軍の敗北：二六、汴梁の包圍：三〇、媾和の交渉：三〇、窩闊台、拖雷蒙古に赴く：三〇、速不台汴京を圍む：三〇、圍を解く：三二、汴京の疫病：三三、金帝都城を去る：三四、黃河を渡りて北す：三五、その軍隊の敗北：三五、再び黃河を渡りて歸德府に退く：三五、第二回の汴京包圍：三六、崔立の逆謀：三六、帝都速不台の有に歸す：三七、帝室一族の運命：三七、蒙古と宋との同盟：四〇、宋軍河南に入る：四〇、寧甲速、蔡州に退く：四一、蒙古兵宋兵と之を圍む：四三、蔡州の陷落：四四、寧甲速自經す：四四、嗣君承麟戰死：四四、金帝國の滅亡：四五。

第二章

窩闊台、拖雷と蒙古に歸る：四六、窩闊台の病：四六、拖雷の死：四六、庫哩勒台に次で三方面の遠征を試む：四七、和林の建都：四八、支那の財務を掌れる耶律楚材の寵遇：四九、宗室の親王姬嬙に支那に於て湯沐邑を分與す：五三、儒臣を支那の官吏とす：五三、蒙古子弟の爲に支那に二大學校を設く：五三、高麗の叛亂鎭定：五四、宋軍河南を襲ふ：五六、崔立汴京に於て殺さる：五七、宋軍この舊都を占領す：五七、宋軍蒙古兵に破らる：五七、宋軍の退却：五七、宋朝平和を維持せんと試む：五八、宋に對して開戰す：五八、蒙古三軍の前進：五八、四川の侵略：五九、湖廣江南方面の交戰：六〇、窩闊台の宮

殿：六、その飲酒の癖　六、その崩御：六、その金錢を客まぎりしこと：六、察合台：七、回教徒の營主起りてトランスオクシアナ亂る：七。

第三章

ヴオルガ江西地方に於ける蒙古の遠征：七、ブルガリーの征服：七、欽察部の征服：八〇、露國北部の征服：八一、カウカサス山北民族の征服了る：八四、南部露西亞の征服：八五、波蘭の侵略：八六、リーグニッツの戰：八九、シレジア并にモラヴィアの蹂躙：九〇、匈牙利に入寇す：九三、匈牙利軍の大敗：九九、匈牙利の蹂躙：一〇〇、ベラ王アドリア海岸に向て逃る：一〇九、蒙古兵ダルマチアに遠征す：一〇九、その退却：一一〇、新に匈牙利、波蘭に入寇す：一一三、蒙古人の露國統轄：一一四。

第四章

皇后脫列哥那の監國　一一六、耶律楚材の失意卒去：一一八、貴由の選擧：一一三、その治世の事蹟　一一四、法王インノーセントより蒙古人の許に派遣せる宣教師：一一七、Jean de Plan Carpin 師の韃靼に於ける使命：一一七、波斯に於ける Anselme 師の使命：一一四、貴由崩ず　一二〇、ルイ聖王の韃靼に派遣したる André de Lonjumel の使命：一二五。

第五章

皇后斡兀立海迷失の監國：一二六、第一回の庫哩勒台に於て蒙哥、皇帝に指名さる：一二六、窩闊台の孫之に反對す：一二九、帝位窩闊台統より拖雷統に移る、蒙哥の推選：一二一、陰謀發見せられたりと稱す：一二二、窩闊台統の衰興の處罰：一二四、重要なる官職の任命：一二五、佛教管長の創設　一二五　人頭稅の確定：一二六、唆魯忽帖塔尼殂す：一二九、皇后斡兀立海迷失の處罰：一二七、窩闊台統の諸公子部下を奪はれ且追放さる：一二〇、窩闊台統に黨せしもの全帝國に亙りて搜索され處罰さる：一二七、長兀兒部王の薄倖：一二一、支那に於ける皇帝の代官たる忽必烈：一二四、窩闊台崩後宋に對する蒙古兵の作戰：一二四、高麗に一軍を派す　一二六、皇子旭烈兀波斯遠征に將たり：一二七、成吉思汗崩後北印度に於ける蒙古兵の作戰：一二七。

第六章

フランシスコ會派の Guillaume de Rubruquis 師の派遣：一二七、タルタリー地方の旅行：一二七、撒里荅の營所　一八〇、拔都の朝廷　一八〇、ルブルキの謁見：一八一、蒙哥の朝廷への旅行：一八三、謁見　一八四、ルブルキの陳述　一八六、蒙哥の勅答：一八七、和林の國都と宮殿　一九一、ルイ聖王の書簡に對する皇帝の回答：一九三、ルブルキの歸國　一九四、小アルメニア國王 Hethoum の入朝：一九四、國王の得たる恩典：一九六。

第七章

忽必烈の雲南征討　一九七、兀良合台の戰勝：一九八、東京の降服　一九九、高麗の服從：二〇〇、忽必烈の跋扈　二〇〇、宋朝征討の作戰計畫：二〇三、蒙哥の親征　二〇三、四川の戰役：二〇四、合州の攻擊　二〇五、蒙哥の崩御：二〇六、蒙古軍の北歸　二〇七、拔都の逝去　二〇八、撒里荅：二〇九。

第三編

第一章

忽必烈開平府より長江に向て進軍す：二一一、開平府の造營：二一一、渡江　二一二、鄂州の攻擊：二一三、忽必烈宋の右丞相賈似道の媾和の提議を容る：二一三、忽必烈北方に向て出發す：二一三、兀良合台は東京より揚子江岸に進軍す：二一三、阿里不哥帝位競爭の計畫：二一四、開平府に於て忽必烈皇帝に推選さる（南朝）：二一五、和林に於ては阿里不哥推選さる（北朝）：二一六、南北兩朝の戰爭：二一六、阿里不哥の軍隊の第一敗と乞兒吉思地方への退却：二一六、第二敗　二一七、昔木土湖附近の第三敗：二一八、第四回の戰は交綏に了れり：二一九、察合台部民の長官、阿魯忽と阿里不哥との戰：二二〇、阿里不哥、忽必烈に降る：二二一、首謀將校の處罰：二二二、阿里不哥の逝去：二二四、八剌、察合台領の王となる：二二四、海都の叛：二二五、高麗：二二五、日本：二二八、

忽必烈の都城…三九、忽必烈の宗教…三九、佛教…三〇、佛教長官の任命…三一、蒙古文字の製作…三一、太廟の造營…三一、國號を元と定む…三三、學者の保護…三三、翰林院の創置…三四、行政の規定…三五、各官省の創立…三五。

第二章

宋朝忽必烈の使節を拘引す…三六、宋に對する忽必烈の宣言…三六、李璮山東に叛す…三七、理宗の崩御…三七、南方支那に對する戰…三七、襄陽府の句圍攻擊…三八、樊城の陷落…三四、襄陽の降服…三四、度宗の崩御…三四、恭宗幼冲…三四、理宗の皇后攝政と爲る…三四、忽必烈の第二の宣言書…三四、伯顏を總統とせる蒙古の兩軍宋帝國を伐つ…三四、伯顏長江沿岸を征服す…三四、忽必烈の使節臨安附近に殺さる…三五、伯顏の召還…三五、賈似道の免職變死…三五、交戰…三五、伯顏、軍に還る…三五、蒙古軍臨安に進む…三五、宋朝媾和を提議す…三四、攝政皇太后の降服…三五、蒙古軍臨安を占領す…三五、攝政皇太后忽必烈に降伏せよと宋の官憲に詔す…三六、皇帝母后その他の皇族上都に送らる…三七、途上皇帝を奪はんとの企…三八、臨安の財寶を大都に致す…三八、湖廣に於ける阿里海牙の作戰…三九、伯顏の召還…三〇、福建に於ける宋の兵備…三六、恭宗の長兄益王福建に皇帝となり端宗と稱す…三六、江南揚州の包圍攻擊…三六、福建に於ける蒙古軍の成功…三六、新帝部下と福州を拔錨す…三六、廣西に於ける阿里海牙の作戰…三六、廣東の侵略…三四、端宗の崩御…三六、皇弟帝昺の卽位…三六、支那艦隊厓山附近に退却す…三六、海戰…三七、支那艦隊の敗北…三六、帝昺の崩御、宋朝の滅亡…三六。

第三章

日本の遠征…三七、占城の遠征…三七、緬王國の征服…三七、日本再征の計畫…三七、東京との戰…三七、皇太子眞金の死去…三四、日本再征計畫の放棄…三七、東京に於ける交戰…三七、南洋諸國の入貢…三五、海都との戰…三七、忽必烈諸王乃顏を破る…三〇、皇太孫帖木兒、諸王哈丹を破る…三八、伯顏海都に向ふ…三八、瓜哇島の遠征…三八、伯顏斥けられて親王帖木兒之に代る…三四、忽必烈の藏相…三四、新法典…三八、忽必烈の崩御…三九。

第四章

忽必烈帝國の廣袤…三九、行政區劃…三九、官吏…三九、敏活なる驛傳交通の制度…三九、支那の人口…三九、軍隊…三九、財政…三九、紙幣…三九、支那の基督教徒…三九、回回教徒…三九、宮廷の占星家と卜者…三九、帝都…三〇、宮中の宴會…三〇、敗獵…三〇、皇帝の后妃…三〇、皇子…三〇、宮中の女官…三〇、儲貳の選定…三〇。

第五章

帖木兒推選さる…三〇、新帝の大官任命…三〇、太傅伯顏死す…三〇、安南との媾和…三〇、緬甸國王の朝貢…三〇、緬甸の革命…三〇、帖木兒の出兵干涉…三〇、將官等の非行…三〇、その處罰…三〇、八百媳婦王國の遠征…三〇、支那境上部族の叛亂…三〇、劉深の率ゐし官軍の敗北…三〇、劉國傑の戰勝…三〇、蜂起せる部族の服從…三〇、篤哇に對する戰…三〇、海都の交戰敗軍…三三、その死亡…三三、その子察八兒、篤哇の降服…三四、成吉思汗家の一門悉く帖木兒を宗主とす…三四、篤哇と察八兒との戰…三四、篤哇、察八兒の領土を併呑す…三四、篤哇の死亡…三四、その後繼者…三四、帖木兒の崩御…三六。

第六章

皇太后卜魯罕の攝政…三八、阿難荅擁立の計畫…三八、海山黨…三八、阿難荅及黨與の拘引…三九、八達の攝政…三九、海山の卽位…三〇、阿難荅の領袖…三〇、阿難荅、卜魯罕の處刑…三〇、海山…三一、愛育梨拔力八達…三二、碩德八剌…三三、也孫鐵木兒…三四、阿速吉八…三六、圖帖睦爾…三九、額琳沁巴勒…三四、妥懽帖睦爾の卽位…三五。

第七章

右丞相伯顏…三六、陰謀…三六、伯顏の免黜…三八、右丞相馬札兒台…三八、右丞相托克托噶…三九、史籍…三九、右丞相阿魯圖…三四、右丞相別兒怯不花…三四、右丞相朶兒只…三四、左丞相太平…三四、右丞相托克托噶の重任…三四、支那各省の叛亂…三四、徐壽輝湖廣に皇帝と稱す…三四、海賊方國珍…三四、托克托噶の免黜…三五、宋帝韓林兒…三六、右丞相哈麻…

三四六、叛將朱元璋と張士誠との戰…三四七、宋の戰勝…三四八、開封府の略取遼東の遠征…三四九、遼陽上都の刼掠…三四九、朱元璋の戰勝…三四九、徐壽輝の幽閉暗殺…三五〇、陳友諒皇帝となる…三五〇、蒙古軍開封府を克復す…三五〇、左丞相太平の致仕…三五一、右丞相搠思監…三五一、蒙古の兩將察罕帖木兒と勃羅帖睦邇との確執…三五一、陽翟王阿魯輝帖木兒の叛…三五二、察罕帖木兒の山東叛將征服…三五三、その暗殺…三五三、四川の皇帝…三五三、朱元璋と陳友諒との戰…三五三、陳友諒の敗北戰死…三五四、朱元璋湖廣江西を略す…三五四、勃羅帖睦邇の謀叛…三五五、勃羅帖睦邇右丞相と爲り兵馬の權を握る…三五七、皇太子と勃羅帖睦邇との反目…三五七、勃羅帖睦邇部下の背叛…三五七、勃羅帖睦邇暗殺さる…三五八、左丞相擴廓帖木兒…三五八、その免黜…三五八、張士誠朱元璋に破らる…三五九、夏の皇帝殂す…三五九、宋の皇帝殂す…三五九、方國珍、朱元璋に從ふ…三五九、朱元璋の諸將支那南方各省を征服す…三六〇、その支那北部に於ける征服事業…三六〇、山東の服從…三六〇、朱元璋皇帝の位に卽く…三六一、大都に進發す…三六一、徐達北直隸に轉戰す…三六一、通州の戰…三六一、癸懼帖睦爾宮中を擧げてタルタリーに退く…三六一、明軍大都を占領す…三六一、支那兵應昌府に向ふ…三六二、癸懼帖睦爾崩ず…三六二、皇太子和林に退く…三六二、その卽位…三六二、その繼嗣…三六二、蒙古人分れて諸汗の命を奉ず…三六三、蒙古人の大半漸次滿洲朝に服從す…三六四、支那に於ける天主敎…三六四。

附錄

註一、ラシッドの拖雷支那遠征記事……三七一
附蒙古人の魔法卜筮迷信……三七三
註二、アライ・エッヂン及びラシッドの拔都西征記事……三七六
註三、蒙古皇帝ダヴィデに關する俗傳……三八六
註四、支那の地理に關するラシッドの記事……三八八

註五、巴里施の價格に關する記事……三九六
註六、成吉思汗統大汗系譜……三九七
跋文……三九九
索引

第二編

第一章（太宗紀）

成吉思汗は、諸王子并に一族に、領土（龍庭）を配與せり。長子朮赤（チユーチ）の所領は、アラル海の北に位し、西方 Sacassines 并にブルガル人の住地の界に及べり。アライ・エッヂンの記する所に從へば、蒙古の英主は朮赤に與ふるに西方諸國を以てし、韃靼馬蹄の能く蹂躙し得る地方を包括し盡したり。察合台（チヤガタイ）の領域は哈押立克（カヤリク）并に畏兀兒（ウイグル）人の地方より、アム河畔に達せり。窩闊台（オゴタイ）はイミル河の灌漑せる地方を領有し、拖雷（ツルイ）は Caracouroum 山脈と、斡難（オナン）河源との間に介在し父帝の留保せる直轄地を襲へり。（校者曰く、註のイロハに據る）（に就ては上卷原序參看）。這般の處分は土耳古并に韃靼民族の舊慣に從へるものにして、戸主はその子の丁年に達するや、家財、牧群を分與して、之をして、父の膝下を去て獨立の生活を營ましめ、（生女直之俗、生子年長、卽異居（金史一））（校者曰く、「」内は田中博士補註、舊本欄外にあり、今行間に收む。以下之に倣ふ。）父の住居と共に留保せられたるものは、斡赤斤 Utdjukèn 卽ち竈の主と呼ばれたる正妻の生める末子の相續に歸せり。かくて成吉思汗も亦その斡耳朶（オルツ）と最も貴重なる財貨と、その乘馬と、軍隊の大部分

即ち征服せる部族とを擧げて、拖雷（ツルイ）に遺したり。

成吉思汗の殂くや、その軍隊は十二萬九千人を數へたり。拖雷（ツルイ）に與へたる十萬千人は中軍（coul）右翼（巴剌溫合爺 baraoun-car）左翼（沼溫合爺 tchaoun-car）の三隊に分たれたり。中軍は僅に千人より成り、成吉思汗の禁軍たりき、是即ち成吉思汗の侍衛にして之を指揮せる諾延（ノヤン）察罕 Tchagan は唐古特（タングート）の出身に係り、十三歳の時より成吉思汗に養はれ、第五子と呼ばれたり。察罕（チャガン）は同時に、この侍衛第一中隊の長なりき。爾餘の隊長は、職務上四大斡耳朶、即ち成吉思汗の四后妃の廷に附せられ、大膳、大廐等の事務に當れり。侍衛は、豫備の乘馬、糧食等の點に於て爾餘の軍隊と同一の給付を受けたり。右翼三萬八千人强を指揮せる諾延（ノヤン）博爾朮（ブルグーチ）は阿兒剌氏 Erlate に屬し別に麾下の聯隊をも有せり。左翼六萬二千人は、札剌亦兒氏 Tchelaïre 木訶里（ムクリ）の制令を奉じたり。蒙古の英主は重く木訶里を用ゐて特に札剌（チエライル）亦兒部三千人の指揮權を授け、皇帝の裁可を俟たずして、之が將校を任命することを得しめたり。爾餘の將軍のうちにも、出身部族の軍隊を指揮して、之が千戸任命權を有せしもの少からず、忽都哈（クツカ）は降服の後依然として、衞拉特（ラート）部四千人に將とし、荅力台（タリタイ）は把憐部 Barines 一萬人を率ゐ、阿剌忽思的斤（アラクシテキン）は汗古部（オングート）四千の衆を統べ、成吉思汗の支那に入寇せる時、降服したる烏也兒（オヤル）は契丹兵一萬、禿花（トガン）は女眞兵一萬の指揮を委ねられたり。

殘れる二萬八千人のうち、成吉思汗は四千人宛を三子、朮赤（チユーチ）、察合台（チヤガタイ）、窩闊台（オゴタイ）に、四千人を第五子果魯干（グールガン）に、五千人を幼弟斡赤斤（ウチユーケン）に、三千人を弟哈準（カチユン）の一子に、三千人を生母訥倫（ウロン）に、千人を弟朮赤哈薩兒（チユーチカツサル）の諸子に與へたり。この軍隊と之が家族とは、遺産として之を所有せる支流長者の有に歸し、且その長者は同支流より出でたる諸王子の上に立てり。（チに據る。なほチには成吉思汗の大軍十二萬九千人に就き、之を指揮せる將軍千戸幷に之を組成せる部族の名を詳記しあり、成吉思汗のその諸子一族に分與したる蒙古兵は各征服地に於ける軍隊の中樞となれり。蒙古の英主の殂後約八十年にして筆を執れるラシッドは Tocota 幷に Zayan の軍隊の一部は、成吉思汗が、朮赤家に與へたる四千の蒙古兵の裔にして、その他はこの當初の幹部に附隨したる露西亞、シルカッス、欽察、馬札兒等の軍隊より成れりと云へり。蒙古語が西邦に傳はらざりしは、移住せる蒙古人の少數なりしが爲にして、裏海、黑海北方平原の人民は土耳其種なる欽察人なりしより、土耳其語は依然として同地方に行はれたり。ラシッドは又蒙古人繁殖の實例を擧げて、忽必烈帝の時調査せしに斡赤斤の後裔は六百人、哈準の後裔は七百人を數へ、部下兵士の家族も同じく增加したり、又成吉思汗の第五の弟、別勒格台の子に位階低かりしも、百人の妻を娶り、百人の子を擧げ Tchaoutoul 即ち百總と異名されしものあり、忽必烈帝の時その子孫八百人に達せしも而も子女四十人に過ぎざりし朮赤哈薩兒の子孫も之と殆んど同數なるを知りて、大に之を訝りしも、これ一は貧しく一は富めるが爲なりき、云々、一二六〇年に史を撰めるアライ・エッヂンは當時成吉思汗の子孫は約一萬人を數ふと云へり。帖木哥斡赤斤幷に哈準の子の領土（龍庭）は蒙古の東方に位し、女眞に最も接し、Calaltchin Alt 幷に Olcoui 河に近し、即ち亦乞剌思氏の故土なり。朮赤哈薩兒諸子の領土は蒙古の東北端にして Ergouna, Keule 湖幷に Caïlar 河附近なり。（チ）

諸皇子に之に分與せる軍隊の將校を紹介するに方りて、成吉思汗は推擧の辭を述べ且戒めて云へり『假令過失ありとも、部將を罰する勿れ、卿等は年少なるも、部將は偉勳あるの人なり故に朕に諮れ、朕若し世に在らずば、互に相諮れ、而して法に從て處斷せよ、犯罪は證據を缺く可からず、有罪者をして親ら告白せしめ、且刑罰の適法に課せらるることを知らしめざる可からず、憤怒激昂に任せて之を課することある可からず』と。

成吉思汗遺骸埋葬の後、一族の公子幷に部族軍隊の長官は袂を分て各〻歸營せり。然るに二年の後に至りて、空位久しきに亙る時は禍患釀生す可きを慮り、相會して皇帝を推選するの議を決したり。

一二二九年の春、諸公子幷に諸將軍は、韃靼（タルタリー）の各地より、克賚倫（ケルラン）河畔の成吉思汗の大斡耳朵に赴けり。（元史には更に曲雕阿蘭之地と記せり、〔太宗元年己丑……八月己未諸王百官、大會於怯綠連河曲雕阿蘭之地（元史二）〕曲雕阿蘭は齊達勒拉 Tsidal-Ola 即ち能山の義なりと云ふ、綱目には太宗庫鐵烏阿剌里（奉鑑阿喇勒 Coulitun-Aral 冷島の義）に即位すとあり、ハに據る。）裏海の北に位せる地方よりは、朮赤（ヂューチ）の諸子、鄂爾達 Ourda 拔都 Batou 昔班 Schiban 唐古忒 Tangcoute 伯勒克 Berca 伯勒克察耳 Bergatchar 幷に脫哈帖木兒 Touca-Timour 來着し、察合台（チャガタイ）は諸子孫と共に伊犁（イリ）河の灌漑せる地方より、窩闊台（オゴタイ）はイミル河畔より、斡（ウチ）赤斤（ユーケン）は女眞の領土に近き東方境上より來集せり。成吉思汗の斡耳朵に於て、諸公子を迎へたるは拖雷（ツルイ）にして、拖雷は新皇帝を推選するの日まで、監國のことを託せられたるなりき。

庫哩勒台 Couriltaï の當初三日間は、宴樂にのみ耽りしが、次で來會せる多數の公子將相は皇帝推選のことを討議したり。拖雷（ツルイ）奉戴の意を抱けるもの少からざりしが、〔那珂博士はドーソンに「察合台は成吉思汗の生き殘れる最長子にして蒙古の相續法に從へば、相續す可き人なりしに多數の發言は拖雷を推さんとせり」とありと云へど（實錄五八四—五頁）、察合台云々の記事は本文には見えず。〕大臣、耶律楚材（エリユイチユツアイ）は斡旋頗る努めて、窩闊台（オゴタイ）の爲に投票を纏め、以て成吉思汗の遺言を貫くと共に分裂の惡結果を避くるを得たり。拖雷も進んでその言を納れ、親から會衆に向て、成吉思汗の嗣君と定められたるもの皇帝たる可しと聲明し、父汗の遺勅を朗讀せしめたり。（ロに據る、ヘには成吉思汗諸子に向て自署して窩闊台を奉戴す可き事を約せしめたりとあり。）諸公子は乃ち窩闊台（オゴタイ）に向て皇帝の位免る可からざるを述べたり。窩闊台は同胞幷に叔父の遙かに皇貴の位に適するを說き、就中拖雷（ツルイ）の常に父汗の左右を離れずして、何人よりも能く大汗に親炙し、その言行を學び、訓戒を受けたるを擧げて固辭せり。諸公子絕叫すらく、『卿を選みて嗣君と定めたるは成吉思汗なり、如何でか父汗の意に背き得べき』と。而も窩闊台は主權者の責任を負ふことを拒み、饗宴四十日に亙りしも、その決心を飜へさしむること能はざりき。然るに魔術士、占星家の最も幸多しとなせる四十一日目に至り、窩闊台は遂に、一族諸公子の熱心なる願意を容れ、兄察合台（チャガタイ）叔父斡赤斤（ウチユーケン）の先導によりて玉座に登りたり。拖雷（ツルイ）は之に盞を捧げ、同時に天幕の內外に集まれる人々は悉く帽を脫し、帶を肩にして、九度窩闊台の前に膝を屈し、フランシスコ派の僧 Udine の Oderic は一三一八年に韃靼地方に旅行を試み、その旅行談を同派の Solanga の Guillaume をして筆記せしめしものに、この屈禮のことを記しあり、『式部長官ふを俟てり。その頭を擧ぐるや、第二の命令は下り、第三の命令之に繼げり。』これ支那の古禮にして、支那皇帝の附庸となれる國王も亦之を行へり。九八一年に宋太宗が後に別失八里 Bisch-balik と呼べる伊吾盧 Y-lo-lou なる畏吾兒王の許に遣せし使節王延德 Vang-yen-te の紀行「王延德高昌行紀說郛に收む唐の伊州は後漢の伊吾盧今日の哈密なるが唐の高昌は和州一に火州卽ち元の哈剌火者なり、而して別先八里卽ち唐の北庭は亂長春西遊記の醫思馬なりとブレットシュナイデルは云へり。」はヴイスドルーによりて佛譯せられ、デルブロー東邦辭典の附錄に收められたるがうちに當時王が東方に向ひて九拜の禮を行ひしことを記せり。　その幸福を祈願し、合罕 Caan（Caan は Khacan の約にして、窩闊台以來、他の三家の汗と區別するが爲に之を用ゐたり、窩闊台 Oegata は蒙古の形容詞にして上の意あり、ラシツドの說明も之に同じ。）の尊號を以て之を祝せり。新君主は、すべての會衆を從へて、天幕を出でて三度膝を屈して、太陽を崇め、斡耳朵の附近に簇れる群衆

も同じく光明を拜したり。再び皇帝の帳幕に入りて、蒙古の諸將は宴會を催して、この大節を祝し、諸公子は玉座の右に諸公主はその左に坐し、夥しき年少男女の奴隷は之に酒肴を捧げたり。窩闊台(オゴタイ)を玉座に陞らしめて、一族の諸公子は、その子孫に忠誠を盡さんことを誓ひ、下の如き奇なる言葉を用ひたり、曰く『我等は、卿が子孫にして、なほ能く叢に投ずるも牝牛に喫はれず、膏に混ずるも狗に取られざる一塊の肉の存する限り、他家の公子を帝位に卽けざることを誓ふ』と。

窩闊台(オゴタイ)は亞細亞各地より掠奪し來れる父汗の財寶を齎らさしめ、之を諸公子諸將軍幷に軍隊に配賦したり。又命じて慣例に從ひて、三日間父汗の神靈に供物を捧げしめたり。又諸延幷に將軍の家族に就き、秀女四十人を選ばしめ、美服を纏ひ、珠玉を飾りて、ラシッドの語を借りて云へば、他界に遣りて成吉思汗に仕へしめたり。この野蠻なる供物の外に更に數頭の駿馬も捧げられたり。

窩闊台(オゴタイ)の政務を視るに方りて、先づ第一に注意せしは、成吉思汗の法令 yassas (札撒)を嚴守せんことを命せしにあり、而も成吉思汗の殂後犯せる罪はすべて之を免したり、耶律楚材(エリユイチユーツアイ)は深く窩闊台(オゴタイ)の手腕を信じ、法規を立て、官吏の位階を定め、爾餘の臣民に對して諸公子の特權を明にし、臣民相互の交際に於て幷に皇帝に對する時に於て守る可き儀式を正さんことを慫慂(ヘチに據る。)

したり。又征服地に於ける蒙古部將の無限の權力を制限せんことを欲したり。卽ち從來蒙古の將校は、獨斷以て人命を左右し、罪人を發見する時は、その家族を擧げて之を死刑に處したりき。耶律楚材(エリユイチユーツアイ)の抗議により、皇帝は審理の手續を定めて、將校をして罪人を處分するに方りて之を遵奉せしむることとなせり。之と同時に每年の貢賦に關しても、初めて規定を立てたり。西方の領土に於ては、すべて成年男子に之を課せしが、支那に於ける蒙古の領土に於ては、舊慣に從ひ之を家に課したり。支那人は、銀、絹幷に穀物を納め、蒙古人は所有の馬牛羊百頭に就き一頭を獻ぜざるを得ざりき。穀物の倉庫は設けられ、汗の使節の往來に便するが爲、驛傳の制も布かれたり。〔太宗元年：勅蒙古民、有馬百者輸牝馬一、牛百者輸牸牛一、羊百者輸羒羊一、爲永制、始置倉廩立驛傳、命河北漢民、以戶計出賦調、耶律楚材主之、西域人以丁計出賦調、麻合沒的滑剌西迷主之（元史二）命河北先附漢民賦調、命兀都撒罕主之、西域賦調、命牙魯瓦赤主之（親征錄）ブレットシュナイデル曰く、蒙古語 Uru は長 Kahal は髯の義にして兀都撒罕とは卽ち長髯を以て名ありし耶律楚材(エリユイチユーツアイ)のことなりと。〕

金人より征服したる地方財政のことに任ぜる耶律楚材(エリユイチユーツアイ)の建策により、この地方は一二三〇年の初、十路に分たれたり、租稅賦課徵收に便する爲、各路に官廳を置き、長官と代理者とをして事務を掌らしめ、支那の學者を之に任じたり〔太宗二年庚寅：冬十一月始置十路徵收課稅使、以陳時可、趙昉使燕京、劉中、劉桓使宣德、周立和、王貞使西京、呂振、劉子振、使太原、楊簡、高廷英使平陽、王晉、曹從、使眞定、張瑜王銳、使東平、王德亨、侯驥、使北京、夾谷、永程泰、使平州、田木西、李天靈、使濟南（元史二）〕。耶律楚材(エリユイチユーツアイ)は一日窩闊台(オゴタイ)に向て、孔子の敎に從て政を施く可きを說き且曰く、天下は之を馬上に得と雖も、馬上を以て之を治む可からずと。窩闊台喜んで之に聽き、爾來次第に學者を官吏に採用することとなれり。（ロ幷に綱目に據る。）

蒙古人は今や主將を奉戴せるより、成吉思汗の大計畫に從て征服事業を遂行せんことを思へり、かくて三大遠征は皇帝推選の總會議に於て決議せられたり。三萬人の一軍は諾延出兒馬昆（綽兒馬罕）Tchormagoun の指揮を奉じて波斯に向ひ、成吉思汗の退却後、印度より歸國して、父汗の領土の一部を領有せる、支丹只拉兒哀丁新興の勢を挫かんとせり。第二軍も亦三萬人より成り、將軍 Gueuktai 肖乃臺 Sounodai 之を指揮し欽察人、Sakassines 幷にブルガル人の定住せる地方征服の任務を帶びたり、この地方は朮赤にして父汗の命に從はば、疾に征服し了りたりしならん。窩闊台は親ら拖雷その他一門の諸公子を從へて發程し、金國征服の事業を完成せんと期せり。（ヘ、チ、イに據る。）

金帝、寗甲速 Ninkiassou 漢名守緒 Schou-siou は、一二二九年に使節阿虎帶 Agouta を蒙古に遣し、成吉思汗の葬儀に際し、その神靈に供物を捧げんとせり。（本文は元史に據れるも那珂博士は阿虎帶の蒙古に使せるは太宗四年にしてこの年の使節は完顏訥申なり、但し訥申は嫣和使なれば弔慰使は、正大五年卽ち一二二八年に派遣せる完顏麻斤出なる可しと云へり（實錄五八八頁）金史十七に五年正月庚辰、遣知開封府事、完顏麻斤出、如大元、弔慰とあり。）新可汗は常に先帝に服從することを拒める君侯より、之を受くることを欲せざりき。

成吉思汗の殂落せるにも拘はらず、蒙古軍は陝西南部に於ける作戰を繼續し、宋帝國の境上に逼れり。一二二七年の年末には、鞏昌府の東南約三十里を距てたる、西和州を圍みたり。知州事、陳寅守備兵と住民との協力によりて勇敢に防禦を試みしも、その遂に蒙古軍の有に歸す可きを見るや、妻杜氏 Lou-schi に向て身を全うするの策を講ぜんことを以てせり。杜氏曰く安ぞ生けるに君の祿を同うし、死するに王事を共にせざるものあらんやと。卽ち毒を仰げり。二子幷にその妻女も亦之に倣へり。陳寅はその遺骸を荼毘に附せる後自ら劍に伏して死せり、賓客の共に死せる者二十八人に及べり。

蒙古軍は一二二八年に於て大昌原（陝西、慶陽府附近ならん）に侵入せるより、金の平章政事完顏合達 Ouanien Tcheng-ho-schang を派遣せしに、能く四百騎を以て、敵軍八千强を擊破し得たり。蓋し金と蒙古と干戈を交へてより旣に十八年にして初めてこの大捷を博せるなり。之が爲に金軍の士氣大に奮ひ、論功行賞は直ちに行はれたり。（正大六年三月乙亥忠孝軍總領、陳和尙、有戰功授定遠大將軍（金史十七））陳和尙の指揮せるこの前鋒は畏吾兒人、奈曼 Maneis（四川西方山地の蠻民ならん）唐古特人、Togantses 幷に漢人亡命の徒より成り、何れも無賴の徒なるも陳和尙の能く之を制御せるより、一度戰場に出るや必ず先登して、諸軍の士氣を振作するを常とせり。蒙古將 Toucoulcou 一二二九年を以て進んで慶陽府城を圍みしより、南京の朝廷は再び幣帛を齎らして使節を蒙古に遣せしが、合罕は之を受くるを欲せざりき。この年窩闊台は、史天澤、劉黑馬 Lu-ho-ma 幷に蕭札拉 Siao-tcha-la の三漢人を萬戶の職に進め、支那軍隊の指揮を委ねたり。又史天澤と劉黑馬とを直隸山西山東各州縣の知事に任命したり。（眞定河間大名東平濟南五路隸天澤、平陽宣德等路隸黑馬（宋元通鑑））

一二三〇年二月大昌原附近に於て、蒙古軍を破りたる金將、樞密院判官移剌蒲阿 Yra-bouca は次で慶陽の圍を解けり。移剌蒲阿はこの成功に得意を催し、拖雷の監國中媾和談判の目的を以て陝西に派遣され、金將に拘留せられたる蒙古の官吏斡骨欒 Oniolo を放免したり、而して之を放つに方りて豪語すらく『我已に軍馬を準備しつ、能く戰はんと思はば則ち來れ』と。この壯語は窩闊台に報告せられたり。

蒙古帝は弟拖雷と共に支那の遠征に上れり（八月）。軍隊は山西に入り、大同府の東北十八里に位せる天成堡等の堅城を襲拔し、黃河を渡て陝西の南部に入り、約六十城を屠りて、進んで鳳翔府を圍めり。

茲に於てか、金の政府は、拖雷の使節に對する待遇の宜しきを得ざりしを悔ゐ、馮延登 Fong-yen-teng と呼べる官吏を遣して蒙古の軍營に到りて、新に媾和の提議を爲さしめたり。窩闊台はこの使節に逼て、鳳翔府の守將に降服を勸めしめんとし、死を以て之を脅かせしも、毫も屈せざりしより、その髭を剃り、捕虜として豐州 Fong-tcheou に送れり。〔金史忠義傳四參看〕

鳳翔府城は將軍按竺邇 Antchar 之を圍めり。金帝は完顏合達、幷に移剌蒲阿が、遷延この要地の急に赴きて圍を解かざるを見、樞密院判官、白華 Bai-coua を遣して、督促せしめたり。兩將は北方の大軍と戰場に角逐し難きを說きて之に答へたり。皇帝は更に命ずるに兵を潼關より進

めて、敵軍と戰ひ、かくて鳳翔城の圍を解く可きことを以てせり。茲に於て兩將は初めて兵を進め、渭水の北岸に於て蒙古兵を攻擊したり。兩軍善く戰ひ、勝敗未だ決せざりしに、この夕、合達と蒲阿とは兵を收めて、復た鳳翔府を救ふことを思はざりき。而も府城は頑强に抵抗を繼續せしにより、將軍按竺邇は長圍の策を講ずることとなれり。かくて先づ、西和州、平涼、慶陽、平遠その他陝西の數城を下し、次で鳳翔府城下に歸りしかば、城內糧食缺乏し守兵復た乏しく、遂に降服の止むを得ざるに至れり（五月）。〔那珂博士は元史三年辛卯春二月克鳳翔攻洛陽河中諸城下之この文誤れり、鳳翔の落ちたるは四月に在り河中の下れるは十二月に在り洛陽の下れるは、又その遙に後に在り、皆この年二月のことにあらずと云へり。（實錄五九六頁）〕

窩闊台は直隸に止まりしが、六月大暑を避けて長城の北五十里なる九十九泉（Yloun-oussoun 湖）の涯に赴けり。既に陝西を占領し了れるより、皇帝は更に金帝の掌裡に殘れる河南を略取せんことを思へり、而も河南は北に黃河の長流あり、西に潼關の堅城、峻嶺の天險と共に屹立し、之を侵さんこと容易ならざりき。茲に於てか、この障害を打破し若しくば之を避くるの策に就て考慮を廻らせしが、偶〻鳳翔府落城後蒙古に降れる、金の官吏李昌國 Li-tchang-go 公子拖雷に向て、南方より河南に入るの策を獻じたり。卽ち鳳翔府より漢中府に進まば、同府城を略取せる後一月ならずして、河南の南境、南陽府下の鄧州に到るを得可きなり。拖雷はこの獻策の、父汗が病床に於て立てたる作戰計畫と相一致せることを認めたり。故に窩闊台に上奏せるに窩闊台は

諸將と議して之を是認し、之が實行を拖雷に命じたり。且北軍も南軍に策應して、翌年二月を以て南京を圍まんことを約したり。蒙古帝は直ちに、搠（速）不罕 Tchoubougan を宋の朝廷に派して、その領土内に軍を進むるの許可を乞はんとせしに、この使節は宋帝國の邊疆なる四川の青野原に至るや沔州の統制張宣の命によりて殺されたり（八月）。〔元朝祕史には成吉思汗甲戌再征の原因として、成吉思差使臣主卜罕等、通好于宋、被金家阻當了と記せり、又陳樫の通鑑續篇にも朔不罕至青野原、金統制、張宣殺之とあり、故に元史太宗紀、睿宗傳は共に本文の如くなれど、元史誤多きにより元史を疑ふものなきにあらず（實錄四四七頁）されど宋史紹定四年（一二三一年）十月大元兵破蜀口諸郡、御前中軍統制張宣、戰青野原有功云々とあれば張宣は宋人なり。〕

この殺害事件は、蒙古人を驚かしむること、却て宋の朝廷より同盟を求められたるよりも甚しく、次で、支那帝國に向て攻擊を試むるの口實となりしが、拖雷は毫も之を意とせず、三萬の騎兵より成れる一軍を糾合して鳳翔の西南九里に當れる、寶雞より進發したり。ラシッドには二萬人とあり。拖雷は先づ大散關の堅城を略取し、鳳州（鳳縣）に城を滅却し、華山々脈を通ぜる峻阪を辿りて南進せり。この山脈は渭水と漢水との灌域を分ち、宋金兩帝國の境界を爲せり、即ち陝西の南部は宋帝國に屬せるなり、拖雷は今やその領域に入り、興元府（漢中府）屬の洋州（洋縣）を屠り、更に同府城を圍んで之を降せり。（九月）。拖雷は漢中府の住民を虐殺し、その多數は避難せる不毛の地に於て餓死せり。拖雷の軍隊の一部は漢中府より西方に進軍し、魚鼈山を超え、嘉陵江を渡りて保寧府地方を横行し、城寨百四十を陷れたる後往きて本隊に合はれり。十一月四

川の北部は蒙古軍に從へり。

拖雷は十二月を以て饒風關（饒峯關 金史）を拔き漢江の涯に舍營せり。その河南の南部に突然現はれて、敵の不意を撞くや、一路擧て狼狽を來したり。金帝は重臣を召して、如何に防禦の策を定む可きやを議せしに、多數の意見は、軍隊を都城附近の府城に配置し、汴京（今の開封府には汴、汴京、汴梁、南京等の別名あり。）に多量の糧食を聚め、郡村の住民に令して、府城に入らしめ、所謂堅壁清野の策を行はんとするに在りき。蓋し蒙古軍は懸軍万里、長途の進軍に疲るるが故に、野戰に於て金軍に打擊を與ふるの機會を得ずんば、糧食の缺乏に苦むの結果、勢ひ退却せざるを得ざらん。然るに金帝はこの意見を好まず、數年來人民は、軍隊を給養せんが爲、あらゆる犧牲を忍べり、今や危難の逼るに方りて、之を遺棄するは不可なりとて、河南の南北境上を守備するに決したり。かくて一團の軍隊は直隸の襄州（順德府 Tchang-te-fou）に他の一團は河南の南境唐州に集まれり。この南軍を組織せる完顏合達と移剌蒲阿との部隊は一二三二年一月を以て鄧州に着し、將軍楊沃衍 Yang-vo-yan 完顏陳和尚幷に武仙 Vou-schan も亦來り加れり。武仙は二年前特旨によりて復た恆山公に封ぜられ、河南省の一部にして黃河の北方に位せる衞州（衞輝府 Vei-hoi-fou）の府治に任ぜられしも、史天澤に攻擊されて衞州を失ひ、黃河の南に退却して部將に任ぜられたるなり。金軍は、南陽府に屬する順陽にその營を張れり。諸將は、拖雷の將に漢江を渡らんとする

を偵知し、〔戊辰、大元兵渡漢江而北、丙子畢渡（金史十七）戊辰は十二月十七日にして丙子は二十五日なり。〕その渡江に際して之を攻撃す可きや將た、暫くその渡江を俟つ可きやを評議したり。拖雷（ツルイ）は南陽府（ナンヤンフ）の西南九里に位せる禹山（ユイ）の麓に好箇の陣地を占めたる敵軍に向て突進したり。激戰の後蒙古軍は衆寡敵せずして退却せしも、敢て追擊を受けざりき。金軍は數日の後に至りて初めて、蒙古軍の棗林に駐屯せるを偵知し、鄧州（テンチユー）に歸りて城内に蓄へたる糧食を費消し、以て軍隊の糧食を節約せんと圖れり。金軍行軍の途偶〻棗林に接せしより、蒙古軍は林中より現はれて戰列を爲せり。合達（カダ）と蒲阿（ブーア）とは之を迎へて戰はんとせしに、拖雷（ツルイ）は敢て堂々雌雄を決せんとせず、一方に於て金軍を惱ましつつ、他方に於て別に百騎を放て、輜重を奪ひ去らしめたり。金將の鄧州（テンチユー）に歸るや、朝廷に上奏するに大勝を博したるを以てせり。金帝は賀表を受け、祝宴を張りしも、この歡樂は永續するを得ざりき。

拖雷（ツルイ）が河南を指して前進せるに方り、窩闊台（オゴタイ）は黃河に接し、山西の南端に位せる、河中府（ホチユンフ）（蒲州府（チユーフ））を攻拔せんとせり。高さ二百尺の松樓を築きて、城中を下瞰し、或は土山を積み、或は地穴を穿つこと、百道、攻擊の手段に於て盡さざるなかりき。既にして城壁上に築きたる木造の樓櫓共に仆れしかば、白兵戰を繼續すること更に十五日、結局包圍攻擊三十五日に及びし後府城は襲拔せられたり（一月）。〔冬十月初三日、上攻河中府、十二月初八日克之（親征錄）太宗三年十月乙酉帝圍河中、十二月己未拔之（元史二）元史に十月とあるは十一月の誤なり。〕窩闊台は、守將、權簽樞密院事草火訛可 Tsa-ho Agué（滿洲語 Agué は帝室皇子の尊稱なり）の手に劍を握つて抵抗せるより之を

死に處せり。元帥板子訛可 Ban-tsé Agué は三千の敗卒と共に船に乘じて脫れ鳳翔（フオンヂヤン）鄉（ヴエンシヤン）に走れり。〔完顏訛可內族也、時有兩訛可、皆護衛出身、一曰草火訛可、每得賊好以草火燎之、一曰板子訛可、嘗誤以宮中牙牌報班齊者爲板子、故時人各以是目之（金史一百十一）〕然るに宦官の讒によりて河中（ホチユン）、鳳翔（フオンヂヤン）失守の責を負ふ可きものなりと目され、汴京（ピヤンキン）に赴くや、死刑の宣告を受けてその命を終れり。

窩闊台（オゴタイ）は拖雷（ツルイ）の飛使を得て、その漢江を渡れるを知り、黃河を超えんと決して、河淸縣（ホチンヒエン）に近き白坡（バイポ）に於て之を渡り、南岸より拖雷（ツルイ）に命じて北上來會せしめたり。〔太宗四年正月戊子帝由白坡渡河、庚寅拖雷渡漢江、遣使來報（元史二）正月初六日、大兵畢渡、乃獲漢船七百餘艘、太上皇（拖雷）遣將貴由、報集軍兵等已渡漢江（親征錄）丙戌、大元兵、既定河中、由河淸縣白坡、渡河（金史十七）丙戌は正月五日にして戊子は七日なり、故に那珂博士は五日に渡り始めて、七日に渡り終へたるにやと云へり。又九日に至り拖雷の使者貴由到着せるにて本文聊か誤る。〕金國政府は防禦の一策として、堤防を決潰して都城に汎濫せしむ可しとの命令を下し、點檢、狹谷撒合 Kiacoussaho は步騎三萬の兵を以て、黃河守備の任に當れり。然るにその漸く、封丘（フオンキユー）に至るや、合罕の既に渡河せりとの情報を得て踵を返せり。蒙古軍は何等の抵抗にも遭遇せずして、突然無數の人夫の堤防決潰作業に從事せる處に現はれ、容赦なく之を虐殺し盡せり。

この間拖雷（ツルイ）はその軍を小部隊に分ち路を異にして河南に入り、廣く地方を掠奪し、抵抗を打破して進みたり。鄧州（テンチユー）に於て一度集合せるよりは、金軍を追跡し、金軍は又、拖雷の前進を監視しつつ徐々に退却せり。蒙古軍はその舍營に就かんとするに方りて襲擊を之に加へ、之に逼てその

天幕を遺棄せしめたり。背進に際して絶えずかくの如く惱まされ、雨雪によりて進軍を妨げられ、疲勞と饑餓とに苦められ、漸くにして鈞州（禹州）を距る二里半なる黄楡店に達せし時、宮中の一宦官は來りて、帝都救援の爲速に進軍す可しとの命令を傳へたり。

金軍は進んで鈞州附近なる三峰山の麓に陣せり、時に軍士のうちには食せざること三日に及びしもの少からざりき。然るに拖雷の兵と、之と聯絡を通ぜんが爲南進し來れる窩闊台の兵とは相合して金軍を圍めり。金軍は腹背敵を受けたるを見、鈞州に至るの血路を開かんとして、蒙古兵の陣列に向て突貫を試みたり。金將の多くは步兵の先頭に立ちて奮鬪し戰場に仆れたり。完顏合達は敵の重圍を破りて鈞州城に入るを得たり。窩台の增派したりし援兵は、勝敗決したる後に至りて初めて到着したり。拖雷は直ちに鈞州を圍み、之を廻らすに塹壕を以てして何人も逃走するを能はざらしめ、遂に之を陷れて將軍合達を得斬に處せり綱目その捕虜となるや速不台の許に案内を求めたり。速不台問ふて曰く、『卿の命剎那を剩すのみ、余を見んとするは何が故ぞ』と、完顏合達答へて曰く、『卿の勇猛これなり、英雄を生むは天なり、偶然のことにあらず、既に卿を見たり、今や眼を閉づるも遺慨なし』と。（アーベル・レミュザー『新亞細亞雜纂』第二册九六頁、速不台傳參照（與合達耳、今合達爲我殺、黄河爲我有、不降何待）（金史百十二）

戰勝に乘じて兇暴至らざるなき兵士の稍〻鎭靜に歸するや、同じくこの州城に匿れたる將軍完

顏陳和尙はその避難の地を出でて親ら金帝國の一將軍なるを標榜し、蒙古軍の首領と會見せんことを求めたり。かくて導かれて拖雷の許に到るやその間に答へて曰く、『我は忠孝軍總領陳和尙なり、大昌原、衞州、倒回谷の勝は我なり、我亂軍の中に死せば人將に我は國家に背けりと云はんとす、今や天下余が如何に死せるかを知り、毫も余の忠誠を疑ふ者なからん』と。玆に於て極力降服を勸めしも、毫も應ぜざるより、蒙古兵は、その膝を屈せんとして、兩脚を斷ち、口を割きて耳に達せしも、降服せずと叫んで止まざりき。蒙古の諸將その志操の堅實なるに感じ馬湩 Coumiz を地に注ぎて、感嘆の辭を以て之に告げて曰く、『好男子よ、他日再生せば當に我等の中に回生すべし』と

二

將軍移剌蒲阿は帝都に向て走らんとするの途に於て虜にせられ、縛せられて窩闊台の營に至れり。窩闊台は百方降服を勸めしも、蒲阿は我は金國の大臣なり、惟當に金帝に忠節を守るべきのみと反覆して止まず遂に死刑に處せられたり。かくの如くにして金帝の良將は死し、その軍隊の精華も亦盡きたり。元史、綱目幷にロに據る。なほ卷末に添えたる附錄註第一は、〔太宗四年正月甲午次鄭州、金防城提ラシッドより拖雷のこの役に關する記事を抄出せるものなり。〕挖馬伯堅降、授伯堅金符使守之、丙申大雪、丁酉又雪、次新鄭、是日拖雷及金師、戰於鈞州之三峯、大敗之、獲金將蒲阿、戊戌帝至三峯、壬寅攻鈞州克之、獲金將合達（元史二）上於正月十三日至鄭州守城馬提控者以城降、……太上皇（拖雷）正月十五日至鈞州、雪作、上遣大王口溫不花、國王答思將軍兵至、十六日雪又作、是日與哈答移剌合戰於三峯山、大敗之、遂捦移剌、十七日上行視戰所、佳之、二十一日克鈞州、哈答匿於地穴、亦捦之（親征錄）天興元年正月甲午大元兵薄鄭州、與白坡兵合、屯軍元帥馬伯堅以城降、防禦使烏林荅咬住死之、丁酉大雪、大元兵及兩省軍、戰鈞州之三峯山、兩省軍大潰、合達、陳和尙、楊沃衍走鈞州、城破皆死之、樞密副使蒲阿、就執、尋亦死、（金史十七）由是觀之　太宗は正月十三日鄭州に至り、十五日拖雷に援兵を遣し十六日三峯山の戰ありて蒲阿を擒

にし、十七日戰場を視察し、二十一日鈞州を下ししなり、本文聊か誤る。〕

鈞州占領後數日にして、窩闊台は弟拖雷の營を訪ひ、直接拖雷の口より、遠征軍の鳳翔府を出發せるより以來、百般の困難に遭遇し、殊に糧食の缺乏に苦しみ、士卒は雜草人肉を食ふの甚しきに陷りしも、能く百難を排し得たるの事情を聽くを得たり。合罕は拖雷が能くこの危險なる計畫を實行し得たることを賞讃したりしに、拖雷は、この成功を見たるは全く、士卒の勇敢にして、堅忍不拔の精神を有せると、窩闊台の軍隊の天佑を受けしが爲とに外ならずと答へたり。（チ、ロに據る。）

初め拖雷の饒風關に入れりとの情報を得るや、金帝は、河南西境の守備に任ぜる軍隊に向て都城の急に赴かんことを求めたり。茲に於てか、黃河々畔鬨鄉の行省たる徒單兀典（圖克坦烏登 Touctan Ouděng）要地潼關の總帥たる、納合合閏（納哈塔赫伸 Bakhata Khéyouï）幷に陝西西部秦州藍州の總帥たる完顏重喜 Ouanien Tchounssi はその部下を合して、步兵十一萬騎兵五千を得、（三月）鬨鄉の東北數里を距てたる黃河南岸の陝州に向つて前進したり。その守備に任ぜる地方より撤退するや、諸將は、同州府、華州、鬨鄉の倉廩に貯へたる糧食を東に運搬せんとし、黃河を下るの用に供するが爲、舟二百艘を集めしも、蒙古軍はその積込に着手せざるに先て來りて之を奪へり。蒙古軍の潼關に近づくや寡兵を以て之を守れる金將李平（Si-ping は誤）はこの河南の門戶を敵の掌裡に委し（三月）、加之金軍を攻擊するに方りて必要なる知識を授

けたり。蒙古軍は何等の妨害を蒙らず陝州に向つて前進したり。帝都のこの方面掩護の重任を負へる金軍は主將徒單兀典を始として東南を指して退却し、蒙古の兵刃を恐るる地方の老幼男女は悉く軍後に隨へり。その鐵嶺の險に至るや、蒙古軍追及し來りしに、積雪融解して、道路殆んど通ぜず、陣後に殘されたる老幼は容赦なく蒙古兵に虐殺せられたり。饑餓と困憊とに苦められて、士卒は防戰するの力なく、完顏重喜は降參せしも蒙古軍はその頭を刎ね、兀典と合閏とは追及せられて殺されたり。

鈞州を占領せる後蒙古軍は河南の十四城を下せしも（三月）、歸德府と洛陽（河南府）とは之を陷るるを得ざりき。〔親征錄「又克昌州廓州嵩州曹州陝州洛陽濬州武州鄧州應州壽州遂州禁州等來降」元史「遂下商虢嵩汝陝洛許鄭陳亳潁壽睢永等州」何秋濤は親征錄に昌廓應遂禁とあるは商虢潁睢永の音訛ならんと云へり、又金史にも二月乙丑、大元兵攻歸德、三月丁亥、大元軍平中京、留守撒合鬘、投水死とあれど那珂博士も既に平中京は誤れり。中京は卽ち洛陽にして元史下せる諸州の名を列記したる中に洛の字あるも非なり云々と辯ぜり（寶錄五九七頁）〕洛陽の守備兵は、三峯山役の敗殘の兵三四千人より成り、大軍を以て之を圍むこと三箇月に亙りしも、遂に之を降すこと能はざりき。

汴京四近の府城は多く陷落せるより、窩闊台帝は首都の西十四里なる鄭州附近に本營を定め、數年前波斯、ドニエプル河畔、黑海沿岸を蹂躙したりし將軍速不台を派して、之を圍ましめたり。

汴京京城は方形にして、周廻約十二里なりき。守備兵は四萬人を數へしも、以て防備に充つる

に足らずと認められたり。故に黄河の沿岸に配置したりし部隊幷に黄河の北岸に位せる衞州（衞輝府）に於て募集したる義軍を入城せしめたり、その數約四萬を數へたり。最後に汴京に避難せる地方の住民に就きて、二萬の青年を得て之を武裝せしめたり。かくて京城の四面を防禦し得るの策を立て、別に各方面に飛虎軍と稱する千人宛の豫備兵を配置し、最も危險なる地點に援助を與へしむることとなせり。金帝は又民衆をして熱狂せしめんと欲し、翰林學士、趙秉文 Tchao-ping-ouen をして、悲愴なる諭文を草せしめしに、果してこの諭文は甚深の感動を與へたり。

汴京包圍攻擊の開始せらるるや、蒙古汗は暑を避けて、長城の北に赴かんと欲し、鄭州より使節を金帝の許に派して降服を勸めたり。その要求は、翰林學士趙秉文、幷に孔子の後裔なる孔元措その他の學者を遣り、質として二十七名家を交附し、蒙古人に服從したるものの家族幷に將軍移剌蒲阿の妻子を引渡し、最後に剌繡に熟せる女子、放鷹に通ぜる壯夫を送らんことを求むるに在りき。金帝は悉くこの要求を容れ、且交渉中の質として兄荆王の子訛可 Ouco を遣さんことを提議し、（那珂博士は訛可は哀宗の弟荆王守純の子なり（實錄五九八頁）と云へど、金史には荆王守純宣宗第二子也（九十三）又、哀宗、宣宗第三子也（十七）とあり。卽ち荆王は哀宗の兄なり。劉祁の歸潛志（卷十一）には封皇兄荆王守純子肅國公某爲曹王、命尚書右丞李蹊等奉以爲質子云々とあり。）諫議大夫裴滿阿虎帶 Foimo Egoudé をして往きて和約を締結せしめんとせり。かく降服の意を表はせるにも拘はらず、將軍速不台は、その攻擊の計畫を着々と

して進捗し、余は首府包圍の命令を受けたるのみにしてその他を知らずと云ひ、弩砲の裝置に從事せり。婦女老幼を問はず幾多の捕虜は、束柴と雜草とを運びて、塹壕を塡充せんとせり。媾和の交渉を妨げんことを恐れ、平章政事、完顏白撒 Ouanien Baksan は蒙古兵に對して攻擊を加ふることを禁じたり。この命令の不平を釀せしを見、金帝は馬に跨り、數騎を從へて、都城を巡視せしに、一隊の軍人は來りて、敵軍既に塹壕の半を塡充せるに方り、防禦の爲に戰ふ能はざるは忍び難き所なりと訴へたり。金帝は之に答へて曰く、『朕は生靈の故を以て、臣と稱して進奉し、順從ならざるなし、唯一子あり、養ひしも未だ長成せず、今往きて質子となる矣、汝等暫く忍んで待て、曹王出でも韃靼退かずんば汝等死戰するも未だ晩からずと。』この日曹王訛可は尙書左丞李蹊に送られて出發せしも、而も、攻擊は依然として繼續せしより、金帝は蒙古人の背信を憤りて、臣民に防禦戰を試むることを許せり。

速不台は都城の城壁に對して竹林中に無數の弩砲を据え、石塊を投射したり。同じ地點に向て間斷なく投射すること、數日の後に至り、これらの石塊は積んで、殆んど城壁の高さに達したり。城壁上の高塔望樓は曾て宮殿に用ひたりし良材を以て之を造りしも、忽ちにこの無數の投射物によりて粉碎せしめられ了りぬ。故に攻擊の鋭鋒を避くるが爲、馬糞と麥稈とを混じてこの造營物を覆ひ、更に之を包むに、紐にて緊縛したる氈幷に牛革を卷きて楯の如くせる板を以てせり。玆

に於て蒙古兵は弩砲より火を發射して以て之を燒けり。然れどもその弩砲は、緊密鐵の如くなれる粘土の城壁に對しては僅に之に凹所を爲れるのみ。蒙古軍は又、城外の塹壕に近く土壘を築き、之を繞らすに幅と深さと各〻十尺の塹壕を以てせり。この土壘は周廻十五里を有し、砲眼を設け、三四十步每に高樓を築きて守備兵を配置し、各〻百名の士卒を之に收むることを得しめたり。

城中の守備兵は發火せる投射物を利用せり。これ卽ち一種の火藥を塡充したる火の壺にして弩砲を以て之を發射する時は、火藥に着火して、その作用は百二十步の遠きに及べり、而もその爆發するや轟然として雷鳴の如く、十里の遠きに聞えたり。この投射物を稱して震天雷（チエンチエンリ）と稱せしが、卽ち雷電の義なり。他の礮は石彈を投ずるの用に供せられたり。〔北兵攻城益急、砲飛如雨、用人葫脫或半磨或半碓、莫能當、城中大砲（一作火砲）號震天雷應之、北兵遇之火起亦數人灰死（一無灰字）（歸潛志卷十一）〕

城壁を破壞せんが爲蒙古兵は矢の能く穿つこと能はざる牛革を被りて之に近づき、城壁の下部に穴を鑿ちて之に舍營せり。城中の兵は火壺を堅牢なる鎖に附着して、坑道兵の舍營せる高さに垂下しその爆發により之を粉碎したり。又火藥を塡充せる火槍を用ゐ、四周十步以內に於て到る處に火を放てり。蒙古兵の最も恐れしはこの二種の投射物なりき。

間斷なく攻擊すること十六日に及び、兩軍の死者を合計する時は百萬に達せしと傳へられたるが、速不台（スブタイ）は都城陷落の望を絕ち（五月）、守兵に告げて媾和の交涉中なるが故、戰鬪を繼續する

は無用なりと云へり。金帝はこの提議に滿足し、戶部侍郎（楊居仁）をして蒙古の兵營に餞別を齎さしめたり。これ卽ち黃金絹布その他の貴重品にして、速不台（スブタイ）の將校に分配せらる可きものなりき。速不台（スブタイ）は退却を約し、而して實にその兵營を黃河と洛水との間に移せり。

圍解くるの後一月（六月）都城に於て傳染病發生し、猖獗を逞うすること五十日、夥しき死者を出したり。この間柩の城門を出でしもの約九十萬を數へしが、埋葬の式を擧ぐること能はざる貧民は勿論之に加はらざりき。

媾和談判の交涉中、蒙古の使節唐慶（タンチン）は、汴京（ピヤンキン）に赴くの途上、宿舍に於て、隨行三十餘人と共に金兵に殺されたり（八月）。この兇行に對し刑罰加へられざりしより談判は破裂し、速不台（スブタイ）は再び戰鬪を開始す可しとの命を受けたり。蒙古人は又金帝に對して他に不快を感ずることありき、そは金帝が、長官の怒に觸れて、守備に任ぜる山東の數城を擧げて、金に降れる蒙古の一將軍を任用し、之に公子の待遇を與へたることこれなり。

帝都の圍まれし時、金帝は援を將軍武仙（ヴーシヤン）に乞ひしが、武仙は三峯山（サンフオン）附近に於て敗績せる後、南陽府（ナンヤンフ）に退き、同地に於て金軍敗殘の兵を糾合して、新軍を組織し、之を率ゐて、留山（ルー）附近に陣を占めたり。鄧州（テンチユー）の行省參知政事完顏思烈 Ouanien Ce'e 幷に陝西、鞏昌府（クンチヤンフ）の總帥、完顏忽斜虎 Ouanien Khoutakhou も等しく進んで汴京（ピヤンキン）を援ふ可しとの命を受けたり。武仙（ヴーシヤン）は帝都を距る二

十二里の密縣まで前進して、蒙古兵の前方に屯せるを見、完顏思烈に書を遺りて暫く行軍を中止し、その至るを俟て相共に行進せんことを求めたれど、完顏思烈は、兼程汴京に赴かんと欲し、その進路を變更するを欲せず、而してその軍は京水の附近に於て蒙古軍に遭遇し、戰はずして潰えたり（九月）。この潰走の情報を得るや、將軍武仙の軍も亦同じく奔竄して南陽府留山の陣地に歸れり。武仙に聲援を與へんが爲、一隊の兵を率ひて、都城より分派されたる樞密使、赤盞合喜（遲嘉喀齊培 Tchiga-Katsika）は、この退軍の報に接するや、夜中輜重を棄て倉皇汴京に歸りたり。

かくの如く戰敗は戰敗に次ぎ、有力なる救援の期待は全く奪ひ去られたり。蒙古兵の交通を斷てるより、帝都の窮乏は益〻甚しきを加へたり。〔壬辰歲、余在大梁、時城久被圍、公私乏食米一升至銀二兩餘、死者相望、人視金銀如泥土、使用不計、士庶之家、出其平日珠玉玩好妝具環珮錦繡衣衾、日陳于天津橋、市中惟博齋升合米豆以救朝夕、嘗記余家一裘袍、極緻密鮮完博米八升、金鈔易牛肉一肩、趣售之（歸潛志卷十二）〕從來の損失甚しき結果、復び、包圍攻擊を受けて、之を擊退せんことは思ひもよらず、金帝篤甲速は遂に汴京を去るの決心を立つるに至れり。之が防禦の重任を託せられたる、樞密副使、兼知開封府權參知政事、習捏阿不（薩尼雅布 Saniabou）の下には內城外城の守將各〻一人幷に東西南北四面の元帥を配置したり。金帝は守備の將士に府庫の器皿幷に宮人の衣服を賜ふて之に感奮して壯烈なる抵抗を試みしめんとせり。汴京に太后、皇后、諸妃を留めて、金帝は幾多の護衞兵を從へ、路を東に取れり。この

日鞏昌府の總帥、完顏忽斜虎恰もその部隊を率ひて來會し、都城西方の地は三十里の間全然劫掠せられたれば、往來不可能なりと奏上せしより、篤甲速は東方に向へるなり。かくて歸德府より糧食を得て之を士卒に分配せる後、（一二三三年二月を以て）汴京を距る約二十里なる、曹縣附近に於て黃河を渡れり。金帝辛じて北岸に至るや北風大に作りて、後軍は濟ること能はざりき。時に速不台の金帝を追擊せんが爲派遣したる蒙古の一隊は追及し來り、茲に激戰起りて金軍の將校中その一人は捕虜となり一人は蒙古軍に降り、約一千の士卒は溺死したり。

金帝は河北領土の一部を回復し、この方面の作戰によりて、都城に對して必要なる牽制運動を行はんことを思へり。乃ち平章政事、完顏白撒に命じて住きて衞州を奪はしめんとせり。白撒は兵士をして途上至る處に於て掠奪に出でしめしを以て、地方の住民は爭て難を衞州に避け、城內の民をして恐怖の念を抱かしめたり。故に白撒は城壁の下に如何に官軍の軍旗を揭ぐるも、城門を開かしむること能はず、數日の後、蒙古軍の近けるを偵知するや退却の得策なるを認むるに至れり。實に將軍史天澤は敏活に直隸山東の軍隊を糾合して、衞州に到着し、白撒を追擊して、白公廟の附近に於て全く之を破れり。白撒は往きて親ら敗報を皇帝に上奏し、且急に河南に退却せんことを獻策し、歸德府の避難地に適するを說けり。金帝はこの獻策を容れ夜に乘じて、副元帥合里合 Khorkho その他六七人の將校と共に小舟に乘じて再び黃河を濟りて歸德府に到着

したり。軍隊は翌日皇帝の南渡して在らざるを知りて解散したり。

皇帝は將校の一人に命じて、汴京に至りて太后と皇后とを迎へしめんとせり。兩名は一旦城外に出でしも、敵の兵火を見て、遽かに踵を廻らしたり。窩甲速の都城を去れるを聞くや、速不台は再びこの都城を圍むの目的を以て汴京の西南四十里に位せる汝州を發したり。

汴京の住民は、山東方面の軍隊、皇帝の北渡によりて、勇氣を回復せば、必ず捷報に接し得可しと信ぜしに、今やその戰敗の報に接して、最後の希望を失へり。速不台は終日都城に肉薄し、爲に食糧の市價は忽ちにして暴騰し、貧民は饑餓に仆れ、官吏もその妻と共に路上に食を乞ふものあるに至れり。或は妻子の肉を食へるものあり、或は皮革を煑て之を食せるものあり家屋は破壞せられて、燃料に供せられたり。住民は窩甲速が人を派して兩后を迎へんとせるを憤り、之を以て首府の安否を念とせざるの證なりとなせり。兇暴にして亂を好める汴京の西面元帥崔立 Tsoüi-li は人心の激昂と民心の不安とを利して、權勢を簒奪せんと企てたり（二月）。先づ面前に於て、知開封府完顏習捏阿不、參知政事、兼樞密院副使完顏奴申（完顏訥蘇肯 Ouanien Nassouhana）その他の大官十人を殺さしめ、次で宣言を公にして、その曠職の罪、死に當することを唱へたり。崔立は兵を擁して宮中に入り、新に主將を推戴するの問題を議し、その提議に基き、北軍の軍中に滯在せる衞王の子完顏從恪 Ouanien Tsoung-ko を監國となし腹心の徒を

して、太后の命と稱して、往きて之を汴京に迎へしめしかば、從恪は之に從ひ、監國に任ぜられたり。崔立は親ら、太師、都元帥、尙書令、一人の弟を平章政事と爲し、他の一人を殿前都點檢と爲し、その黨與は悉く官職を授けられたり。既に政權を掌裡に收むるや、崔立は之を確守せんとせば、蒙古の保護を受くるに如かずと爲し、降を速不台に乞へり。速不台は汴京の城門に接せる小都會青城に近きしに、崔立は身に御服を纏ひ、堂々たる扈從と共に之を迎へ、且父に對するの禮を以て之を待てり。都城に歸るや、その誠意を蒙古軍に示さんが爲、城壁上に築きたる、木造の高塔望樓に火を放てり。次で又監國その他の皇族を宮城中に幽閉して、股肱の士をして之を監視せしめ、親ら宮中に住ひ、寶庫に藏せる玉石その他の貴重品は固より、皇帝、皇后の禮服をも、速不台に遣りたり。又窩甲速と共に都城を去れる大官の妻女を引見して、その容色あるものを己が許に留めたり。市民には命令を下して、その藏せる金銀を齎らさしめたり。この命令に次で家宅搜索は行はれ、貪慾にしてその財寶の一部を隱匿せんと試みたるものは、夥しく、虐殺せられたり。

崔立のその妻と共に太后皇后に謁するや、兩后はその所謂、功績に報ゐんが爲なほ能く所有せる貴重品を擧げて之に下賜せしに、崔立はこの際、太后に諷するに、書を窩甲速に寄せて、蒙古兵に降參せんことを說かしめたり。金帝の乳母この書を携へて、歸德府に派遣されし後、崔立は

遂に太后王氏 Ouan-sché 皇后徒單氏 Touctan 監國梁王完顏從恪、荆王完顏守純 Ouanien Scheou-schoun をはじめとして、諸妃嬪、幷に宗室男女約五百人を執へ、三十七輛の車に分乘せしめて、青城に至りて之を速不台に交附したり（五月）。その他又、孔夫子五十一世の後裔にして、聖賢と目されたる孔元措、法律に精通せる學者、道士、和尚、醫師、工人、繡工、俳優をも遣れり。速不台は宗室の公子を殺し、兩后と妃嬪とは之を合喇豁嚕木 Cara-couroum に送れり。〔金史には碎不解圍汴京擄金妃后及宗族北去とあり。〕史に傳ふる所に據れば兩后はこの旅行に際し、必要品の缺乏せるより極めて艱楚を嘗めたりと云ふ。速不台の汴京に入らんとするの日、崔立は之を城門に迎へて、宮城に嚮導したり。崔立の之に忙殺さるるに際し、蒙古兵は、その邸宅に寶玉を藏せるを知り、先を爭ふて亂入して掠奪を試み、その妻妾をも奪ひ走れり。

初め汴京の陷落近きにあるを知るや、速不台は急使を蒙古なる窩闊台帝の許に派して、同都城の久しき抵抗を試み、部下の將士の傷けられたるもの夥しきを說き、その結果として之を虐殺するの許可を求めたり。蓋し、成吉思汗の法律に從へば、包圍せられたる都會の攻擊を受くるに先ちて降らざりしものは、すべて屠らる可き規定なり。この要求ありと聽くや、耶律楚材は皇帝の許に赴き、汴京の住民の陛下の臣民たらんとするを說き、且住民中には、有爲の工匠技藝家少からず、就中熟練せる弓矢甲仗の工人の如き有用なる民の虐殺を許さば、これ親ら戰勝の利益を棄つるも

のなりと辯じたり。窩闊台はこの諫を容れ、速不台に命じて、完顏氏を稱せる帝室の一族をのみ屠らしめたり。耶律楚材はかくの如くにして、夥しき住民の生命を救ひ得たるなり。當時汴京には、地方より避難せるものをも併せて、約百四十萬の家族の滯在せるものありと云ふ。〔元史耶律楚材傳には時避兵居者汴得百四十萬人とあり、可從。〕楚材は又、攻擊して陷れたる城中の住民は悉く之を虐殺す可しと規定せる殘酷なる法律を廢止せしむるを得たり。

歸德府に到着せる後まもなく、金帝は、河北敗戰の責任を白撒に歸せる軍隊の意を迎へて、之を軍法會議に附し、死刑の宣告を與へて、刑罰を加へたり。然るに元帥、蒲察官奴 Foutcha-Kouannou は尙書左丞相李蹊、知歸德府事、その他約三百人の大官を虐殺せる後政權を奪へり（四月）。

初め元帥官奴の母は衞州なる白公廟附近に於て金軍の敗北せる後蒙古兵の捕虜となれり。金帝は歸德府の南約二十里に位せる亳州攻擊中の蒙古將軍、忒木解 Témoutaï を紿かんとし、官奴に命じて、若し母を還附せば皇帝に逼りてその要望せる條件を容れしむ可し、との意を忒木解に致さしめたり。忒木解はその母を還附して、交涉を開始し、兩將は數〻會見を行へり。而してこの間祕密に、襲擊の計畫を立て、遂に忠孝軍の精銳四百五十人を率ゐて、夜に乘じて不意に忒木解の營を襲へり（六月）。その士卒の一部の携帶せる火槍〔槍制、以勅黃紙十六重、爲筒、長二尺許、實以柳炭、鐵滓、磁末、硫黃、砒霜之屬、以繩繫

槍端、軍士各懸小鐵罐、藏火臨陣、燒之焰出槍前丈餘、藥盡而筒不損、蓋汴京被攻、已嘗得用、今復用之、(金史百十六蒲察官奴傳)〕は、夜襲によりて生ぜる蒙古兵の狼狽を益〻甚しからしめたり。忒木觧は倉皇圍を解きて、河流を越えて退却せしかば溺死者三千五百人を出せり。而して官奴は火をその營に放ちて歸德府に歸り、この襲擊に對する報酬として參知政事兼左副元帥に任ぜられて政府の實權を握り、皇帝は唯虛器をのみ擁するに過ぎざりき。

茲に於てか、河南南部蔡州(汝寧府)息州、潁州等の便宜統帥たる、烏古論鎬 Oucoulun-hao は都を蔡州に遷さんことを皇帝に建策したり。皇帝も亦心之に傾きしも、官奴は皇帝を他に奪ひ去らんとするの策に就て語るを欲せざりき。寧甲速はこの抑壓を脫せんとするに於ては、官奴を除くの外他に策の施す可きものなかりしを以て、その事に由て入內せんとするに際し、二人の侍臣をして、之を刺さしめたり。

寧甲速の蔡州に赴かんとせるには更に他に有力なる動機の存するありき。初め金の唐鄧行省武仙は河南々部の順陽に在りて七萬の軍に將たり、勿論武仙に對しては間もなく宋帝の軍隊によりて有力なる攻擊加へられたり。窩闊台は前年使節(王擴)を宋帝の許に派して金に對して攻擊的同盟を提議せしめしに、宋帝理宗 Li-tsong は宿敵を仆すの好機到れりとなし、金の滅亡後河南の地を回復し得可しとの條件に對し、同地方に出兵せんことを約束したり(一二三三年一月)。宋軍は京西路兵馬鈐轄、孟珙 Meng-kong 之を指揮し、武仙を馬磴山附近に破りその山中に於

て占領したりし九砦を拔き、敗殘の兵の降服せるものを收容したり(八月)。境上の都會鄧州を陷れたる後、孟珙は湖廣の襄陽府に還れり。

是より先金帝は、護衞兵三百人を從へて蔡州に向ひしが、騎兵はそのうち五十人に過ぎざりき。同州城に着するや、良將にして且經國の才ある、完顏忽斜虎 Ouanien Houschahou を尙書右丞と爲し、政治の局に當らしめたり。新丞相は撓まずして一軍を組織せんことに盡力し忽ちに騎一萬の部隊を整ふることを得たり。かくて皇帝を陝西の鞏昌府に奉ぜんと欲せしが、皇帝近侍の臣は河南を遠かるを嫌ひ、その絕えず皇帝を說きしが爲、この退却の計畫は放棄されたり。蒙古兵の附近にあらざるより皇帝は大に心を安んじ、淫靡の生活を思ひ、宮中の少女を進め、高樓を營み、宴樂の地を設くることを命令したり。〔七月己酉(七日)選室女、備宮中使令、已得數人、以右丞忽斜虎諫、留識文義者一人、餘聽自便(金史十八)〕忽斜虎は皇帝を諫めて危難の身に逼れるに際し、かかる惰弱なる思想を放棄せしめしが、蒙古兵は果して金帝をして長く蔡州に於て晏如として休息することを得ざらしめたり。塔察兒(爾)Tatchar は之を攻擊するに先ちて洛陽(河南府)を拔かんとの方略を定めしも、その軍より士卒を分派して忽ちにして、蔡州附近に出沒せしめたり。既に述べたるが如く、洛陽は夙に圍を受け、河北の役に於て金朝の爲に大功を奏したりし、强伸 Kiang-schen 中京留守、行總帥府事として之を守れり。塔察兒の來て之を圍むや、城中糧食缺乏し守備兵亦寡く、以て長く抵抗するを

得ざりき。強伸（キャンシエン）は百計盡くるに及び、親ら死士を率ゐて敵陣に向て突貫を試み一條の血路を開かんとせしが、遂に力盡きて捕虜となれり。塔察兒（タチャル）はかかる勇敢なる將校を旗下に從へんことを欲し、強伸（キャンシエン）に逼て北面して膝を屈して、窩闊台に忠誠を表せしめんと欲せしも、この勇將はその頭を南向せしめて、窰甲速（ニンキャスー）に敬意を表し、遂に殘殺せられたり。〔六月壬午、中京破、留守兼便宜總帥强伸死之（金史十八）〕

塔察兒（タチャル）は成吉思汗四駿〔木訶里（木華黎）……與博爾朮、博爾忽、赤老溫、事太祖、俱以忠勇、稱號曰班曲律、猶華言四傑也（元史木華黎列傳）蒙兀兒史記は蒙古秘史に朵兒邊曲魯兀惕とあるにより朵兒邊數之四也、曲魯兀惕は同書卷一傍解謂駿、とて四駿と解せり可從。〕の一人なる諸延、博爾忽勒（ボルグール）の子なるが、洛陽（ロヤン）陷るや乃ち蔡州（ツァイチュー）に薄り（十月）長壘を築きて之を圍めり。而して十一月に至るや、宋帝が蒙古との同盟條約に從ひて進軍せしめたる、二萬の支那兵は孟珙（メンコン）幷に江海（キャンハイ）を將として、來會し、且この援兵は塔察兒（タチャル）に米三十萬石を齎らせり。

包圍攻擊二箇月の後、城内に於ける糧食の缺乏甚しく、人肉を食ふに至れり。疾病も亦猖獗を極めたり。出陣し得可き男子は悉く武裝し、少壯屈竟の女子も亦男裝して、防禦に要する木石運搬の任務に當れり。攻擊數回に亙れる後、蒙古兵と支那兵とは協同して强襲を試み、城壁の一部を占領し得たり。然るに驚く可し、前面には更に深濠を廻らせる第二の堡壘の存するものありき。而も窰甲速（ニンキャスー）は敵軍の軍旗の外壁上に樹立さるるを見るや、その運命の數奇なりしを悲みて、その最後の決心を表するに至れり。即ち近侍の臣に語て、朕の治世十年に及べるも而も大罪惡を犯さず大禍失に陷らざりしは朕の信じて疑はざる所なり、然るに今や將に暴君虐主とその天命を等うせんとす、朕は決して死を恐るるものにあらず、而も、一世紀間國運隆々たりし帝國亡ぶる時の君と爲り、史上失政によりて社稷を亡ぼせる帝王と混同せられんことは朕の痛憤して已まざる所なりと云へり。更に語を添へて曰く『亡國の君は往々にして人の囚繫となり、或は俘獻と爲り或は階庭に辱められ、之を空谷に閉す、朕必ず此に至らず、卿等之を觀よ、朕が志決せり矣』と。而もなほ窰甲速（ニンキャスー）は身を以て脫するの策を講じたり。その所用の器皿を守備隊の將校に分配し了て少數の兵士を從へ、夜に乘じて、平民の服を纏ふて、東門を出でしも、警戒せる敵の前哨に妨げられてその志を達せず空しく州城に還御せり。次で愛馬を殺して守備兵を犒ひたり。

新年の元旦（一二三四年二月）、饑餓困憊の極に達せる城中の兵は、蒙古の軍營に於て例年の如くこの嘉例を祝し、絃歌の聲盛んに湧けるを聞きて思はず歎息せり。城中にありては、糧食全く缺乏し、その口を糊するが爲、鞍、靴、廢鼓等に至るまで、調理し得可きものは、悉く之を煮、又人骨、獸骨、雜草を以て、粥を作り、之によりて滋養を得たり。老人、病者、捕虜、負傷者等も亦食料に供せられたり。孟珙（メンコン）は降卒の口より城中困厄の狀を聽き、奇襲を試みて、城を陷れんとし、その軍隊は口に枚を銜み、雲梯を運びつつ前進し、西方の城壁に五箇處の罅隙を設けて城中に入り、激戰日沒に及べり。かくて多大の損害を受けて退却せしも、城中の兵も亦良將鋭卒を

失へり。この夜、皇帝は百官を集めて、位を公子完顏承麟 Ouanien Tching-lin に讓りたり。承麟は金の太祖の父世祖劾里鉢 Horipou の後裔にして、曩に刑死されたる白撒の弟に當り、時に東面元帥たり。この命に接するや、俯伏して眼に涙を浮べ、この不吉の位を受くるを欲せざりき。金帝は乃ち之に告げて曰く、『朕、卿に付する所以のもの豈に已を得んや、肌體肥重にして鞍馬馳突に便ならざるを以てなり。卿は平日、趫捷にして將略あり、萬一免るるを得ば、祚胤絶えず、此れ朕が志なり。』と、承麟茲に於てか、玉璽を受け、翌日帝位に卽けり。

卽位式の半ばに於て加へられたる新攻擊は蔡州の運命を定めたり。孟珙は江海丼に塔察兒と共に西門より城内に入れり。忽斜虎は一千の精兵を率ゐて、巷戰を試みたり。寧甲速は百計盡きたるを認め、近侍に向て、最後の決心を告げ、遺骸を火葬に附す可しと命じて縊死を遂げたり。茲に於てか忽斜虎は部下の將校に向て、最早奮鬪するも益なしと告げ、亂兵の手に死するを欲せずして、身を汝水に投じて死せり。五人の將軍と約五百の兵士も亦之に倣へり。

承麟は子城に退きて之を防ぎしが、寧甲速の殂せるを聞き、大官と共に往きて、弔祭の禮を行へり。その式未だ終らざるに既に、城は敵軍の手に陷れり。宮中の官吏は急遽、寧甲速の遺骸を焚き、遺骨を收めて之を汝水の岸に葬りたり。孟珙は宮中に入りて、一官吏より金帝の自殺せるを知り、塔察兒と共に寧甲速の骨を分ち、發見せられたる寶玉等をも分配せり。この日承麟も亦

亂兵に殺されたり。かくの如くして九代百十八年間君臨したる金朝は亡びたり。而してこの帝國の領土たりし地は陝西の鞏昌府を除くの外すべて蒙古の有に歸せり。（イ）（ロ）（ハ）に據る。

宋帝は歡喜して金朝の滅亡を祝したり（五月）。卽ち太廟に至りて、金帝の遺骨と寶玉とを祖先に捧げたり。（イ）に據る。

第二章

上述せるが如く、蒙古帝は、一二三二年五月弟拖雷と共に蒙古に歸らんとして、河南を發したり。一行は途を眞定府（正定府）幷に燕京（北京）に取り、古北口に於て長城を横ぎれり。この障壁を越えて後、窩闊台は重病に惱みしが健康回復せる後、兄弟相携へて斡難河源に赴けり。この地に於てこの年十月拖雷は四十歳を一期として病に仆れたり。（イに據る、拖雷・窩闊台の身替りとなれりとの說幷に右に關するラシッドの記事は、詳しく那珂博士の、實錄五九八―六〇二頁に出づ。）この公子は成吉思汗の愛兒にして、曾てその傍を離れしことなく戰略に於て全く父の遺鉢を襲へり。河南の遠征は何人も之を賞せざるなかりき。そのなほ幼年なりし時、成吉思汗は之に、客剌亦部長汪罕の弟札罕不の女唆魯忽帖塔尼 Siourcoucténi を妻せり。（ラシッド客剌亦部の條に據るに、札罕不は他に三女あり、阿卜哈は上述せしが如く成吉思汗の妃となり、別古特迷失、夫人Bigtouïmisch Fo-djin はその長子朮赤の配となり、姓名不詳なる第三女は、汪古部長の子に嫁せりとあり。）拖雷はこの配との間に、蒙哥 Mangou（那珂博士は、獻太后怯烈氏、實錄五九一頁の註に、元史本紀に憲宗諱蒙哥、睿宗拖雷之長子也、母曰莊徳唆魯禾帖尼、歲戊辰十二月三日生帝、時有黃忽荅部知天象者、言帝後必大貴、故以蒙哥爲名とありて原注に蒙哥、華言長生也と云へれば蒙哥のモンゲと讀むべきことは甚確なりと云へり。本文之に從て訂正す。）忽必烈 Coubilaï 旭烈兀 Houlagou 阿里不哥 Aric-Boga の四子を擧げたるが、長子と第二子とは皇帝の位に卽き、第三子は波斯に王朝を起したり。その他なほ他の妻妾によりて拖雷は六子を有したりき。

拖雷とは蒙古語にて鏡の義なり（憲宗立、追諡曰英武皇帝、廟號睿宗、（元史卷一一五、睿宗列傳）元史語解には、替也とあり。但し脫里は鏡也と解せり。）、その死後名を諱みて發音するを許さず、鏡の稱呼として蒙古人は別に土耳其語 gueuzugu を借用することとなれり。拖雷は又大（也可）諾延 Yéga-noyan と呼ばれたり。

支那より歸るや皇帝は、一二三四年を以て、達蘭達葩 Talan-tépé と呼する蒙古の一地に總會議を開きたり。翌年新都合喇豁嚕木に庫哩勒台を召集したり。新都は、斡兒寒 Orcon 河畔に在りて、皇帝は之をその首都となせるなり。（合喇豁嚕木の位置は明ならず、アーベル・レミュザーは和林市考のうちに唐書の記事を譯出すれどその考は定まらず、なほ第一編註第五を參看せよ。）（七年乙未春城和林、作萬安宮（元史二）合喇豁嚕木研究の沿革に就いては那珂博士の詳細なる考證あり、實錄六〇六―六二〇頁に出づ、露人ラドロフ氏の說はその六一七―八頁に見ゆ、參考す可し。）この會議召集の初にをいて饗宴殆んど一箇月に及び、窩闊台は治世の初年より寶庫に聚めたる財寶を配賦して、恩惠を垂れたり。（イに據る。）一般政務の商議さるるに方り、蒙古帝は成吉思汗の遺訓に從つて帝國の國境を擴めんと欲し、同時に各地に遠征を行はんと決心したり。一軍は宋帝國を攻擊し、第二軍は蒙古の羈絆を脫せる高麗を征服するの任務を帶びたり。乃ち命じて、蒙古軍は小隊十人每に、一人を西に一人を南に出發せしめ、又北部支那に於ては、十戶に就きて一人を徵集して南に戰はしめ、更に第二人を高麗の遠征に向はしめたり、（綱目に據る、）窩闊台は、會議に於て、支那兵を西域に派し、支那に回々兵を遣らんことを提言せしが、中書令耶律楚材は不可なり、中原、西域、相去ること遼遠なれば、未だ敵境に至らずして、人馬疲乏し、兼て水土宜しきを異にすれば疾疫

將に生ぜんとす、宜しく各〻其便に從ふ可しと論じてこの議を撤回せしめたりき、（ロに據る。）皇帝は、又裏海黑海北方の征服に向はんとする軍隊をば親ら統率せんことを主張せしが、帝室の諸王子は、口を齊うして、至尊の位にあるものは、須らく戰場の勞苦を避け、安泰にその生活を過す可しと唱へ、若し然らずんば、軍隊の指揮に任ぜる一族將軍は果して何をか爲すべきと詰れり。窩闊台は容易にこの諫言を容れ、朮赤（デユーチ）公子の第二子、拔都 Batoui を征西軍の司令長官に任じたり。之と同時に將軍忽哈禿 Houcatou の率ひる一軍は迦濕彌羅 Caschmire 幷に印度の境上に派遣されたり。波斯は既に全部、諾延出兒馬昆（チヨルマグン）によりて克復せられ、支丹只拉兒哀丁（ジエラルエッヂン）は一二三一年を以て殂き、花剌子模國君の男統は全く絶え、イランは蒙古の將校によりて支配せられたり。事の顚末は、第四編に於て成吉思汗の子孫の波斯に君臨せる當時の歷史を敍するに方りて之を說く可し。

この總會議に於て又、家畜を有するものは、百頭に就き一頭を獻じ、農民は、收穫の十分の一を貢す可しと命じたり。この課稅の所得は窮乏せるものの救濟に充てられたり。又使節の來往を敏速ならしむるが爲、驛傳の制を全帝國に亙りて設く可しと命じたり。（ヘチに據る。〔羽田亨氏は上に援けるが如く元史に太宗元年立驛傳とあるを疑ひ、本文を取る可しと云へり。（蒙古驛傳考、東洋協會學術報告、二四一頁）〕）

支那に於て熟練せる建築師藝術家の多數を得て北歸するや、窩闊台は斡兒寒河畔の合喇豁嚕木（カラコルム）なる新龍庭（ユールト）に於て大宮殿を營ましめたり。この地には舊都の遺址ありて、當時發見されたる碑文に據るに、これ卽ち第八世紀の中葉、回紇（ウイゲル）の毗伽 Boucou 可汗によりて築かれ、次でその子孫の都城たりし城寨の故地なりき。窩闊台（オゴタイ）の新宮殿は、支那の彫刻師畫工によりて裝飾せられ、廻らすに園囿を以てし、四門を具へたり。その一は皇帝の出入に供し、その二は宗族親王、その三は宮中妃嬪の來往に充て、その四を公衆の爲に開けり。この宮殿を圍んで、諸公子、大官の邸宅建築せられ、忽ちにして一都會を爲せしにより、皇帝は之を斡耳朶八里克 Ordou-Balik 卽ち斡耳朶の都城と名けしも斡兒寒（オルクン）河の發源せる、山脈の名稱、合喇豁嚕木（カラコルム）は轆てこの都城の名稱となれり。（ヘに據る。デルブローの附錄に收めたるヴイスドルーの韃靼史には、遼の太祖、阿保機が九二四年（九月丙申朔）次古回鶻城、勒石紀功（甲子）詔、礪闕遏可汗故碑、以契丹突厥漢字、紀其功とあり（遼史）この新都は一二三五年には廻らすに、周廻半里の城壁を以てせり。都城より支那までの間には特に驛站三十七個を設け、何れも騎兵の分隊を以て之を守備せり。每日帝國の各地より五百輛の車は食料酒類を積みて帝都に來着せしかば、之を食庫に藏めて、宮廷の消費に供し又臣下に配賦したり。（ヘに據る。）

窩闊台（オゴタイ）は一二三六年に於て、盛宴を張りて、新宮殿の落成を祝し、且この際中書令耶律楚材（エリユイチユーツアイ）に特殊の恩寵を示したり。初め皇帝の位に卽くや、耶律楚材（エリユイチユーツアイ）に託するに支那に於て征服せる諸州の財務行政を以てしたり。次で一二三一年皇帝の支那境上に臨みし時、耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は一年以來徵集したる金銀絹布の貢賦を獻納せしに、窩闊台（オゴタイ）はその曩に豫告したりし額と同じきを見て一驚

を喫したり。この計算の正確なりしより、耶律楚材に對する信用は著しく高まり、同日印綬を授けて、支那領統治の全權を託したり。（ロに據る、アーベル・レミュザー『新亞細亞雜纂』耶律楚材參看、〔太宗三年八月幸雲中、始立中書省、改侍爲左丞相、鎭海爲右丞相（元史二）辛卯、秋八月十四日、至西京、執事之人、各執名位、兀都撒罕、中書令（親）、以耶律楚材爲中書令、粘合重山征錄）太祖處之左右、遂呼楚材曰、吾圖撒合里、而不名、吾圖撒合里、蓋國語長髯人也（元史耶律楚材傳）〕窩闊台は、その人物崇高にして、正義を愛重し、政府の利害と人民の休戚とを熱心に慮ることを認め、この饗宴に際して、親ら觴を執て耶律楚材に賜ふて、曰く『朕の誠を推して卿に任ずる所以のものは先帝の命なり、卿に非ずんば則ち中原今日なし、朕が枕を安うすることを得る所以は卿の力なり』と。時に西域南方諸國の使節、多數來朝するあり、窩闊台、卽ち楚材を指して之を示して『汝の國、此の如きの人あるか』と問へり。（ロに據る。）

一二三六年三月、支那に於て交鈔 Kiao-tchao と稱する不換紙幣を政府より發行せり、これ蒙古朝に於ては初めて試みたる所なりき。耶律楚材の意見に從ひ、發行額を萬錠卽ち銀五萬兩に制限したり。（元史及び綱目による。〔有于元者、奏行交鈔、楚材曰、金章宗時、初行交鈔、與錢通行、有司以出鈔爲利、收鈔爲課、謂之老鈔、至以萬貫、唯易一餅、民力困竭、國用匱乏、當爲鑒戒、今印造交鈔、宜不過萬錠、從之、（元史耶律楚材傳）〕）

政治の局に當るの初め、耶律楚材は、弊政を防遏せんとして、有力なる反抗を招きたり。窩闊台は是より先、占領地を功臣に分配せんことを約したりき。耶律楚材はその結果、帝室にも將た人民にも不利を釀す可きことを說き、功臣に酬ゆるに黃金絹布その他の貴重品を以てして、

之に代ゆることとなさしめたり。この獻策は耶律楚材に對して、あまたの反對者を輩出せしめたり。皇帝の叔父なる公子斡赤斤は、その敎唆によりて、耶律楚材を攻擊して、禍心を包藏せる外國人なりとなせり。窩闊台は報告に接して、耶律楚材に對する敵意の眞因を知り、何人のこの陰謀を企てたるやを明にし、誣告を受けたる大臣のこの首謀者を處罰せんことを求めたり。されど耶律楚材は復讐を蔑めり。

蒙古人の支那を征服するに方り、一州一縣を占領するや、將士はその住民を分配し、小部落もなほその領主を戴き、從て特殊の行政區劃を爲せり。皇帝は一二三六年を以て、忽都虎（胡土虎、那顏）Cadac と呼べる大臣に命じて、支那の人口數を調査せしめたり。この調査の結果として、住民は之を地方によりて分割し、各地方を以て州縣となせり。當時、租稅を人に課せんとの議起れり。卽ち蒙古の諸大臣は、支那に於ても又、帝國の爾餘地方に於けるが如く、成年の男子より租稅を徵集す可しと主張せり。耶律楚材は之に反對して、支那に於ては租稅は常に戶每に、卽ち家每に徵集せらるるの例なりと說けり。蒙古の群臣は、曰く『我朝及び西域諸國、丁を以て戶と爲さざるはなし、豈大朝の法を舍てて亡國の政に從ふ可けんや』と。耶律楚材は之に答へて、若しこの新政を支那に施かば、一年の賦は之を納付せしむるを得可きも、翌年に於ては納稅者は逃れ去らんと云へり。窩闊台は中書令の意見に從ひ、租稅は戶に就きて之を徵集す可しと命じた

り。忽都虎の上奏せる所に從へば當時支那の領土に於て、約百十萬戸を數へたり。〔八年夏六月、復括中州戸口、得續戸一百一十餘萬（元史二）夏遣曲出忽都都籍到漢民一百二十萬有奇（親征錄）所括戸一百四萬（宋元通鑑）〕

時に皇帝は、支那の州縣を裂きて、蒙古の親王功臣に與へんとの議を諸問せり。耶律楚材（エリユイチユーツアイ）はかくの如く分配する時は、その結果として至大の不利を釀す可く、寧ろ黃金絹布を以て之に酬ゆるに若かずと說けり。皇帝曰く『已に許せり奈何せん』と。耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は答へて曰く、『若し朝廷吏を置きてその貢賦を收め、歲の終りに之を頒ち、擅に科徵することなからしめば可なり』と。皇帝はこの計を嘉納せり。太宗八年七月に諸王貴戚に分與したる斡耳朶即ち湯沐邑は詳しく元史二に出づ、即ち、直隸にありては眞定府（正定府）は太后に大名府は皇帝の子貴由（古與）Couyouc に邢州（順德府）は孛魯帶 Borotaï に河間府は庫勒格 Khoulgué に廣寧府（昌黎縣）は孛魯古帶 Bourgoutt に平州灤州は斡赤斤、諸延に山西にありては、平陽府は拔都 Batou に太原府は察合台に山東にありては、益都府（青州）濟南府の一部は野苦 Ykho に濱州棣州は阿齊台に、皇子、闊端 Koutan 駙馬、赤苦 Tchékou 公主阿剌海 Alikha 公主果眞 Gatchin 國王、查老溫 Tchalakhou 茶合帶鍛眞 Tchagataï Tankin 蒙哥 Mongou 寨札 Khantcha 幷に諸延、按赤 Angui 圻 Tsing 火斜木思 Khoss-kisson は東平府內の戸を得たり。

之と同時に、地租消費稅等も法律によつて規定され、將來一に之に從ふ可しと令せり。商品の稅率はすべてその價格の三十分の一に高められしが、惟り、酒は奢侈品として十分の一の稅率となせり。〔遂定天下賦稅、每二戸出絲一斤、以給國用、五戸出絲一斤、以給諸王功臣湯沐之資、地稅、中田每畝二升、又牛、上田三升、下田二升、水田每畝五升、商稅三十分而一、鹽價、銀一兩四十斤（元史耶律楚材傳）〕かくて支那の州縣も亦蒙古の宗室妃嬪功臣に分配せられたり。ハに據る。

耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は、窩闊台（オゴタイ）に向つて、周公孔子（チユーコウ）の敎の帝國の統治上參照に供す可きを說き、政府官

吏の遵守す可き、一十八事を採用せんことを上奏したり。うちに官吏の貢獻禮物を受くることを禁ずるの條あり、窩闊台（オゴタイ）その苛酷なるを唱へ彼の自ら饋獻を願ふものは、宜しく之を聽す可しと、主張せしも、耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は蠹害の端、必ず此に由らんとて飽くまでその必要を說けり。ロに據る。

宗室の公子は、從來親ら欲するが儘に驛馬を徵發し、又到る處誅求せざるなかりき。玆に於て耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は、一二三七年を以て、驛馬を支給せしむる際には旅券を示す可しと規定し、旅行者の貴賤に從て、その徵發し得可き馬匹の數を一定したり。

この年又耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は奏して曰く、器を制するもの必ず良工を用ゐ、政を守る者、必ず儒臣を用う、儒臣の事業は、數十年を積むに非れば、殆ど未だ成し易からざるなりと。窩闊台（オゴタイ）曰く、果して然らばその人を官す可しと。耶律楚材（エリユイチユーツアイ）曰く、請ふ之を校試せんと。乃ち宣德州、稅課使、劉中、幷に楊奐、郡に隨て考試し、經義、詞賦、論を以て分て三科と爲せり。儒人の俘へられて奴となりしものも亦試に就かしめ、其主の匿して遣さざるものは死刑に處す可しと令し、士を得ること凡そ四千三十人に達せり、而してうち四分の一は之によりて奴と爲ることを免れ得たり。元史幷に綱目に據る。

耶律楚材（エリユイチユーツアイ）は之と同時に蒙古人を敎育せんことを圖れり。即ち、燕京（ヤンキン）と山西の平陽（ピンヤン）とに二大學校を設け、蒙古の大官をしてその子弟を之に入學せしめて、耶律楚材（エリユイチユーツアイ）の登庸せる敎師に就きて、

歴史、地理、數學、星學を學修せしめたり。（ロに據る。）

當時帝國には他に二大政府の設あり、土耳其斯坦幷にトランスオクシアナ領は、抗愛（カンカイ）山脈よりアム河に及び麻合沒的牙剌挖赤 Mahmoud Yelouadj の子馬思忽惕 Mass'oud-Bey 之を治め、アム河より西方 Diarbekir 幷に Roum の境上に至るまでの領土は、將軍 Keurgueuz 之が政治に當れり。（チに據る。）

高麗に對する遠征は、その叛亂を企てたるが爲促されたるものにして、窩闊台（オゴタイ）は支那より北歸せるとき、叛亂の報に接したり。既に前編に述べたるが如く、高麗王、王暾 Vang-toung は一二一八年を以て成吉思汗の臣隷となり朝貢を約したり。然るに一二三一年窩闊台（オゴタイ）の使者の高麗に於て難に遭ふや、高麗政府は敢て罪人を糺治せざりしより、蒙古の將軍撒禮塔 Salitaï は膺懲の師を率ひて之に向ひ、四十餘城を取り、國王の降を容れ、師を班すに先ち、その君主の名に於て征服地に七十二人の達魯花赤 Darougas 即ち州縣の知事を設けたり。翌年高麗王はこれら官吏の職權を濫用せるより悉く之を殺し、松都をはじめ爾餘都會の住民多數を率ひて、半島西海岸、に接せる江華（キャンファ）島に蒙塵し、王國の政權を委ねられたる洪福源（ホンフエン）は直ちに防備の策を講じたり。撒禮塔（サリタイ）は再び高麗に入り、戰鬪中、矢に傷けられ之が爲に死せり。

高麗王を攻擊するに先ちて、窩闊台（オゴタイ）は難詰の意を以て書を致せり。（辛卯高宗十八年（太宗三年）十二月蒙使九人持牒來、牒曰、蒙古大

朝國皇帝、聖旨專命、撒里打火里赤、統領大軍、前去高麗國、問、當如何殺了、着古與使臣乎……上皇帝表曰、其着古與殺了底事、實隣寇之修作（高麗史卷二三）壬辰高宗十九年（太宗四年）十一月答蒙古官人書曰、於甲申年使臣著古與云々（同上）

第一罪は、王が宗主たる可汗の朝廷に使節を派して、敬意を表せずと云ふに在り、第二罪は、その義務を忘れざらしめんが爲、皇帝より派遣せし官吏を虐待せしと云ふに在り、第三罪はその臣民の窩闊台（オゴタイ）の使節を殺害せるに方りて、之を不問に附せしと云ふに在り、第四罪は、徒らに口實を設けて兵を出して皇帝の軍に加はらしめず、又國内人口の數を報告せずと云ふに在り、第五罪は蒙古の任命したりし州縣の知事を虐殺したりと云ふに在り。かくて直ちに入朝して親らその行爲に就て辯明す可しと命じたり。

高麗王は斷乎として、叛亂の擧を中止せざりしも、王國防備のことを託されたる洪福源（ホンフエン）は蒙古兵に抵抗するの不可能なるを認め、之に降服の意を致したり。窩闊台（オゴタイ）は乃ち洪福源（ホンフエン）を以て東京總管領となせり。

一二三五年の總會議の決議に從ひ、蒙古兵と支那兵とを以て混成されたる一軍は、皇子曲出（庫春）Coutchoun 之を率ひて、高麗に派遣せられたり。（元史二には蒙古征高麗とありて、曲出は下に記するが如く宋を伐てり。）國王王暾（ワン）は部下の敵に降れる後、本土に渡りて之が防禦に盡瘁せしが、數〻戰敗の屈辱を受け一二四一年遂に和を請ふの窮境に陷りたり。而して和議の條件は、從來の如く貢賦を納む可しと云ふに在りて、容易にその成立を見たり、但し國王親ら蒙古帝の朝廷に赴き、忠誠の意を表す可しとの要

求に對しては、國王はその困難なるを唱へて之を爭へり。窩闊台は玆に於て、近親の一人を質として遣す可しと要求し國王は公子綧をして出發せしめたり（八月）。（戊戌高宗二十五年（太宗十年）冬十二月遣將軍金寶鼎、ロに據る。御史宋彥琦、如蒙古上表、己亥高宗二十六年、夏四月蒙兵還（高麗史卷二三）辛丑高宗二十八年（太宗十三年）夏四月以族子永寧公、綧、稱爲子、率衣冠子弟十人、入蒙古、爲禿魯花、禿魯花、華言質子也（高麗史卷二三））

金國の滅亡後、蒙古人は同盟條約の規定ありしにも拘らず、陳州幷に蔡州（汝寧府）の東南に當れる河南の一部分のみを宋帝國に讓與し、爾餘の地方は悉く之を併呑して、劉福を河南道總管に任じて之が施政に任ぜしめたり。

宋の朝廷はこの背信の行爲を憤れり、宗室の兩公子、趙范幷に趙葵は黃河を北境とし、陝西南部を領有するの必要を說き、皇帝に向て、兵力に訴へて、その未だ割讓されざる領土を克復し、三舊都卽ち陝西の長安（西安府）河南の洛陽（河南府）幷に汴京を恢復せんことを逼れり。朝臣の多數はかゝる計畫を實行せば必ずや旣に遠く去りたる蒙古兵を再び誘致することとなる可く、又千里長驅して空城を爭はば之を得るも糧食の輸送に困難を感じ必ず後悔するに至る可く、且目下將乏しく卒寡く、財匱しく食竭くるの狀態なりとて、反對論を唱へしも、皇帝理宗はこの諫を用ひず、廬州の知事全子才に命じて、兵一萬に將として、汴京に向つて進ましめたり。

崔立は依然として、金の末路の都城にありて威福を弄せり。部下の三都尉、崔立の豪慢なるを憤り誓て之を滅さんとし、宋將の北進を聞くや直ちに書を以て降を約し、之と同時に崔立と共に

防禦の策を講じたり。主長に對するの陰謀を巧みに實行せんと欲し、三都尉の一人、李伯淵は火を城門の一に放てり。崔立は親ら火災を視察せしが、その歸途に就くや、李伯淵は之と同伴し、突然劍を拔きて之を刺せしかば、崔立は忽ちに馬より墜ちて死せり（一二三四年七月）。伏兵直ちに起てその隨行を虐殺し、崔立の遺骸は之を馬尾に繫ぎて宮殿に至り、聚合せる群集に向て、李伯淵は火を殺す可きや否』と。萬口齊しく曰く『之を寸斷するも未だ稱はざるなり』と。その首級は梟せられ、その遺骸は皇帝寧甲速の靈に供せられたり。

全子才はかくて容易に汴京を占領せるが、間もなく、趙葵は五萬の兵を率ひて來會せり。八月兩將は兵を派して進んで洛陽を占領せしめたり。

宋軍の河南に入寇せるを聞くや、蒙古兵も交戰の準備を整へ、洛陽附近に於て、汴京より同都城に增派され、洛水の涯に陣せる一萬五千の支那兵を襲擊し、之を全滅して往て洛陽城下に陣せり。城中の宋軍開城し之を攻めしも勝負相當れり、而も宋軍は糧食の缺乏によりて遂に洛陽を撤退せざるを得ざりき。趙葵幷に全子才の兩將も亦等しく、糧食缺乏の爲已むを得ず汴京を放棄するに至れり。蓋し克復せられたる都城は何れも、空城にして、糧食を得るによしなく、宋軍はすべて南歸せり。之が指揮の任に當れる兩將は、この遠征の失敗せるより責任を負ふ可きものな

りと認められ、各〻一秩を削られたり。

窩闊台は曩に他の方面の遠征に當らしめたる將軍速不台を召還し（一二三五年一月）、宋朝に使節王檝を派して、盟約を破れることを非難したり。皇帝理宗は程芾を蒙古通好使と爲して、その怒を和げんとせしも效なく、前に述べたる庫哩勒台に於て開戰に決したり。宋帝國攻擊の爲には三軍を編成し、第一軍は窩闊台の第二子闊端 Coutan 將軍塔海 Tagaï と共に之を指揮して四川を侵さんとし、第二軍は、窩闊台の第三子、曲出 Coutchou 將軍忒木解并に張柔と之を率ひて湖廣に向ひ、第三軍は諸王口溫不花 Khonbouca 將軍察罕 Tchagan と共に之に將として江南を伐たんとせり。この軍隊は何れも蒙古、契丹、支那の精鋭を以て組織されたり。

闊端は陝西を横斷し、鞏昌府附近を通過するに方り、この時まで惟り蒙古に降らざりし金の鞏昌總帥、汪世顯の降を容れたり。闊端は依然としてその舊職に任ぜしめしも、その部下を率ゐて從軍す可しと命じ、軍の前衞を構成せしめたり。かくて闊端は路を鳳州（鳳縣）に取りて陝西南部の漢中府に入り、沔州（沔縣）を拔き、（一二三六年一月）知事高稼を殺したり。漢中府の制置使趙彦吶は往きて四川の鎖鑰と目されたる青野原を戍り、蒙古兵に圍まれしも、利州（廣元縣）の統制、曹友聞之が救援の師を起し、蒙古兵を攻擊して、之を退却せしめたり。曹友聞は次で蒙古の先鋒汪世顯の圍める大安（寧羌州）に赴きてその圍を解き、蒙古の大軍を

擊破せる後、鳳縣の西南なる仙人關に退き之を扼せり。

闊端の前衞に對しては、かくの如く勝利を博し得たりしも、その全軍の糾合さるるや、支那兵は衆寡敵せざるを以て、陝西、四川の境界を爲せる山脈の險隘に於て、之を防守せんと試みしが、漢中府を距る西北數里に位せる陽平關附近に於て闊端に擊破され（十月）、趙彦吶の節制の下に奮鬪せる曹友聞は亂軍中に殺されたり。この戰勝の後、蒙古兵は、遂に長驅して蜀に入り、一月ならずして、利州、潼川府、并に成都府管内の州城を悉く降したり。かくて蜀の三分の二は蒙古兵の有に歸し、成都府の内外を初めとして、住民の大半は虐殺に遭へり。

文州の圍まるるや知州事劉鋭は到底之を守るの難きを察し、家人を集めて藥を仰ぎて死せしめ、その遺骸を焚き、且官有物私有財産辭令をも擧げて火中に投じ、州城の陷るに及んで自刎し了れり。通判趙汝鼐は執へられて寸斷せられ、軍民共に蒙古兵に虐殺せられたり。

四川の西部を蹂躙せる後、闊端は陝西に師を班し、一二三七年の初支那兵は再び來て成都府を克復したり。然るに二年の後、蒙古の將車塔海は再び四川に入り成都府の附近に於て九城を拔き、更に進んで府城を陷れて再び之を屠れり。

塔海は次で湖廣に入らんと欲し、路を曩に蒙古兵の有に歸したりし長江北岸の夔州に取らんとせしが、宋將孟珙は湖廣西方境上の防備を固めてこの計畫を失敗に了らしめ、且蒙古兵の手よ

り夔州を奪へり。

然るに本營を河南の唐州に定めたりし皇子曲出は一二三六年を以て湖廣に入れり。襄陽府の守將は多大の軍需品を藏せるこの要地を以て之に降れり（三月）。次で曲出は襄陽幷に德安府を取りしが（八月）、遂に陣中に於て逝けり（十一月）。窩闊台は曲出を愛し、之をして帝位を嗣がしむるの意ありきと云ふ。忒木艣は江陵（荆州）を圍みしに、淮西制置使史嵩之の命を受けて、之が急に赴ける孟珙は城下に於て蒙古兵を破りて（十二月）支那人の捕虜となれるもの二萬人を援へり。

知州事丘岳も亦蒙古兵の圍める江南の眞州（儀徵縣）を守りしが、城下に於て之を指揮せる蒙古の將軍察罕を破り、多大の損害を蒙らしめたり。

蒙古の諸王口溫不花は、一二三六年の末光州、蘄州、隨州を攻め守將の遁走せるに乘じて之を奪ひ、〔太宗紀には九年冬口溫不花等圍光州、命張柔、鞏彥暉、史天澤、攻下之、遂別攻蘄州、降隨州とあれどこは八年とす可きに似たり。〕進んで長江々畔の黃州を圍みしが、孟珙は能く之を拒ぎて退却せしめたり。翌年口溫不花は又安豐を攻めしも、遂に之を下すこと能はざりき。

將軍察罕は一二三八年江南の廬州府を圍みしに、守將開城突擊を試みて（十月）圍を解き、察罕はその退却に際し、軍隊の一部を失へり。

一二三九年孟珙は三度蒙古兵を破りて、信陽軍光化軍襄陽幷に、之と相對して漢江の南岸に位せる樊城を克復したり。翌年二月、蒙古兵は將軍張柔の指揮を奉じ路を分て、支那帝國の領土を攻擊し、蒙古の使節王檝は五度宋朝に使して、和議を提言せしが、顧みられざりき。王檝は使命了らずして病に仆れしを以て、支那政府はその遺骸を蒙古に遣れり。爾後一二四一年窩闊台の殂落するの時に至るまで、この地方の戰端に關しては史に記載を缺けり。（イ、ロ、ハに據る。）

蒙古兵の高麗を侵し、支那の南方を攻め、露西亞、波蘭、匈牙利を掠め、西歐諸國を震慄せしめし時に方り、窩闊台は逸樂をこととし、遊獵飲酒に耽れり。春季にありてその合喇豁嚕木にあるは僅かに一箇月に過ぎずして、他の二箇月は都城を距る一日程の地に位せる、迦堅察寒 Kertchagan 宮殿に之を過せり、帝の命を受けて之を造營せる波斯の建築師は、和林の宮殿を營める支那の建築家とその技倆を競はんとせり。〔九年丁酉夏四月、築掃隣城、作迦堅察寒殿（元史二）元史類編云、在和林北七十餘里〕この離宮を去りて窩闊台は數日を親から奠めたる都城に過し、次で盛夏の候は全く、之を斡兒篋克禿阿 Ormektoua と稱する地に送れり。Ourga の路に方り、Kiakhta の南方約二十二里、東南より流れて斡兒寒河に注げる Schara 河附近に Ourmoukhroui と稱する山と驛站とあり（Timkowski 北京旅行記、巴里、一八二七年、第一册、四三頁參看）同地に在りては、白革の裏面に、金絲を以て刺繡を施せる絹布を覆ひて、支那風の帳幕を張りしが、優に千人を收め得可く、之を昔喇斡耳朶、Siira-Ordou と稱せり。秋に至るや、皇帝は和林を距る四日程なる、科依揭 Keuschè 澤附近に約四十日間滯在し、次で汪吉Ong-

ki.（校者曰く、馮氏は「案名見元史憲宗紀、疑是翁金河也」と云へり）に赴きて冬季を過せり、これ卽ち遊獵の好季たり。窩闊台は、この地方に於て、木材と石材とを以て Tchehik と稱する圍場を設けしが、その周廻は二里に亙り、あまたの門を設けたり。行程約一箇月の地點に舍營せる軍隊は、獵獸を驅りつつこの中心點を目標として四方より前進す可しとの命令を受け、かくてこの圍場に、驅逐されたる無數の獸類は、先づ皇帝の矢を受け、次で宗族、公子、軍隊將校はその位に從て、之を射殺し、最後に士卒も亦この樂に與ることを許されたり。（ヘ、チに據る。）

窩闊台は甚しく飲酒に耽り、爲めに父汗の叱責に遭ひたること少からず、而も遂に之が爲に健康を害するに至れり。察合台は、平素窩闊台より尊敬されしを以て、一將校に命じて、毎夕その酒杯の數を監視せしむることとなせり。窩闊台は敢て公然長兄の命令に背くことなかりしも、而も大杯を用ゐて、その精神を沒却し、監視の任に當れる將校は又、毫も之に反對せざりき。（ヘに據る。）一日、中書令耶律楚材は酒槽の鐵口を携へて、皇帝に上奏して曰く、麴蘖は能く物を腐らす、鐵もなほかくの如し、況んや五臟をやと。窩闊台はこの證據物件を目擊して大に驚きしも遂にその飲酒の習慣を改むること能はざりき。かくて（一二四一年三月）、揭揭察合（齊齊克察罕）Tchitchek Tchagan の澤附近に於ける狩獵より歸るや病に罹れり。〔歲辛丑二月三日帝疾篤醫言脈已絕云々（元史耶律楚材傳）〕皇后、脫列哥那 Tourakina 大に狼狽し、耶律楚材に向て、天佑によりて皇帝の恢復を圖らんとせば

宜しく如何す可きやを問へり。耶律楚材は正義と仁慈との政を施さんことを說きて曰く、今や任使するところその人にあらず、或は官を賣り或は獄を鬻ぐ、隨て辜なくして牢獄に呻吟するもの極めて多し、須らく大赦の令を施かざる可からずと。脫列哥那直ちに之を發布せんとせしに、耶律楚材君命にあらざれば不可なりとて之を阻止したり。俄かにして皇帝少く蘇り、拘禁謫流せられたる罪人の大赦に關する皇后の上奏に對し、首肯して同意を表したり。かくて病瘳ゆることを得しが、十二月に至りて再び病に侵されたり。而も耶律楚材の諫をも用ゐず、五日間の狩獵に赴けり、歸途鈍鐵鐸胡蘭 Eutégou-Coulan 山附近に止まり、杯を重ねて、深更に及びしが、翌朝臥床にありて遂に起たざりき（一二四一年十二月十一日）。〔十一月丁亥大獵、庚寅還、至鈍鐵鐸胡蘭山、奧都剌合蠻、進酒、帝歡飲極夜乃罷、辛卯遲明、帝崩于行殿（元史二）丁亥は四日にして辛卯は八日なり。十一月四日、帝將出獵、楚材亟言其不可、五日帝崩于行在所、（元史耶律楚材傳）十一月初七日、至地名月惑哥忽聞、病、次日崩（親征錄）〕壽五十有六、在位十三年に及べり、遺骸は之を起輦 Kinien の谷に葬れり。（ロ、ハに據る。）

窩闊台は蒙古人としては性格極めて親しむ可く、頗る自由寬容の思想に富めり。臣下の恩施その度に過ぐることを諫むるものあるや、之に答へて、塵世にありてはすべて常住なるものあるなし、故に少くも人心の記憶に於て不朽ならんことを期す可きにあらずやと云へり。史上の名君の事蹟は常に之を聽くことを樂みしも、その財寶を蓄積せるものありとのことを談ずるものあるや、乃ち之を評して曰く『然らば是れ思慮分別なきの行爲たり、貨財は死を妨ぐること能はず、又他

界より歸ること能はざれば、須らく臣民の心裡に財寶を藏めざる可からず』と。

窩闊台の金錢を吝まざりしことに就ては種々の逸事を傳へたり。曾て波斯式の冠を獻ぜしものありし時、窩闊台は二百巴里施 balischs を之に與ふ可しと命じたり、左右のものは、かかる命令は酒興に乘じて下されたるものに外ならざればとて敢て之を遵奉せざりき。然るに翌日窩闊台はその人を見て仕拂を受けざりしを知り、更に三百巴里施を與ふ可しとの命令を下し、その翌日は四百巴里施を與ふ可しと告げ、次第にその額を增して、結局六百巴里施を仕拂ふこととなれり。茲に於て窩闊台は、左右のものを叱責して、汝等こそは、朕を妨げて、この塵界にありて、惟り能く不朽に傳へらる可き令聞を得しめざれば眞の仇敵なれと云ひ、且曰く『卿等のうち一人若しくば二人を罰して之を懲するあらずんば、卿等は遂に過を改むるに意なきか』と詰れり。

和林に於て宮殿造營中、一日寶庫に赴きて、その巴里施（貨幣）の充滿するを見、『この貨幣は朕に何の用かあらん、之を守るこそ却て苦みなれ』とて、巴里施を得んと思ふものは、唯〻出頭せよとの意を布告したり。茲に於てか新都の住民は寶庫に群集し、何れもその携帶し得るほどの貨幣を施與せられたり。

窩闊台の豁達にして金錢を吝まずとの世評高かりしを以て、商人は遠國より來りてその朝廷に集れり。窩闊台はその齎らせる商品を全部購求し、以て引出物に充てたり、蓋し食後、帳幕の前

面に坐して、功勞あるものに恩施するを以てその日常の慣例となせるなり。商人等は窩闊台の寛大なるに乘じて極めて不當なる計算書を提出せしが、決して之を爭ふことなく、加之、更に一割を增して之に仕拂ふを常としたり。一日、窩闊台を諫めて、既に通常の市價よりも遙かに多額を仕拂ひたれば、この割增は不必要なりと陳ずるものありし時、之に答へて曰く『商人等この地に商品を齎らすは巨利を博せんが爲のみ、朕はその期待の失望に了るを欲せず、且又商人等は卿等に對して多少の音物を要するにあらずや』と。

窩闊台は又、行幸の途上、老年の外國人に遭ひ、その何人なるやを問ふて、バグダードより來りしものにて、婚期に達せる十人の娘を有するも、窮乏に陷りて如何ともし難しとの事情を知れり。茲に於てか、之に問ふて曰く『何故に卿の君公たるハリフハは卿を救助せざるか』と。老人は之に答へて曰く『小臣の困厄を奏上する每にハリフハ黃金十片を賜ふも、この額にては忽ちに消費し盡して跡を止めず』と。窩闊台は乃ち貨幣一千巴里施を之に施したり。左右の人士は支那の歲入を擔保として證券にて仕拂はんとの議を立てしも、窩闊台は直ちに正貨にて仕拂ふ可しと命じたり。かくて之が仕拂を了るや、老人は如何にしてその貨幣を運搬す可きや、策の出るところを知らずと訴へたり。窩闊台は爲に馬匹を始としてすべての必要品を給與せしめたり。老人は更に曰く『前程極めて遠し、果して能くバグダードに歸着し得可きや否、惟皇天の之を知るある

のみ、若し途上にありて不歸の客とならば、女兒等は皇帝の恩惠に浴すること能はざる可し』と。窩闊台は玆に於て十人の蒙古人をして之を護衛せしむることとなし、老人は初めて發程せしが、而も途上にありて、病に仆れたり。護衛の士の之を上奏するや、合罕は之に命じて、バグダードなる故人の女兒の許に貨幣を致さしめたり。

窩闊台は如何なる商業にても之を營まんが爲、資本の貸與を請ふものある時は快く之に應じたり。曾て一商人あり、內庫より金貨五百巴里施の貸與を得しが、暫くして歸り來て、悉く損失に歸したりと告げたり。合罕は再び同額を給與せしに、翌年その商人は窮乏の極に陷りて歸來し、その遭遇したりし不幸を啣てり。合罕近侍の士はかの商人こそは、恩借の貨幣を悉く食ひ盡したりと奏問せしに、皇帝は如何にして巴里施を食ひ得可きかと反問せり。侍臣は卽ちこれ快樂に耽りて浪費せるの意に外ならずと答へしに、窩闊台は之に答へて曰く『而も之が爲に巴里施は減じたるにあらず、商人より巴里施を得たるものも、亦朕が臣民なれば、朕が金庫に之を藏すると毫も擇ぶところなし、再び同額を商人に給與し、將來の浪費を戒めよ』と。

一日出獵せる時、貧しき人の三個の瓜を獻上せるものありき。窩闊台は時に貨幣を所持せざりしを以て、皇后蒙噶 Mouga に双耳に垂れたる二個の大眞珠を與へよと云へり。蒙噶はこの男は眞珠の價を知らず、若かず明旦更に來らしめて衣服と貨幣とを與へんにはとて之を拒みしに、

窩闊台は、『かかる貧困のもの明日まで果して待ち得可しとなすか』と詰り、又『眞珠に就ては必ず朕が許に戻らん』とてその異議を排せり。實にこの貧しき人は直ちに廉價に之を賣却せるより、買主はその如何にも美麗なるを見て皇帝に獻上し、皇帝は之を皇后に還附せり。

發兒思 Farss 侯の同胞和林に來りし時、その齎らせる貢物のうちに、美しき眞珠を盛れる二個の瓶ありて最も注意を惹けり。窩闊台は波斯に於て眞珠の貴重視さるることを知れるが故大粒の眞珠をもて滿せる手箱を運ばしめて、發兒思の使節の目を驚かしたり。かくてその嘆美の色あるを見、皇帝は命じて酒宴を開き、これらの眞珠を酒杯に注ぎて賓客に分與したり。

窩闊台の仁君なりしことを示すと共に、蒙古人の風俗習慣を明にし得可き逸事も少からざりき。既に述べたるが如く、蒙古人の間に在りては、春より夏に亙りて日中流水に浴し、之に手を浸し、金銀の瓶を以て、之に就て水を汲み、洗濯したる衣服を地上に乾すことを禁じたり、蓋し蒙古人は迷信深く、之によりて雷電を誘致ず可しと信じたるを以てなり、而して蒙古に在りては雷鳴極めて頻繁にして蒙古人は甚しく之を恐れたり、チに據る。又人の雷火に擊たれて死するやその一族を擧げて放逐せられ、之と關係あるものは、三年間何人も、宗室の斡耳朶に入ることを得ざりき、へによる。又その所有に屬するものは、人と家具とを問はず、悉く火を燃せる二點の中間を通過して、之を淨めざるを得ざりき、Carpin の記事第七章に出づ 扨窩闊台一日兄察合台と遊獵より歸りし時、一回教徒の水

に入りて垢離の行を爲せるを見たり。察合台は常に法律を嚴格に墨守し、且回教徒を好まざりしを以て、直ちに之を死刑に行はんとせり。合罕は明朝訊問して判決を下す可しと云ひ、その間私に人をして、巴里施一片を回教徒の發見せられたる附近に投ぜしめ、且之に告げて、不幸にして所持の貨幣を河中に投じたれば、親ら水に入りて之を搜索せんとせるなりと辯解せよと教へたり。故に訊問に際して回教徒は教えられたる儘に答辯し、その聲明の調査に當れる官吏は果して一片の巴里施を齎らせるより、窩闊台は如何なる場合に於ても、法律に違反することは許し難しと雖も、この男は貧困にして些細の金錢の爲生命を賭して國禁を犯せるものなれば、その罪を問はずして可なりと云ひ、かく恩惠を垂れたるが上、更に十巴里施を添えて之に施したり。

治世の初年に於て窩闊台は、肉を食用に供する獸畜の喉頭部を切斷するを禁じたり、抑も蒙古の習慣幷に成吉思汗の札撒 Yassa に從へば肺臓を割斷せざる可からず、故にこの法令は、喉頭部を切斷して、屠れる獸畜の肉をのみ食ひ得る回教徒にとりては大打擊たりき。曾て一頭の羊を購ひて、住宅に牽きしものあり、一人の欽察人あり之を熟視してその跡を追踪し、その家の屋上に上り、回教徒の羊の喉頭部を切斷するや跳つて地上に降り、罪人を伴ふて皇帝の許に至れり。然るに窩闊台はこの回教徒を放免し、却て家宅侵入の罪を犯せる欽察人を死刑に處したり。

回教徒を敵視せるもの曾て謁を窩闊台に要め、夢中成吉思汗現はれ、『往きて朕に代りて、朕が

兒に Mahomet の信徒を全滅せよと傳へよ、厭ふ可き種族なればなり』との託宣ありきと奏上したり。暫時熟考せる後、窩闊台は問を起して、成吉思汗は通譯を用ひて之を告げしかと云ひしに、否と答へたり。皇帝は更に『汝は蒙古語を知れるか』と問ひしに、唯々土耳其語を解するのみと自白したり。玆に於てか、窩闊台は斷じて曰く、『汝の言は僞なり、成吉思汗は唯蒙古語を解するのみ』と。遂に之を死に處したり。

支那人の影繪を能くするもの曾て窩闊台の前にて、その技を演ぜしことあり。各國の人物を示せるもののうちに、頭に turban を纏ひ長く白髯を垂れたる一老翁の頸を馬尾に卷かせて曳かれて行くあり。合罕その何人の姿なるやを問ひしに、支那人は答へて『これ回教徒の俘囚の蒙古兵に曳かれ行く姿なり』と云へり。窩闊台は影繪に中止を命じ、寶庫より波斯幷に支那の最も貴重なる產物を齎さしめ、支那の產物の到底波斯の產物に及ばざることを支那人に示してさて曰く『朕が帝國にありては富裕なる回教徒にして、多數の支那人の奴隷を有せざるものなしと雖も、支那の貴人にして、回教徒の奴隷を有するものは一人もあらず。且又汝等の知れるが如く、成吉思汗の法律は、一人の回教徒を殺したるものに對して、金貨四十巴里施の賠償金を課すれど、支那人の生命は、驢馬一頭の價に過ぎず。而もなほ汝等が敢て回教徒を侮辱するは何が故ぞ』と、かくてその支那人を目前より遠けたり。

窩闊台は又頗る角力を觀るを好み、蒙古人、欽察人、支那人等多數の力士を養ひたり。波斯の力士の聲價を聽きしより、出兒馬昆に命じて、その尤なるものを送らしめたり。諸延は乃ち約三十人を選拔して蒙古に向はしめ、有名なりし闊勒 Pilé 幷に Mohammed Schah をして一行に長たらしめたり。一行の窩闊台に謁見するや、皇帝は闊勒の容貌秀麗、軀幹長大、四肢の權衡又能く相稱へるを讚へたり。將軍伊兒吉歹 Iltchidaï は曰く『長途旅行の費用と、俸給とは夫れ無益の出費たるに過ぎざる可きか臣憂慮に堪えず』と。皇帝之に對して曰く『試に卿が部下より力士を出し見よ、若し夫れ波斯の力士と奮鬪して、卿が部下勝たば、朕は五百里巴施を卿に仕拂はん、若し反對の結果を生ぜば、朕に馬匹五百頭を納めよ』と。伊兒吉歹はこの賭に應じて、翌日部下より一人の力士を選拔して出したり。闊勒は前進し、兩力士は互に他の双眼を熟視し、遂に互に他の身體を捉へたり。蒙古の力士は巧みに敵手を仆してその上に重れり。闊勒は謔して曰く『强く余を捕へ、注意して余を脫走せしむる勿れ』と、言下に身を起して烈しく敵手を地上に投げしかば、その骨は碎けて音響を放てり。玆に於てか皇帝は、坐を起ちて闊勒には『押へて放つなかれ』と云ひ、次で伊兒吉歹に向て『力士は能くその俸給を贏ちたるにあらずや』と詰り、之に向て賭したる額の仕拂を請求したり。闊勒は貨幣五百巴里施に添えてあまたの引出物を賜はれり。

窩闊台は又この力士に艶麗なる妙齡の女子を與へ、暫しありて、笑ひつつ、その女子に、大食人 Tazik は果して如何と問へり。蓋し波斯人は、或る點に就き蒙古人の間に世評高きを以てなり。女子は乃ち同棲せざることを答へたり。玆に於て窩闊台親らその理由を闊勒に問ひしに、闊勒は之が口實として、合罕の宮廷に於て名譽を博したれば、決して勝負に失敗せずして、永くその勢力を保ち、皇帝の恩寵を失はざらんが爲なりと答へたり。窩闊台は朕の欲する所は卿の血統を遺さんとするにあれば、卿をして復た奮鬪せしめざる可しと告げたり。

窩闊台の殊に峻嚴なりしとの逸事も亦傳へられたり。曾て、衞拉特部のうちに合罕はその女子を他の部族の男子に妻さんとの意ありとの風說傳はりしことありき。この事件の到來を恐れて、衞拉特部民は倉皇互にその女子を約婚し、結婚式を擧行したるもの少からざりき。窩闊台はこの事實を聞くや、同部の少女にして七歲以上のもの幷にその年內に結婚したる新婦を悉く集合す可しと命じ、二列を爲して並列せしめしに、その數四千に上れり。皇帝はその最も妖艶なるものを拔きて、後宮に充て、その多數を宮中の官吏に與へ、又その若干を妓樓、客舍に分與し、最後にその場にある人々をして殘れるを奪ひ去らしめたり。父、夫、兄弟の面前にて、そのことありしも、何人も敢て、怨言を漏すものなかりき。

一蒙古人あり、窩闊台の許に來りて、回教徒の力士等、附近に於て、狼を獲て之を伴ひ來りし

より、前夜狼ありて我家畜の群を暴したりと訴へたり。皇帝は千巴里施にて之を購ひ、その蒙古人には羊群を與へ、而して狼を放たんことを思へり、蓋しその狼をして、親ら遭遇せる危險を同類に告げ共にその地方を走らしめんと期せるなり。然るに狼の縛を解くや、獵犬は群を爲して之を攻擊し忽ちにして之を寸斷し了れり。窩闊台はこの光景を目擊して、恐怖せるものの如く、愁に沈みて、帳幕のうちに入り、沈默を守ること多時、漸くにして左右に向て口を開て曰く『朕が健康は衰へたり、朕はこの動物の命を救はば朕の生命を永くせんことを朕に代りて天に祈るならんと思へり、然るに遂に天命を免るる能はず、これ朕に取りて憂ふ可き前兆なり』と。實に窩闊台は數日の後病に仆れたり。

窩闊台は數人の皇后と六十人の妃妾 Coumas とを備へたり。皇后中の第一位にあるは、蔑兒乞部兀洼思 Ouhouse 氏の脫列哥那にして（毛嶽生、元書后妃公主列傳に、太宗昭慈皇后乃馬眞氏、諱脫列哥那、號六皇后とあり、本文に兀洼思氏とあるは、太祖の忽蘭皇后と混同したるが爲か。）貴由 Couyouc 闊端、曲出、合剌察兒 Caradjar 喀失 Caschi の五子を擧げたり。他の皇子喀丹斡古勒 Cadan-Ogoul と蔑里克 Mélik とは妃妾の出にして各〻その母を異にせり。

窩闊台の殂落の後、世人の注意はすべて、成吉思汗の四子中獨り生き殘れる公子察合台の上に向へり。皇帝の交情深く信任厚かりしを見て、察合台に對する世人の尊敬は殊に大なりき。窩闊台は大事を企つるに方りては、曾て之に諮らざることなく、察合台の都城を定めたる畏兀兒地方

に淹留するや、數〻官吏を派して、その意見を尋ねたり。（へに據る。）察合台は資性嚴格にして成吉思汗の法律勵行を以て己の任となせり。蒙古の英主は第二子の嚴格なることを知れるが故殊に之を制度の維持に關して監視するところあらしめたり。察合台の所領は抗愛山脈よりアム河畔に達せるが、回教徒はその領內に於て、成吉思汗の法令を勵行せるに對し、痛く不平を訴へたり。蓋し、回教徒に取りて最も迷惑なりしは、喉頭部を切斷して殺したる獸類の肉を食ひたるもの幷に日中流水に浴したるものは死刑に處す可しとの禁令等にして Mahomet の信徒は勢ひ、この法律に違反せざるを得ざることとなれり。（チに據る。）察合台の深く服從のことを念頭に置けるに就いては、之を證明す可き逸事の傳へられたるあり。一日弟なる皇帝と外出せし時、共に酩酊して稍稍頭腦の熱せしより、察合台、窩闊台と馬を馳せて競走せんことを思ひ、之を提議したり。而して果して勝負にその利を得しも、その夕帳幕に歸るや、皇帝に對して競走を挑み、且之を破りしは、如何にも禮を失せし擧動なりと悔ゐ、この非行を謝せんと欲し、翌朝、その臣下を悉く從へて、窩闊台の帳幕に赴けり。窩闊台は兄に對する信任厚かりしも、その拂嘆、多數の護衞を從へて來るを聞くや、聊か不安の念なきを得ず、如何なる理由によりて來れるやを問へり。察合台は前日皇帝に對して禮を缺けるを以て、罪を乞はんが爲に來れる旨を答へ、杖刑は勿論死刑にても甘んじて之を受く可しと云へり。皇帝は、兄のかくまでに從順なるを見て稍〻驚き、親しく詰責

する所ありしを以て察合台は漸くにしてその心を安んじたり。但し、赦免されたる罪人の爲に規定せる儀式を怠らず、皇帝の斡耳朶の門戸に跪伏して、九度、九頭の馬匹を贖罪の貢として皇帝に捧げ、且書記をして聲高らかに、合罕は察合台の死罪を赦し給へりと、宣言せしめんことを乞へり。是れ世人をして廣く、親ら跪伏して皇帝の寛仁を感謝せしことを知らしめんが爲なり。

（チに據る。）

察合台が領土全部の行政事務を委託したる馬思忽惕 Mass'oud Bey は鞠躬如として成吉思汗の入寇によりて、トランスオクシアナ地方に與へたる、災禍を救濟せんことを努めたり。蒲花羅地方の沃野に於て往時の繁榮を恢復せんことは、その殊に全力を注げる所にして、効果は忽ちに現はれ、蒲花羅の人口は增加して、再び殷富なる都會となれり。然るに人民の輕信に過ぎて熱狂せし爲、騷亂を醸し、その結果、同地は再び廢址と化するに至れり。初め蒲花羅を距る三里の Tarab の邑に篩を造りてその口を糊せるものあり、親ら魔神を使嗾して所思を實行せしむるを得、又之によりて將來の祕密を透視し得と稱したり。その名を馬赫模特 Mahmoud と呼べり。忽ちにしてこの術を傳習せるものは多人數を數ふるに至れり。蓋し、トランスオクシアナ幷に土耳其斯坦に於ては、一般に魔法を信じ、且この幻術を行ふもの殊に婦女子に多く疾病治療の依賴を受くるや、魔神を招かんとして、或は舞踊し、或は狂者の如く、跳躍せり。馬赫模特の神通力

を有せりとの評判高く、中風、癲癇その他の疾病に惱めるものは、來て之が治療を乞ひ、爲に全快したりと稱するもの少からず、馬赫模特は益〻多數の愚民を誘致せんことを圖れり。この人民の群集を見て、蒲花羅に駐在せる蒙古の守將は不安の念に堪えず、忽氈にありて政務を總攬せる馬思忽惕 Bey の許に之を報告し、愚民を惑すの狡兒を壓倒せんと決心したり。かくて Tarab に赴きて之に會見して、禮を厚ふし、蒲花羅に赴きて市民にも奇術を施さんことを乞へり、その眞意は途上に要して之を殺さんとするに外ならざりき。然るに馬赫模特のその豫定の地點に近かんとするや、その能く之を透視せると、或は豫め密告に接したるとは遽に斷定し難きも、蒙古の長官を熟視して叱咤して曰く『汝の邪なる計畫を放棄せよ、然らずんば神通力を用ひて汝の眼を抉らん』と。蒙古人はこの叱責を受けて大に驚き、神通力によるにあらずんば祕策を看破し得る筈なしと信じ、畏れてその生命に危害を加へざりき。かくて蒲花羅に至るや、馬赫模特は宮殿に住ひ、且榮譽を擅にせり。人民はその宮殿の附近に雲集して、何れも、その殊遇に與らんことを思へり。馬赫模特はこの群集を滿足せしめんと欲し、親ら宮殿の屋背に上り、口中より水を吹きて、來會者に注ぎたり。而も蒲花羅の官憲は、飽くまでその生命を奪はんとし、唯〻信者の夥しきを恐るるによりてのみ、敢て事を發せざるを知り、亡命したり。その姿を匿せるを知るや、騎兵を四方に派して之を搜索せしめ、蒲花羅を距る數里の地に於て之を發見したり。人民は之を以

て風に乘じてその地に至れるものとなし、多數群を爲して來會し、之を伴ふて、蒲花羅に歸らんとせり。馬赫模特は、この群集に向て說いて曰く『勇猛なる壯夫よ、この世界より、無信仰の徒を一掃せんことを努めよ、何れも武裝して余に隨へ』と。かくて威風堂々として蒲花羅に入りしかば、蒙古の官憲は、風を聞きて豫め撤退したり。翌日恰も金曜日に當りしかば、公衆の祈禱式に於て、Tarab の馬赫模特は君侯として一般に布告されたり。禮拜了りて寺院より出るや新君主の部下は爭ふて、豪富の邸宅に闖入して、必要なる家財器具を掠奪し、次で民衆も又之に倣ふて、刼掠を事としたり。傳へ云ふ、この夜馬赫模特女子を擁して一夜を過せしに、信徒はこの洗淨に用ゐたる水を集めて、互に分配し、鄭重に之を瓶に保存して、他日病者に分與するの用に供せり。蒲花羅の君侯として馬赫模特は有力なる人物を召集し、之を叱咤壓伏し甚しきに至りては之を死刑に處し、又僧侶の長官を免職し、親近のものを以て之に代へたり、玆に於て名望ある人人の多くは出奔したり。

この僭主は親ら肉眼にて見難き軍隊を左右し、その一隊は空中を飛揚し、他の一隊は地中を潛行すと稱せり。而して徒弟に命じて之を熟視せしむるや、徒弟は叫んで、今や魔神は某々の着色ある衣服を纏ひて現はれたりと云へり。その何物をも目擊し得ずと云ふものあるや、之に杖を加へて目擊すと叫ばしめたり。

この間に於て官憲は蒙古兵を蒲花羅と撒馬爾罕との中間なる Kerminiyé に聚合して、叛都に向つて前進したり。馬赫模特は出でて、之を迎へ擊たんとし、その門弟は戰列を爲りしが、僭主は一兵仗をも帶びず、一甲冑をも纏はざりき。然るに戰爭中、颶風偶〻起るや、蒙古兵は之を以て馬赫模特、神通力の致す所なりとし、迷信的恐怖に驅られて忽ち踵を返し、烈しく追擊せられて Kerminiyé まで退却したり。然るに勝に乘じて虐殺を行ひ初めて歸路に就ける蒲花羅の叛徒は、豫言者の踪跡を失へるを見て大に驚けり、蓋し馬赫模特は亂軍の中に死し、部下も亦之を知るものなかりしなり。玆に於て信徒は、その暫く隱遁せることを唱へ、不在中の首領としてその同胞なる謨罕默德 Mohammed と阿里 Ali とを戴けり。

この勝利後八日にして、叛徒は蒙古兵の大部分の來り侵すを認め、再び之を迎へ擊ちしが、その結果全く第一戰と異れり。即ち全然敗北して、死屍二萬を戰場に殘したりと云ふ。馬赫模特の同胞二人も亦同じく武裝せずして敵に向ひ、戰鬪の端初に於て殺されたり。この戰勝の翌日蒙古兵は蒲花羅の住民を悉く出城せしめ、男子は之を虐殺し、妙齡の女子と少年とは之を奴隷となし、都城を掠奪せんとせり。大臣馬思忽惕 Beyｔ この殘忍なる處分に反對して、少數の人に罪ありとて、住民全部にその罰を加へ、且その繁榮を回復するが爲苦心したる都城を滅却するは不可なりと說けり。その熱心なる辯論の力により、蒙古の將士は一旦その軍律に從て實行せんとせる蠻行

を中止するに至れり。但し大臣は皇帝の大命を仰ぐ可しとの議に同意して、直ちに急使を朝廷に派し、首尾よく蒲花羅の民の赦免を得たり。（へに據る。）

察合台は通常、阿力麻里 Almalig 地方、Gueuk 山脈 Cout 山附近に夏日を消し、冬季住居せる地方は之を Mérouzik-ila と稱したり。同胞と等しく、察合台も亦芳醇を嗜むこと甚しく、これ實に蒙古人通有の惡癖たり、又その女色を漁するに於ても毫も度なく、蓋し、成吉思汗の一族は淫逸に耽ることを以て、權勢を味ふの最上の方法なりと認めたるが如し。皇帝の逝ける後、帝室中の最年長者たる察合台は爾他宗族の諸公子と相一致して、皇后脫列哥那に攝政の大任を委ねたり。〔壬寅年、春、六皇后乃馬眞氏、始稱制（元史本紀）S. Lane-Poole の『蒙古古泉志』冒頭に、六四二年にチフリスにて發行せる脫列哥那の銀貨を載す。〕察合台も亦窩闊台の殂せる後數箇月にして、その後を追へり。病中寵臣の土耳其人と醫師の波斯人とは、百方治療の術を盡せしに、その遂に病に仆るるや、察合台王妃の一人也速倫 Yssouloun の命により、兩人共にその子女を併せて死刑に處せられたり。（へに據る。ラシッドの蘇尼特部の記事に、蒙古軍の將校に Tchagatai Koutchouk（小の義あり）と呼べるあり、察合台殂後はこの名を用ゐるを許されず、部族の名に因みて、Soumatui と稱したりと見ゆ。）察合台の子孫は第十四世紀の中葉に至るまで土耳其斯坦幷にトランスオクシアナに君臨したり。その君位相續に關する內亂は多年この王國の痼疾となりて之を弱め以てその Tamerlan に亡ぼさるるの日に及べり。（回教徒の史家の帖木兒の後に出でたるものは、帖木兒五世の祖たる Caradjar は察合台に仕へて攻城野戰の功あり大に重用せられたりと云へど、アライエッヂンも將たラシッドも察合台に任用されたるマスウドベー、Habesch-Amid 等と並べてカラジアルに就いて記することとなし。カラジアルは六五二年（一二五四年）に七十九歲にして死せり。Mirkhond 第四卷を參看せよ。）

第三章

蒙古の諸公子は一二三五年の總會議に於て、軍を進めてヴォルガ江西の地方を征服す可しと決議したり。會議の解散するや、この遠征に參與す可き諸公子は、各〻その領土に歸りて、之が準備を爲せり。征西の軍は、宗室の四家より出せる戰鬪員を以て之を組織し、之が指揮の任に當れるは朮赤の四子、拔都、鄂爾達 Orda 昔班、唐古忒、察合台の子貝達爾 Baïdar 孫、不里 Bouri 窩闊台の二子、貴由、喀丹、弟、闊列堅 Coulcan 拖雷の二子、蒙哥幷に撥綽 Boudjek 等の諸公子なりき。諸公子中の年長者なる拔都は總司令官に任ぜられ、而して皇帝は之が輔佐として、速不台巴阿禿兒 Bahadour を副將軍に擧げ、支那の中部より召還し西域に於てその用兵上の技能と、多年の經驗とを用ゐしめたり。（へ、チに據る。）

一二三六年の春、諸公子は各自の舍營地を出發し、その軍隊を率ゐてブルガル人の住地に界せる全軍の集合地點に赴けり。而して第一着にブルガル人を征服したり。將軍速不台は蒙古軍の一隊に將として、Boulgarie に入り、同國の首都、Boulgar を屠れり。戰敗國の諸首領は爭ふて來りて蒙古の諸公子に忠誠を表したり。而も忽ちにして、叛旗を飜へせしが、速不台は之を征討

す可しとの命を受け、ブルガリー征服の事業を完成したり。「チに據る。」翌年（一二三七年）一陽來復の候、蒙古の諸公子は欽察部（キプチヤク）を攻撃したり。欽察人（キプチヤク）の一部は、虐殺され、一部は亡命し、その他は悉く蒙古兵に降服したり。その部長の一人、八赤蠻（バチマン）Batchman（元史の訂正せるものには巴齊瑪克 Batzimak とあり、却て謬れり。）は永く蒙古人に抵抗して之を苦め、奇襲を加へて輜重を奪ひ、巧にその追擊を避けたり。蒙古兵は之を搜索せしもその效なく、八赤蠻（バチマン）は部下と共にヴォルガ江畔の森林中に匿れ、絶えずその避難の地を變更したり。公子蒙哥（モンゲ）、撥綽（ブチエク）の兄弟は、遂に斷然この森林を包圍するに決したり。蒙古兵は森林を搜索して舍營地の遺跡を尋ね、同地に遺棄されたる病める老婦より、八赤蠻（バチマン）は之を乘ててヴォルガ江上の一孤島に退却したりとの事實を知り得たり。乃ち徒渉して、この孤島に渡り、欽察人を襲擊して粉碎し盡せり。八赤蠻（バチマン）は蒙哥（モンゲ）の面前に引致され、武士の情を以て自殺を允諾せんことを求めしも、蒙哥（モンゲ）は弟撥綽（ブチエク）に命じて、身體の中ばより切斷せしめたり。「へに據る。」〔太宗九年丁酉春、蒙哥、征欽察部破之、擒其酋、八赤蠻（元史二）憲宗帝、嘗攻欽察部、其酋八赤蠻、逃於海島、帝聞亟進、師至其地、適大風刮海水去、其淺可渡、帝喜曰、此天開道與我也、遂進屠其衆、擒八赤蠻、命之跪、八赤蠻曰、我爲一國主、豈苟求生、且身非駝、何以跪人爲、乃命囚之、八赤蠻、謂守者曰、我之竄入於海、與魚何異、然終見擒天也、今水廻期且至、軍宜早還、帝聞之卽班師、而水已至、後軍有浮渡者（元史三）乙未、太宗命諸王、拔都、西征八赤蠻、且曰聞八赤蠻有膽勇、速不台亦有膽勇可以勝之、命爲先鋒、遂與八赤蠻戰、繼又令統大軍、遂虜八赤蠻妻子、於寬田吉思海、八赤蠻、聞速不台至、大懼逃入海中（元史速不台傳）乙未、定宗憲宗、皆以親王、與速卜帶、征西域、明年啓行、鈐部亦在中、又明年至寬田吉思海（元史、昔里鈐部傳）〕

這般北方の地に住へる爾餘の民族も蒙古人に征服せられたり。卽ちブルガル人の西南に隣接して割據せるフィン種族の波爾塔斯人 Bourtasses 幷に毛而杜因人 Mokschas 一に Mordouians の如き、撒耳柯思人 Circasses 及び史家ラシッドの費族非那克人 Vézofinak と呼べる民族等これなり。薩克孫人 Saxines は夙に服從したり。かくの如くにして、裏海幷にカウカサス山脈北方に位せる地方を併呑したるを以て、蒙古の諸公子は庫哩勒台（クリルタイ）を開きて、露西亞侵略のことを決したり。「チに據る。Carpin は拔都の引率せる蒙古兵が露西亞に入寇するに先ち占領したる三市の名を擧げたり。但しその第一、Burthra 一に Barchin その第二、Jakint 一に Sarguit に就てはその位地を示さず。その第三、Orna は富有なる都會にして、基督教徒 Gaza 人、露西亞人、アラーン人を始として、若干のサラセン人も來住し、ドン江口附近に位せり。曰く『同市はサラセン人等の通商を營める殷富の名邑にして、韃靼人は兵力を以て之を拔くの困難なるを認め、同市の傍を流る る江流を堰き、全市を擧げて水中に沒したり。かくて韃靼人は露國に入れり』と。」

第二編

蒙古兵は一二三七年十二月、ウラヂミール大公國の境上に現はれたり。大公國の領土は、北と西とはノヴゴロードとスモレンスクとに界し、東は、ニジネ・ノヴゴロードの彼方に於てブルガル人の住地に接し、南は欽察（キプチヤク）又は Polovtsis の平野に隣れり。蒙古兵は先づ、リヤザン Razan ロマン Roman ユリー George の三諸侯に向て、來て服從の意を表し、且臣民財產の各十分の一を交附す可しと命じたり。三諸侯は同胞なりしを以て協同して援兵を大公ユリー第二世 George に求めしに、大公は、直轄領土防備の必要を唱へて之に應ぜざりき。ロマンとユリーとは兵力寡くして野戰を試み難きが爲、籠城の策を決し、ロマンはコロムナ Colomna 城に、ユリーはリヤザン Razan 城に據れり。蒙古兵はリヤザン城を圍み、長柵を廻らして、弩砲を放ち斷えず

攻撃を繼續し、七日の後に至りて城を陷れ、城内の住民を虐殺したり。〔復與諸王拔都、征斡羅思部、至也列贊城、躬自搏戰破之、(元史三憲宗本紀)鈐部從諸王拔都、征斡羅思、至也里者城、大戰、七日拔之(元史昔里鈐部傳)〕ユリー侯は後宮の婦女子と共に悉く亂軍のうちに仆れたり。リヤザンを屠れる後、蒙古兵は之に火を放ち進んで、コロムナ城に逼れり。

ウラヂミール公は漸くにして實子フセヴオロッド Vsévolod を派して、若干の兵を率ひて、リヤザンの救援に赴かしむるに決したり。フセヴオロッドは途上リヤザンの既に焦土と化せるを聞き、コロムナに於てロマンの兵と合同せんとせり。然るにロマンは敵兵を邀へ擊たんと開城突擊を試みて戰場に仆れ、フセヴオロッドは倉皇奔竄してウラヂミールに歸り、コロムナ城亦陷れり。當時なほ一小都會たりし莫斯科は到底抵抗を試むるの力なく、その住民は或は虐殺され、或は捕虜となり、之が防禦の任に當れる大公ユリーの子公子ウラヂミール Vladimir も亦縲絏の辱を受けたり。

戰敗の報告、咄嗟の間に相次で至るに驚き、大公は、部下の諸侯に命じたる援兵の來着を促さんとしてウラヂミールを出發し、首都の防禦は之をフセヴオロッド幷にメスチスラーヴ Mestislaw の二子に委ねたり。大公はモロガ Mologa の支流シッチ Sitti 河畔に本營を定め、同胞ヤロスラーヴ Yaroslaw 幷にスヴィアトスラーヴ Sviatoslaw の軍隊の同地に到るを俟てり。

蒙古兵は一二三八年二月二日ウラヂミール城下に現はれ城壁の下に捕虜となれる公子ウラヂミールを佇立せしめて降服を命じたり。而して蒙古兵の攻擊の準備に着手せる間、その一部隊はスズダル Souzdal に進み之を陷れて之に火を放ち、住民の一部は之を虐殺し、一部は之を奴隷とせり。この部隊はかくて往きてウラヂミールの包圍軍に加はりしが、城内の住民は救濟の望全く絶えて、何れも戰死の覺悟を定めたり。諸公子諸公主等、城内の貴人は、敵兵の攻擊に着手せるを見るや、難を寺院のうちに避け、當時の思想に從ひ、僧尼として死せんが爲、何れも剃髮したり。蒙古兵は城壁を攀登して忽ちにして城を陷れ（二月八日）例の如く殘酷にも虐殺を行へり。弱冠の兩公子は、亂軍のうちに屠られたり。大公妃その他の貴婦人は、僧正を始としてあまたの貴紳と共に大本山の内陣に匿れたり。蒙古兵はこの伽藍の門戸を打破し、脇間に群集せる男女を悉く虐殺し盡せる後、内陣に潛めるものに向て降服を勸め、決して何等の危害をも加へざる可しと保證したりしが、その勸誘に應ぜざるを見るや、火を伽藍に放ちて悉く之を火中に葬り去れり。ウラヂミールはかくて、劫掠せられ燒却せられたり。

次で蒙古兵は數部隊に分れ、二月中に於て、Rostow, Yaroslavl, Gorodetz, Youriew, Pereslavl, Dmitrew, Tver, Caschin, Volok, Cosniatin 等の諸城を屠れり。大公ユリーは同月の末、なほシッチ河畔に駐りて、同胞なるキエフ侯ヤロスラーヴに要めたる援兵の到るを俟ちしが、その地に於て攻擊せられ、部下の兵士の大多數と共に戰場の露と消えたり。

この戰勝の後、蒙古兵はノヴゴロードに向て進みたり。ノヴゴロードの領域は、ウラヂミール、井にスモレンスク諸侯の領土に接し、北方は白海井に Permie に達せり。然るに同市を距る二十里の地に至りて野蠻人は突然方向を變換したり。今やノヴゴロードの上に加へられんとせるこの疾風の他に轉ぜしより、亞細亞井にバルト海方面との通商によりて、殷富を致せる北歐に於ける有力なる共和國は、全滅の災禍を免れ得たるなり、而も史家は何故に同市の救はれたるかの理由を知らず。Michel Scherbatow 露國史、第二册、五五五—五七五頁、Karamsin 露帝國史第三册二七〇—二八一頁。ノヴゴロード市が初めて、蒙古人に人頭税を納附することとなれるは、一二五九年蒙古汗、Barcai ツアール Alexandre Nevski の治世のことなり。（同上第四册、七五頁參看）

蒙古兵はカウカサス山脈北方に歸り、同地方に住へる民族の征服を完了せんとせり。撒耳柯思人井に Marimes は征服せられたり、Marimes はラシッドに據れば、Tchintchakes 民族の一部なりと云ふ。露人の Tchieremisse と呼べるフイン種族は親ら Mari と稱す、此處に所謂 Marim なら ん、チエレミス人は今日カザンの東北 Viatka, Kama 兩河の灌漑せる地方に住す。公子別兒哥 Berca は欽察人を伐てり、チに據る。その有力なる諸侯の一人、クータン Coutan はガリチア侯メスチスラーヴ Mestislaw の國舅なるを以て、部下四萬戶を率ゐて匈牙利に移住し、以て避難の地を要めんとせり。カラムジン第四册八頁 一二三八年冬、蒙古兵は Mangass この地名はラシッドに據る、或は Mikess か、を圍み、六週間の終に於て之を奪ひ、〔太宗十一年己亥、冬十一月、蒙哥率師、圍阿速篾怯思城、閱三月拔之（元史二）己亥冬十一月、至阿速篾怯思城、負固久不下、明年春正月、鈞部、率敢死士十人、躡雲梯先登、俘十一人、大呼曰、城破矣、衆蟻附而上、遂拔之（元史、昔里鈞部傳）父班都察、從征篾怯斯、有功、（元史土土哈傳）兄馬塔兒沙、從憲宗、征麥各思城、爲前鋒將、身中二矢、奮戰拔其城（元史拔都兒傳）〕翌年春は、之に隣接せ

る Derbend 地方を征服したり。デルベンドは蒙古人の Timour-cahalca 卽ち鐵門と稱せる險隘なり。貴由、蒙哥の兩公子は、皇帝より東歸す可しとの命令に接し、一二三九年秋、諸將と訣別せしが、その韃靼に着するや、窩闊台は既に、幽明處を異にせり。チに據〔太宗十二年庚子春、皇子貴由、克西域未下諸部、遣使奏捷、冬十二月、詔貴由、班師（元史二）〕

蒙古兵は、後方に殘せる諸民族を或は全滅し、或は征服して後顧の憂を除きたる後、再び露西亞に入れり。當時蒙古兵は露國の南部を蹂躪し、同地方の幾多の小諸侯は、ウラヂミール大公國に於ける野蠻人の兇暴なる刼掠を見て、その私怨を忘れて互に相提携したり。蒙古兵の退却後ユリーの同胞なるキエフ侯ヤロスラーヴは、ウラヂミールに赴きて大公の位に卽けり、蓋しユリーの三子は悉く、父に先ちて戰死したるを以てなり。ヤロスラーヴのキエフを距るやチエルニゴーフ Tchernigow 侯ミハイルはこの都城を奪ひしが、蒙古兵の近くや、匈牙利に出奔したり。

チエルニゴーフ井に Pereyaslavl を屠れる後、蒙古兵はキエフに進軍せり。キエフは三百年間、露國の首府となり、ドニエプル江井に黑海を經てビザンチン帝國と通商を營み、爲に殷富の都會たりしが、今や陷落してその大部分は破壞されたり（一二四〇年）。蒙古兵は露人の建てたるガリチアの侯國をも屠りたり、この侯國は北はリトワニアに接し、南はカルパチア山脈井にプルート、シレット兩河の河口に達せり。ルーリックの後裔にして、侯國の君主たるダニエルは匈

牙利に退却したり、（カラムジン第四册六一一四頁を見よ）ガリチアを刼掠せる後、蒙古軍の一部は、路をルューブリン州に取りて波蘭に入れり。（Bar Hebraus の傳ふる處に據れば、合罕はこの役に際し、ブルガリー幷に露西亞に於て殺戮したる男子の右耳を割斷せしめしに韃靼人は二十七萬の耳を得たりと云ふ。）

波蘭の北方は當時なほ偶像教の行はれしプロシア幷に後ポメラニアに接し、東はガリチア侯國幷に偶像信者たりしリトワニア人の住地に界し、南はカルパチア山脈を分水嶺として匈牙利に連り、西境はブランデンブルグの邊疆州幷にシレジアに隣し、而してシレジアはポーランドの本土とは認められざりしも而も之に從屬せり。一一三九年ボレスラーヴ Boleslaw 第三世の殂後、その四子に領土を分割せるより以來、波蘭は、常に內訌に苦み、諸侯は徒に野心に驅られ、復讐を思ひ、互に相攻伐して、交る〳〵鄕國を刼掠したり。蒙古兵の入寇せる時に當り、ボレスラーヴ第三世の曾孫ボレスラーヴ第四世クラカウの公位にあり、公は淳樸なる青年公子にして、匈牙利王ベラの女 Cunégonde を娶るに方りて貞節を誓ひしが爲、貞夫の異名あり、その政權の及ぶ所はクラカウ州と Sandomir 州とに限られたり。その宗主權は空名に過ぎずして、諸侯は之が下風に立つを欲せず、波蘭は四分五裂して、統一の勢ひは全く亡びたり。マズーレンとクヤーヴィエンとを領せるコンラードはボレスラーヴの伯父にして Plotsk に住したり。同じくボレスラーヴ第三世の孫なるハインリッヒ第二世は、三年以來下シレジア幷に、グネーゼン、ポーゼン、カリッシュ諸州より成れる大波蘭とに君臨し、首府を Wratislaw 卽ちブレースラヴに定めたり。

その近親なるミエヂスラーヴ Miézislaw は、オッペルン、ラチボールの兩公國卽ち上シレジアを領有せり。（Cromerus の De Origine et rebus gestis Polonorum に據る。）

蒙古兵は一二四〇年を以て波蘭に闖入しリューブリン州を屠り、戰利品を收めて一旦ガリチアに退却したり。既にして玄冬の候に至りて、復び入寇し、氷を履みてウィスツラ江を渡りザンドミール城を屠り、何等の抵抗をも受けずして、クラカウを距る七哩の地に進めり。然るに一二四一年大齋節（レント）の初に方り、蒙古兵は再びその戰利品を携へて退却し、住民の萃を拔けるあまたの男女の捕虜は互に之を繫ぎて恰かも獸類に對するが如く之を軍前に驅れり。クラカウの代官 Vlodimir は寡兵を提げて之を追擊し、Polanietz 附近に於て敵營を襲ひ、直ちに若干の敵兵を仆せしも、蒙古兵は攻擊軍の兵力寡きを見るや、之を迎へ擊て容易に之を敗走せしめたり。されどこの襲擊は全く無效なりしにあらず、捕虜は交戰に際してその束縛を解き、附近の森林に匿れたり。蒙古兵は途を Sedziszow に取りて退却を繼續し、再びガリチアに入れり。

蒙古兵は間もなく生兵を引率して、再び波蘭を侵せり。ザンドミール附近に到りて、分れて兩軍となり、一軍は Lencisc 幷にクヤーヴィエン州に進み、一軍はザンドミールの代官領を屠りたり。同州幷にクラカウ代官領內の貴族は、悉く幕下を集めて、兩代官の統率の下に敵兵に對して前進し、三月十八日 Szydlow 城附近に於て之を攻擊したり。波蘭軍は敗北し、將校と多數の

士卒とは戰死し、蒙古の兵火を遁れたるものは、附近の森林に避難したり。ボレスラーヴ公はクラカウの城壁の恃み難きを思ひ、母と妻とを携へて、Sandecz 市に近くカルパチア山脈の麓に位せる堅城に避難し、軈てモラヴィアなるシトー僧派の僧院に匿れたり。波蘭人の多數殊にその富裕なるものは、之に倣ふて、匈牙利若しくば獨逸に奔竄し、移住すること能はざる一般人民は、山林沼澤に匿れて殺戮の慘禍を免れんとせり。

勝に乘じたる蒙古兵は、クラカウに向て進み、その無人の境と化せるを見て之に火を放ち、シレジアに入れり。オデル江上の橋梁破壞せられたるを以て、蒙古兵は或は筏に乘じ或は游泳して、ミエヂスラーヴ公の面前に於て、この江流を渡れり。公は部下小數なるを以て、從兄ハインリッヒの軍隊を糾合せるリーグニッツに退却せり。蒙古兵は直ちにシレジアの首府ブレースラヴに進みしに、市街は夙に灰燼と化せり、住民は敵兵の近くを聞きて、城寨內に遁れ、戍兵は火を市街に放て、敵兵をして之に就て舍營することを得ざらしめたり。蒙古兵は數日間この城寨を圍みしが、次で圍を解きて、クヤーヴィエン州を經て進軍し來れる別軍と合し、共にリーグニッツ附近に集合せる敵兵を伐たんとせり。

シレジア公ハインリッヒはハインリッヒ長髯公とヘードウィヒ聖女との子にして、俗に恭敬公と稱せられたるが、當時約三萬の兵に將とし、之を五隊に分てり。第一隊は、十字架を握て韃靼

人に當らんとせる獨逸人より組織せられ、附近の Goldberg の坑夫の部隊はモラヴィア侯 Diпold の子ボレスラーヴ之を指揮せり。第二隊は大波蘭の軍隊幷にクラカウ人の一小隊より成り、クラカウの代官、ウラヂミールの同胞スリスラーヴ Sulislaw 之が長たり。第三隊はオッペルン、ラチボール公ミエヂスラーヴの部下を以て構成し、第四隊はチュートン武士の一隊にして、團長 Poppo d'Osternau 之を統率したり。第五隊は卽ちハインリッヒの幕下にして、シレジア幷に波蘭軍人の精華を拔き、之に主として獨逸人より成れる外國人の一聯隊を以てしたり。蒙古兵を指揮せるは、波蘭史家に從へば Peta（察合台の子貝達爾）なるが、その軍も亦五隊に分たれたり。而も蒙古兵はその兵力に於ては遙に敵兵を凌げり。

ハインリッヒ公を始として諸侯、諸將は祈禱を捧げ、聖餐の式を擧げたる後、一二四一年四月九日リーグニッツを出發し、城市を距る一里、ナイスの灌漑せる平原に於て、兩軍互に戰列を布けり、この平原には後に Wahlstadt の邑起れり、これ卽ち戰場の名なり。十字架隊は、ハインリッヒ公より、攻擊開始の許可を得、蒙古の前衞の佯て背進せるを見て、輕率にも意氣揚々として之を追擊したり。この武裝整はず半ば皮膚を露せる步兵の他の部隊と漸く遠かるを見るや、蒙古の騎兵は急に馬首を廻らして之を圍み、一齊に矢を放て之を攻め立てたれば部將ボレスラーヴ公を始として獨逸兵は、殆んどすべて戰死したり。ミエヂスラーヴ幷にスリスラーヴの兩部隊は

進んで之を救援せんとせしも、共に擊退せられ了りぬ。ハインリッヒとポッポとは玆に於て、敗兵を追擊し來れる敵軍に向て攻擊を加へしもその奮鬪效なく、波蘭軍は全く敗北したり。ハインリッヒは戰場を遠かりしも、左右には惟將校四人を餘せるのみ、乘馬傷きて仆れたるを以て、速に脫れ去る能はず、更に他の馬に乘ぜんとするに方りて敵騎に圍まれたり。佩劍を翳して、之を防がんとせしに、腋下に長槍を受けて墜落し、身首忽ち處を異にせり。波蘭軍の損失は實に夥しく、傳へ云ふ、蒙古兵は、戰場に仆れたる敵の人員を計算せんが爲、屍體に就て一耳を割斷せしに、大囊九個を滿せりと。（參考書名略す。）

勝ち誇りたる蒙古兵は、ハインリッヒの頭を長槍に貫きて、リーグニッツ城下に現はれ、降服を命じたりしが、市街は既に基督教徒の放てる火によつて焦土と化し了れり。蒙古兵は威嚇の無效なるを認めて、傍近の地方を蹂躙し盡してナイス河畔の Ottmuchow に赴き、同地に舍營すること約十五日に及べり。次で再びラチボール公國を屠り、Bolésisko に一週間滯在せる後、蒙古兵は、モラヴィアに入り、ボヘミア幷に墺太利の境上に至るまで、兵火鮮血の修羅場たらしめたり。モラヴィアは、ボヘミア王、ヴェンツェスラウスの領土の一部を構成せるが、之が防備に任ぜる兵士は少數に過ぎざりき。卽ちヴェンツェスラウスは、ボヘミア、ラウジッツ共に、野蠻人に脅かされたるを以て、之が守備を減ずることを欲せず、そのモラヴィアの救援に赴かしめた

る軍隊は五千の步兵と、若干の騎兵とに過ぎざりき。之に將たるヤロスラーヴ・フォン・ステルンベルグ Jaroslaw von Sternberg は百戰の老將にして、その受けたる訓令は敵兵に對しては衆寡敵せざれば決して之と野戰を試む可からず、專らオルミッツ城幷にブリン城の防備に任ず可しと云ふに在りき。ステルンベルグは、ブリンに於て同地方の豪族が糾合したる若干の軍隊を得、うち千人を我が旗下に收め、殘兵を留めて、同市の守備に任ぜしめ、兼程してオルミッツに至り、蒙古兵の近づくを俟たんとせり。而もその同城に入るや、敵騎の先鋒隊は既に現はれ、翌日の夜には城壘より彌望するの地平線上、何れの方面にも夥しく兵火現はれ、韃靼軍の近接せるを示したり。三日にして蒙古兵はすべてオルミッツの前面に集合し、その數箇部隊を以て之を圍みしも、而も之が包圍攻擊を開始するを欲せざりき、蓋し城中の守兵は一萬二千人强に達したり。蒙古兵は、單に守兵を苦ましめんとし、その城壁の上に現はれたるものはすべて之を射殺したり。卽ち人ありその身體を暴すや直ちに矢に中りて仆れたり。守兵は蒙古兵の弓術に熟達せるを驚嘆し、城壁上に人形（マヌカン）を立たしめ、忽ちにして矢の之に蝟集するを見て樂めり。野蠻人は又時に、市民を威嚇せんとして一齊に無數の矢を射て、恰も雲の如く城市を蔽ひ、恰も霰の如く城內に雨下せしめたり。而して、慣用の戰略を用ゐ、守兵を誘ひて城外平野に突出せしめんとせしが、老功なるステルンベルグは敢て敵の術策に陷らざりき。包圍軍は玆に於てか、火を郭外に放ち、少數の士

卒の占領したる一寺院を攻撃したり。即ち燃燒物を附着せる矢を放て、屋根の木材に點火せしめ以てこの建築物に火を放てり、偶〻疾風起りて火炎益〻熾に、消防に盡力せるものは蒙古兵の矢に仆れたり。寺院内に籠れる戰士は猛火に堪へず火炎のうちに葬られんとせしを以て、敵兵に向て突擊を試み、何れも兵器を握りたるまま戰死したり。野蠻人はその首を刎ねて、馬尾にこの流血淋漓たる戰利品を繫ぎ、かくて城壁の下に馳驅して、傲然として故ら之を城兵に示したり。オルミッツの守兵は之を目睹して、同胞の爲に復讎せんとの念燃ゆるが如く、大聲疾呼して開城突擊せんことを要求し、守將はその激昂の極暴動を起すを防止するため、全力を盡さざるを得ざりき。ステルンベルグは、嚴罰を課して、一兵たりともその哨地を動かしめず、又開城突擊を口にせしめざりき。

貝達爾（バイダル） Péta の軍の一部隊オルミッツ城下に駐屯せる間、部下の數箇部隊は全州を刼掠蹂躙したり。ステルンベルグは敵營の警戒稍〻怠れることを認めて、之を襲擊するに決し、六月二十四日の夜を以てその計畫を實行し、蒙古兵の狼狽して、兵器を手にせざるに先ち、之に多大の損害を與へたり。蒙古兵の一將軍は接戰に際して殺されたるが、これ即ち貝達爾（バイダル）なりと信じ而してステルンベルグの手に之を仆したりと傳へられたり。ステルンベルグは將に包圍攻擊を受けんとするに方りて退却し、兵三百の損失を受けたるのみにて、軍を城内に收めたり。翌日韃靼人は主

將の爲に弔祭の式を擧げ、捕虜を擧げて悉くその靈に捧げたり。蒙古兵のオルミッツ城下に滯陣せるは、主として戰友の同地方を横行して、之を修羅の巷と化せる間、守兵を牽制せんとするにありしが如く、弔祭式を擧行せる後、三日にして、營を拔きて、匈牙利に進み、拔都の指揮せる本隊に合したり。Joannis Pessina de Czechorod の Mars Moravicus プラーグ一六七七年出版三四三頁以下に據る。著者はセルヴィア Semendrie の大僧正なり、その記事に據るにステルンベルグは戰勝を謝せんとして聖母の爲に寺院を營み、ヴェンツエスラウス王より、戰功の賞與としてモラヴィアの政治を託され、紋章に公爵の冠を畫くを許され、且オルミッツ附近の地を賜りて、ステルンベルグ城を築けりと云ふ。又耶蘇會徒 Bonuslai Balbini の Miscellanea historica regni Bohemiæ プラーグ一六八七年出版一一七頁には、恩賜の地は蒙古の將軍の仆れたる戰場をも含めりと見ゆ。蒙古歐洲入寇の記事の稍〻詳細に傳へられたるは惟このオルミッツの包圍攻擊あるのみ。

蒙古兵の一部が、シレジア并にモラヴィアを刼掠しつつありし時、拔都（バツ）の親ら引率せるその一部は、匈牙利を襲へり。匈牙利王國の國境は當時アドリア海に及び、五年以來父アンドラース András 王に嗣ぎて、ベラ Bela 第四世之に君臨したり。拔都は之を攻擊するに先ち、書をベラ王に寄せて、君臣の生命を併せ保たんと欲せば、直ちに蒙古皇帝に降參す可しと命じたり。當時の事情は、皇帝フリードリッヒ第二世が、Faenza に於て、一二四一年七月三日附を以て英國王に寄せたる書信并にボルドーの大僧正に宛て佛僧 Ivon がウィーン附近のノイスタットに於て認めたる書簡に見ゆ。前記佛僧は、一二四二年蒙古兵が匈牙利より來てノイスタットを脅かせし時同地にあり、ボルドー大僧正に寄せたる書信に於て蒙古兵の部隊は大軍の近くに及びて退却し、八人の捕虜を殘したるがうちに本國より追放されたる一英人あり、韃靼人に仕へて二度ベラ王の許に使し降服を勸めたり云々と記せり。露國の各地を荒廢に歸したりし殘忍なる蒙古兵は、既にガリチアにありて一英人あり、曾

將に匈牙利、波蘭を侵さんとせるにも拘らず、溫厚敬虔にして尙武の氣勢乏しきベラ王は、一二

三九年の歳末に方りて、宮廷奉行に一隊の兵士を授けて之をカルパチア山脈の險隘に派し、木柵を築きて守備阻塞の任に當らしめし外、何等防備の策を講ぜざりき。而して翌年大齋節の頃に至り、露國の境上より益〻危險なる通報に接したるより、初めてブダの都城に國會を召集し、王國内の僧侶貴族と防備の策に關して、討議を試みたり。

貴族の一部はベラ王に對して不滿を抱けり。初め王の卽位するや、父王と王との間を絶えず離間せんとせる豪族に對して刑罰を加へたり。次で一部の貴族が匈牙利の王冠を墺太利公幷に皇帝フリードリッヒ第二世に捧げんとせる書狀を押收したるを以て、之に處罰を加へざるを得ざることとなれり。勿論これらの罪人に對する刑罰は敢て法律を勵行して嚴格に加へられたるにあらざるも、その一族はベラ王に對して忠君の熱誠を缺き、且王は歴代の國王が王室の歳入を傷くることを顧みず、熾んに貴族に與へたる御料地を回收せるを以て、益〻仇敵の數を增加したり。

その他なほ民心の不平を大ならしめし他の原因の存するありき。欽察人卽ち Coumans の一部は、蒙古の桎梏を免れんと欲し、部長クータン Coutan に引率せられて來住し、二年前國王より匈牙利に定住するの許可を得たり。クータンは四萬戸を從へ、基督教に改宗せんことを誓約したり、新にこの臣民を加へたるを以て、國王の權勢は益〻高まり、多數邪教徒改宗の希望は、國王を痛く滿足せしめたり。クータンの許に快くその要求を容る可しとの回答を齎らせる將校は、

傳道師と同行したり。一二三九年には國王親らこの土耳其種族の部長を國境に迎へ、之に多大の榮譽を與へたり。而もクーマン人は、多數の畜群を伴ひて、匈牙利の地方を横行し、隨處に損害を與へたり。卽ち屢〻住民と衝突を起し、匈牙利女子の貞節を汚したるを以て爲に各方面よりこの新來民族に對する抗議起り、更に轉じて之を迎へたる國王に對する攻擊となり、匈牙利人との紛議に際し、常にその特惠を受くることを訴へたり。ベラ王は彼此の陳情を根絶するの策を講究せんとし、一二四〇年を以て、王國内の貴族僧侶とクーマン人の頭領若干とを召集し、この國會に於て、クーマン人を各州に分配し、之に未墾の土地を給與して、畜群を放牧せしむ可しと決したり。國王はクータンを洗禮盤に案内し、而して爾餘の頭領のうちには匈牙利の豪族を洗禮保證人とせるもの多かりき。而も人民はその外來民族を怒り、その憎惡は、蒙古人入寇の時に於て破裂したり。

一二四一年を以てブダに召集されたる國會は、第一着の手段として、國會の召集に應じて來會せるクータン以下クーマン人の頭領を嫌疑者として、拘引するを以て必要なりと認めたり。次で蒙古人に對する防禦の準備に關して、討議中、宮廷奉行は來着し三月十二日部下の兵韃靼人に粉碎され、敵兵は王國に侵入せりとの報を傳へたり。この事件は匈牙利の全國の人心をして恟々たらしめたり。ベラ王は國會の議員に歸鄉を命じ、直ちに部下の兵を率ゐて來會せんことを求め

たり。クーマン人には猶豫せずして直ちに進軍す可しとの命令を發したり。國王は親ら往きてFehér 幷に Esztergom (Gran) 地方に在住せる軍人を集め、之をブダに致し、ドナウ江を渡り、臣下の着到を俟ちて、大本營をペストに定めたり、ペストは同じくドナウ江畔に位せる獨逸人の富裕なる都會にして、ブダの對岸に在り。Vácz (Waitzen) の僧正は王妃王子に隨行し、王室の貴重品を携へて之を墺太利の境上に護送するの任務を託せられたり。

拔都(バツ)は露西亞門と稱せる險隘を經て匈牙利に入り、モラヴィアより來會せる貝達爾(バイダル)は、稍〻後れて、匈牙利門と稱する峽谷に由りて進み、公子喀丹(カダン)と將軍速不台(スブタイ)との引率せる軍隊は、同時に當時、Coumanie と稱せるモルダヴィア方面より來着したり。

拔都(バツ)は直ちにペストに進み、その通過せる地方を修羅場と化せり。同市を距る半日程の地に本營を建て、附近の地方を悉く劫掠したり。蒙古の騎兵はペストの城壁に近く彷徨して以て守兵を挑みて、野外に誘はんとせしも、國王は開城突擊の擧を欲せざりき。然るに三日目に至り敵兵の再びその戰略を反覆するや、Kalocsa の大僧正 Ugolin は最早忍耐する能はず、國王の怯懦なるを詰り、その禁令を破り、部下の兵を率ゐて開城突擊を試みたり。蒙古兵は徐々に沮洳地に向て退却し、疾驅して之を超えしに、大僧正は只管敵を追擊するに急にして、思はず知らず之に陷り、重甲を纏へる士卒は泥土に沒して、進退その自由を失へり。茲に於て蒙古兵は沼澤を圍み、

矢を放て匈牙利人を殺したり。大僧正は僅に三人の部下と共に身を脫して城內に歸り、失敗を耻づると共に援兵を出さざりし國王を怒れり。

人民はクータンを以て私に蒙古人に內應すと做し、且之を以て、蒙古人を匈牙利に誘致したりと信じ、加之、蒙古軍のうちに、土耳其種族の混入せるもの少からざりしを以て、蒙古人は卽ちクーマン人なりと思へり。國王ベラに對する怨言は漸く高く『クーマン人を王國に迎へて人民の不幸を釀したるものこそ奮鬪す可きにあらずや、人民の土地を奪ひて、之が恩賜に與れるものと共に奮鬪す可きにあらずや』と叫べり。民衆の激昂は危難の加はると共に益〻甚しく大聲疾呼して、クータンの誅戮を要求するに至れり。匈牙利人と獨逸人とは、憤怒に乘じてクータンの留置されたる邸宅を襲へり。クータン君臣は暫くこの狂徒に對して防禦を試みしが、遂に戰死し、その首級は窓より群衆の間に投ぜられたり。而もクータンの罪なかりしことは軈て一般に承認せられたり。

クータンの虐殺は、單に匈牙利の不幸を大ならしむるに過ぎざりき。その報の地方に傳はるや、農民は集合地點に向て各地より參集せんとするクーマン人を襲ひ、その憎惡せるこれら外來民族を容赦なく殺戮したり。而もクーマン人の集合するや守勢より轉じて攻勢を取り、平原地方を刼掠し、その一隊は、貴族の部下の國王の許に赴くに先ち、家族を護衞して匈牙利の高地々方に向

へるものを路に要して、之を攻撃し、その大多數を屠りたり。次でドナウ河を渡りてこの遊牧民族は、疆場に出でて防備に腐心しつつありし邊疆洲の住民を伐ち、到る處火を放ち人を殺せり。その匈牙利人を殺すや、即ち曰く『クータンの爲にこの毆打を受けよ』と。同地方の主要なる兩都會、Franka 幷に Saint-Martin を全滅せる後、貨幣馬牛等莫大の捕獲物を携へてブルガリアに入れり。

國王はペストに在りて、軍隊の全部到着するを俟ち、カロチアの大僧正より、敵騎の附近を横行して殘暴を極むるを見て、之を攻撃せんことを要請せしも、敢て之を容れざりき。蒙古兵の一隊は、僧正の任地にして、ドナウ河畔に位せるヴァーツに多數の人民が貴重なる財産を携へて避難せしを攻撃し、市街を破壞したり。Nagy Várad の僧正はその部下を戰場に引率して、敗北を受けたり。即ち敵の一隊が來て Agria の城市を刼掠し、戰利品を携へて退却せるが、うちに僧正幷に教會の所有に係る寶物ありとの報を得、迅速に之を追踪したり。蒙古兵は衆寡敵せざるを見、從來屢〻用ゐて成功せる戰略に由るに決し、士卒の一部を割きて埋伏せしめ、且その傍に馬上の人形を列ね、匈牙利兵と小競合を試みたる後、この方面に向つて退却せるを以て、僧正の部下は之を追撃したり。而も、匈牙利兵は忽ちにして、新手の前面に現はるるを認め且その實數に倍加せるの兵力ありと信ぜしを以て、急に踵を返し、背進中士卒の多數を失ひたり。僧正は敗

兵を收めて、ナジー・ヴァーラドに歸り、暫く同地に滯在して、その損失を補充せる後、大本營に赴けり。

匈牙利軍の集合さるるや國王はペストを發して、蒙古兵に向て前進せしかば、蒙古兵は直ちに、兵力を集注して曩に行進し來れる道路に由りて徐々に退却したり。ベラは本營を Sajo 河の西岸に定め、遠からざる一橋梁を守備せしむるに千人の兵を以てせり。蓋し、河幅廣くして泥濘甚しきこの大河を通過するは、惟この一橋梁あるのみと信じたりしを以てなり。蒙古兵はこの河流を超ゆる五哩の地に至り、沼澤を以て界されたる一平原にその進退の自由を失ひ、一刻も猶豫せず、匈牙利兵營の襲撃を企てたり。即ち夜に乘じて一部は徒渉し、一部は、井樓に七個の弩砲を備へて匈牙利兵を驅逐せる後、橋梁に由りて、Sajo 河を渡り、あまたの騎兵隊は黎明より敵營を圍み、霰の如く之に矢を注げり。匈牙利兵は突然攻撃を受け且、無數の敵兵に圍まれたるを以て、意氣沮喪し、將校は狼狽して爲す所を知らず、營中恰も鼎の沸くが如くなりき。敵兵に向て突撃を試みしは國王の弟公爵 Kálmán 大僧正 Ugolin 幷に御堂武士(タムプリエー)の一將校に止まりしが、而も蒙古兵の放てる矢は之に大損失を與へたり。Ugolin は本營に歸りて、國王幷に貴族に向て、その優柔不斷を詰りしも、貴族中何人も、之に動かされて共に戰鬪を繼續せんとするものなかりき。大僧正は再び公爵カールマン幷に御堂武士の頭領と共に出陣せしが、第二回の突撃は第一回に比

すると遙かにその首尾惡しく、惡鬪數刻に亙れる後、カールマンと Ugolin とは負傷して歸營し、御堂武士は悉く戰場の露と消えたり。今や國王の鼓舞も將た又、勇敢なる大僧正の奮勵も、匈牙利兵をして突擊を企てしむるの效なく、正午頃まで營内は徒に雜踏を極むるのみなりき。結局公爵カールマンは三度出でて攻擊を試みしも、その奮鬪せるに際し、匈牙利兵の多くはその營を拔き、敢て公爵に倣はずして、逃走を企てたり。蒙古兵は戰列を開きて之を通過せしめ、之を射殺せんともせざりき。同じくその死を脫れんとして、匈牙利の爾余の軍隊も、先を爭て、營所を出發せんとせり。初め舍營區域を縮少せんとして、極めて密接して天幕を張れるを以て、多數兵士逃走の妨害となり、狹隘なる通路は、帳幕の繩索錯綜せるより、通過の困難一方ならざりき。國王は部下の兵士敵兵に對して、突貫を試みつつありと信ぜしに、實はその敗走せるを認むるや、乃ち奔竄してその命を全うするの外策の施す可きものなかりき。かくて蒙古兵の故ら開きたる遁路の一によりて、注意を受けずして虎口を脫したり。野蠻人は當初、間隔を保ちて、匈牙利兵を追擊し、敢て之に向て矢を放たず、而も之をして解隊せしめざりしが、敗軍の疲勞して爲すなきを見るや、劍を揮て之を殺戮したり。沼澤に驅られて戰死せしもの殊に多かりき。（前記皇帝フリードリッヒより英國王に寄せたる震翰を參看せよ。フリードリッヒ帝は匈牙利王の使節ヴァーツの僧正より詳細の事實を聽取せしが皇子、羅馬人の王コンラード、ボヘミア王、墺太利公、バイエル公等の書信も之を確證したりと記せり。）

匈牙利兵の大部分は、この敗軍に際して薙ぎ仆されたり。通路は二日程の間に亙りて、死屍累

累たるを致せり。戰死者のうちにはエステルゴム幷にカロチアの兩大僧正を始めとして三人の僧正、多數の貴族を數へたり。國王は侍臣より得たる乘馬の駿足なりしが爲、幸にして危地を脫し、カルパチア山脈に近き、Thurocz の伯爵領に避難し、圖らずも同地に於て等しく難を避けて、匈牙利方面に來れる女婿クラカウ公ボレスラーヴに邂逅したり。（Petr. de Reva de Monarchia et S. Corona regni Hungariæ 參看）公爵カールマンは迂路を取りてペストに歸り、次でその采邑に退けり、采邑は當時匈牙利王の領有に屬せし、ダルマチア幷にクロアチアより成れり。而もこの年十二月負傷癒えずして采邑に於て不歸の客となれり。（副監督 Thomas の Hist. Solonitarum Pontificum Atque Spalatensium にカールマン公は地下の陵墓に葬られたり、これ韃靼人が貴紳の陵墓を發きて、埋骨を遺棄するが爲なり、公は敬虔なりしも政事には適せざりき云々とあり。）

蒙古兵は、敗戰の追擊より歸りて敵兵の遺棄物を蒐集せしに、敗走中戰死したる內大臣の懷より御璽を發見したり。拔都（バツ）は之を以て匈牙利人を欺くの用に供したり。卽ち捕虜をして貴族人民に與へるの詔勅を起草せしめしが、その趣旨は『敢て狂犬の橫暴殘忍を恐るる勿れ、戒めて住地を棄て奔竄する勿れ。朕等は襲擊を受けたるを以て本營を遺棄したるも、神助を假りて軈て劍を握て再び出陣せんことを期す、只管神に禱りて、仇敵を擊破するに方りて神助を得んことを努めよ』と云ふにありき。匈牙利人はこの詔勅の僞書たることを知らずして大に心を安んじ、過去の災禍はすべて一掃さる可しとの希望を懷けり。然るに全國到る處、野蠻人橫行し何人も情報を

審にすること能はざりき。

戰勝を博したる後、蒙古兵はドナウ江沿岸住民大多數の避難せるペストに向て進軍したり。公爵カールマンは曩に同市を通過するに方りて、住民に諭して、亡命してその生命を保たしめんとせしに、市民は寧ろ之を防備す可しと決したり。かくて塹濠發掘工事に從事中、蒙古兵は既にペストに逼り、數日の後强襲を加へて之を陷れ、男女を擧げて悉く之を虐殺し了て之に火を放てり。

匈牙利の中央に於て、以上の事件の經過せるに際し、公子喀丹(カダン)は、路をトランシルヴァニアに取りて前進せり。森林を行進すること三日にして、突然王室所有の銀鑛の近く、高山の間に位せる富裕なる獨逸人の都會 Roudan の前面に現はれたり。同市の住民は勇敢にも開城突擊して、之を迎へて戰へり、喀丹(カダン)は背進して敵を誘ひて追擊せしめんとせしが、ルーダン市民は却て、勝利を得て軍を班し、その兵器を棄てて酒宴を開けり。僧 Roger は更にチュートン種族の常として狂喜したりと云へり。かくてその酒興酣なるに方りて、蒙古兵は踵を返し、些の抵抗だも受けずして、城門の悉く開放されたる同市に入れり。喀丹(カダン)は伯爵 Ariscalde を始として、獨逸人のうちより選拔したる六百人の士卒を引率して、山岳森林を超えて進軍を繼續し、ナジー・ヴァーラドに至れり。多數の貴族貴婦人幷に平民の妻女は、附近の地方より來て、匈牙利の一名邑たるこの城市に避難したり。同市には內城あり、廻らすに大なる塹濠と木造の高塔を具えたる城壁とを以てし、守備を圖れり。蒙古兵は容易に市

街地を占領し、之を刼掠して火を放ち、男女老幼を問はず悉く住民を屠り、次で五哩を距てるの地點に退却したり。數日の後に至り、內城の避難者は敵兵の再び出現せざるより、既に遠く去れりと信じ、往きて火災を免れたる市街地の家屋に住ひたり、然るに翌朝蒙古兵は突然之を襲ひ、その內城に達し得ざりしものを悉く殺戮したり。かくて蒙古兵は內城を圍み、城壁の一部の宛も修繕を加へられたる部分に對し、日となく夜となく、七個の弩砲を以て攻擊を試みたり。その破壞せらるるや、乃ち强襲を加へて內城を陷れたり。貴婦人は何れも大伽藍に匿れたり、蒙古兵は咄嗟の間に亂入し難きを認め、之に火を放ちたるを以て、うちに避難したる人々は悉く、猛火のうちに葬られたり。

これらの野蠻人は更に言語道斷なる濫行によりて爾餘の教會を汚したり。卽ち教會內にあまたの男女を驅りてその淫慾を滿し、次で悉く之を虐殺したり。その他或は墳墓を發掘し、遺骨を蹂躙し、或は神聖なる器物を汚し、或は役僧を拷問してその所有物を悉く發見せんとしたり。而して結局、住民のうち僅かに殘留せる貴族、市民、僧侶、軍人等は、無殘にも野外に於て虐殺せられたり。軀て死屍の惡臭鼻を撲ち、蒙古兵は化して砂漠となれるこの地を去らざるを得ざりき。その出發後、附近の山林に隱匿したりしものは、その避難地より出で來りて、伏屍狼藉たるの間に食物を尋ねんとせり。然るに陰に之を窺へる野蠻人は、急に襲ふて之を慘殺したり。かくて蒙

古兵は數〻この戰略を反覆し、一人の殺戮す可きものなきに及びて初めて退却したり。

獨逸人の市街地 Saint- Thomas 橋もナジー・ヴァーラドと同一の運命に遭ひ、Tchanad は他の枝隊によりて滅却されたり。蒙古兵は、この地方を悉く刼掠して進んで七十個村の住民の避難せる Perg の城市と、要塞に比す可きシトー僧派の Egresch 僧院とを攻撃したり。平野地方の悉く荒廢に歸したる時、露人クーマン人匈牙利人の捕虜と少數の蒙古兵とを以て組織したる一軍を以て Perg を圍みたり。蒙古兵は先づ匈牙利人をして城市を攻撃せしめ、その戰死するや、露人を驅て進ましめ、最後にクーマン人をして進擊せしめ、親らこの薄倖の徒の背後に陣し、その戰死するを見て嘲笑し、背進せるものは、之を虐殺したり。攻撃を繼續すること一週間の後、城市を陷れ住民をして悉く撤退せしめたり。軍人と貴女と極めて多數なりしを以て、之を平原の一方に置き、而して農民は之を他方に置けり。かくて先づその被服を剝ぎ、次で斧と劍とを揮て之を虐殺したり。二人の少女を助けてその娛樂に供せんとせし外、何人をもこの虐殺の慘禍を免れしめず、故に、倉皇身を地に投じて、他人の鮮血に塗れたるもの、能く死者と誤認さるる事を得しのみなりき。數日の後、蒙古兵は、Egresch の僧院を攻撃したり。籠居せるものは助命さる可しとの條件にて降參せしも何れも屠殺せられ、唯少數の僧侶の蒙古兵によりて放免せられ、秀麗なる女子のその左右に侍するが爲、留保せられたるものあるのみなりき。Roger の Miserabile Carmen 三十、三十一、三十四章に據る。

蒙古兵はかくて、その刼掠したる地方の中央に舍營し、牛馬を始として種々の捕獲品を多量に所有し、夥しき男女の捕虜を擁し、これを種々の庸役に虐使したり。Thomas の Hist Solonitartum 三十七章に據る。初め、Varadin 地方の住民の多數は、森林に避難せり。蒙古兵は森林を馳驅せるも、これら薄倖の徒を悉く檢出し得ざりしを以て、卽ち術策を弄したり。卽ちその捕獲し得たるものの一部を放免して之に告げて曰く、蒙古人を信じて一定の期間に鄉里に歸り來るものに向ては、敢て之を妨害せずと。避難者の飢餓に苦み死に瀕せるものは、この公約を恃みてその住宅に歸り、約一百の村落は再びその住民を得たり。這般の村落は何れも一人の蒙古人を駐在せしめて之を支配せしめしが、時恰も收穫の季節に當りしを以て、農民は小麥を刈て麥粉を製するが爲多忙を極めたり。蒙古人クーマン人は匈牙利人と混住せるを以て、匈牙利人は數〻妻女姉妹の目前に於て、これら野蠻人に辱めらるるを見て、憤慨措く能はず之を保護せんとしてその命を失ふものありき。而して艶麗なる女子は、之を村落の駐在官に獻ぜしに、駐在官は牛馬を與へて之に酬ゐたり。然るに小麥、葡萄の收穫終了するや、これらの駐在官は協議を行ひ、各村の住民はすべて一定の日を以て、獻納物を齎らす可く、而して家族を悉く同伴す可しと命じたり。而してこの薄倖の民の獻納物を納むるや、之を溪谷に送り、先づその衣服を剝ぎて之を虐殺し盡したり。

一二四一年夏秋の候は、蒙古兵は拱手してその日を送れり。次で來れる冬季の寒氣は殊に凛烈にして、ドナウ江も氷結せるが、これ久しく聞かざる處なりき。蒙古兵はこの機會を利用して、王國第一の都城にして、曾て國君の舊都たりし Esztergom (Strigonie 獨稱 Gran) を攻擊せんとせり。江上の堅氷果して能く人馬の通行に堪ゆるや否やを知らんと欲し、江岸に牛馬を遣棄して、遠かりて之を窺へり。三日の後に至りて、對岸の匈牙利兵は敵兵を認めざりしを以て、その退却を信じ、往きてこの牛馬を奪ひ、氷上を渡りて之を齎したり。玆に於て蒙古兵はドナウ江を渡れり。

エステルゴムの城市は圍らするに塹濠と城壁とを以てし、木造の高塔壁上に聳えしを以て、市民は、之が掩護によりて、能く敵兵を擊退し得可しとその心を安んじたり。蒙古兵は先づその兵營を些か城市より隔りたる地點に設け、以て弩砲約三十個の製作成るを俟てり。かくて城市を圍み、捕虜は、塹濠の岸に束柴を以て胸壁を築き、之が背後に弩砲を裝置して、絶えず發射せり。城壁の一部の破壞さるるや、その弩砲を以て發射せる土囊を以て塹濠を塡充したり。城中には、佛獨幷にロムバルヂアの商人も亦少からず滯在せしが、玆に於てか、火を外郭と木造家屋とに放ち、多量の衣服織物を燒き、馬匹を殺し、その最も貴重視せる金銀を埋沒し、かくて石造家屋に籠りて防禦を試みたり。蒙古兵は、掠奪の希望空に歸せんとするを見て大に怒り、木柵を城市の

周圍に廻らし、何人も脫走することを得ざらしめたり。次で石造家屋に攻擊を加へて、之に避難せるものを悉く殺したり。野蠻人は、重なる人物に對しては、徐々に火を加へて、之を苦め、その貴重品を隱匿せる地點を自白せしめんとせり。城內の貴婦人等は、美服を纏ひて、石造邸宅の一に避難せしが、その虐殺されんとするに及びて、蒙古の公子に對面せんことを求めたり。三百の貴婦人はその本營に導かれて、その仁慈に訴へ、奴婢として奉仕す可ければとて、哀訴せしが、この野蠻人は命じて、之が被服を剝がしめ、次で之が頭を刎ねたり。

この間蒙古兵は未だなほエステルゴムの內城を陷るること能はざりき。內城は隆起せる丘上にありて、西班牙人伯爵、Siméon は勇ましく之を防禦したり。遽に積雪の溶解せしが爲、蒙古兵は沮洳地を以て圍繞されたる Albe-Julie をも下す能はず、而して Saint-Martin 城の包圍攻擊中、韃靼の遠きより飛使來りて、窩闊台(オゴタイ)殂落の報を齎し、且蒙古兵に向て歸國を命じたり。かくて滅却の不幸を脫れたるはこの三城のみに止れり、蓋しブダも亦燒却せられたればなり。而もドナウ江西方の地は王國の爾餘の地方と異りて全然荒廢に歸せるにはあらず、蒙古兵は未だこの地方に舍營せず、唯その進軍せる地方を刼掠したるのみ、Rogerius の Miserabile Carmen 三十五、三十六、三十八、三十九、四十章。この野蠻人は又墺太利の地にも侵入したり、卽ち八月の初、その一隊はウィーン附近のノイスタットまで前進したり。Pernoldus の Chronicon 一二四二年の條參看。ノイスタットには僅かに五十人の守備兵と二十人の弩師とを備

ふるのみなりしが、蒙古兵は墺太利公、ボヘミア王、カリンチア公、バーデン侯 Agrar (Aquileja) 管長の聯合軍近けるを以て退却したり。前記佛僧 Ivon がボルドー大僧正に寄せたる書を參看せよ。

エステルゴムを破壞せる後、公子喀丹(カダン)は國王ベラに對して分遣されたり。ベラ王は、Thurocz 伯爵の許より Pozsony (Pressburg) に赴きしに墺太利公フリードリッヒ、王の所在を尋ねて同地に在り、深く友誼同情を示して、ドナウ江の對岸に於て、地歩を鞏固にせんことを勸めたり。而もフリードリッヒはベラ王の死命を制さるる地にあるを見るや、王が前年數〻强請を試み、又ウィーン市民に軍資を課したるに對し、賠償として巨額の貨幣を支拂はんことを要求したり。ベラ王は已むを得ずこの巨額の貨幣の一部を支拂はんが爲、貴重なる器物を交附し、殘額に代へて墺太利に接壤せる三州を割讓せんことを約したり。フリードリッヒは而もこの復讎の行爲を以て滿足せず、ドナウ江の西方に位せる匈牙利の諸州を刼掠したり、而してその東方に位せる諸州は野蠻人により既に蹂躙せられたり。加之フリードリッヒは Györ (Raab) の城中市を奪ひしが、地方の住民は兵器を握て立ち、之を克復し、內城を守れる獨逸兵を悉く燒けり。Roger 三十三章幷に Pernoldus Chronicon 一二四一年の條參看。

ベラ王は墺太利を去て、王族と共にクロアチアなる Zagrab 一名 Agram に出奔したり。夏季同地に淹留して、事變の發展を待ちしが、蒙古の劍を免れたる多數の匈牙利人は纛下に來集せり。王は人を派して、Alba Regia (マジャール語にては Székes-Fehérvár と稱す) 市に到りて István 聖王の遺骨と教會の什物とを齎さしめ、而して王妃幷に二歳の王子イストヴァーンと共に之をダルマチアに護送せしめたり。この貴重なる保管物は、之を Spalatro 市の管理に託せしが、王妃は、Clissa 城を擇んで之に潛匿したり。

公子喀丹(カダン)、國王を虜にせんとして、進軍し來るとの情報に接し、ベラはザグラブの城市を棄てダルマチアの海岸に向て奔竄し、その海岸の各都會は忽ちにして、匈牙利の亡命者を以て塡充されたり。國王はあまたの高僧、貴族を從へて、スパラトに赴き、次で Trau に赴き、更に附近の島嶼に渡れり。喀丹(カダン)は疾風迅雷の勢を以て、スラヴォニアを橫斷し、從來曾て、軍隊の足跡を印せざりし地方を通過せしを以て住民は痛く恐怖して、山林に逃匿したり。然るに蒙古の公子は、國王の既に海岸に達せるを知るに及び、聊かその追擊を緩め、Sirbium 河畔に數日間駐營したり。玆に於て男女老幼を問はず、陣後に引率し來れる匈牙利の捕虜を悉く一平原に聚め、之を虐殺したり。かくてクロアチアを橫斷し、スパラトの前に現はれクリッサ城を圍みしが、その突兀たる危巖の上に位し、之を拔くこと容易ならざるを見、且國王の城中にあらざるを聞き、轉じてトラウに赴き、國王の避難せる島嶼の對岸に陣營を張りしを以て、ベラは危害の身に逼れるを覺え、家族と寶物とを乘船せしめたり。殆んど三月を通じてこの地方に滯在せる後、蒙古兵は

上ダルマチアの沿海都市に向て前進し、Ragusa を棄てて更に南し、Cattaro, Suagio, Drivasto 等を屠りて、一人をも生存せしめず、次でセルヴィアを横斷して往きて拔都(バツ)の本軍に合し、たり。

蒙古兵の歸東の途に就かんとし、將に匈牙利を撤退せんとするや、この野蠻人は兵營に公示して、外國人は自由なるものと捕虜となれるものとを問はず、すべて、蒙古諸公子の仁慈によりて、各〻歸鄕するを得可しと告げたり。一群の匈牙利人幷にスラーヴ人は、一定の日を以て蒙古の兵營を去りしが、この薄倖の徒の往くこと未だ三哩ならざるに、韃靼の騎兵は疾驅し來て劍を揮て襲擊を加へ、悉く之を殺戮し盡せり。Thomas Hist. salonitar. Pontif 三十九 四十章に據る。

蒙古の諸公子は、數箇月間カウカサス山脈北方の地に淹留したり。これ欽察(キプチヤク)人が再び兵器を握て起ち、拔都(バツ)の弟桑庫爾 Sancor を攻擊したるを以て、之を剿討せんが爲なりき。一二四三年の末、復び進軍を繼續し、翌年韃靼に到着したり。

ベラ王は、容易にその避難せる島嶼を去らず、之に命名して、ベラ島 (Bua) と稱し Lucius のダルマチア幷にクロアチア誌第四卷第五章一六三頁に據る。以て野蠻人の全然退却せることを確むるの日を俟てり。玆に於て王は匈牙利に歸りしが、この年恰も、蒙古人の殘虐よりも遙かに恐る可き惡疫流行し、加之耕作地は蒙古兵の滯陣中全く委棄せられたるを以て、收穫を得るによしなく、飢饉はこの薄倖なる王國の荒廢を

完成したり。蒙古兵匈牙利人寇の事實を後世に傳へたるは、一二六八年を以て物故せるダルマチアのスパラトの副監督 Thomas の著サロナ幷にスパラト僧正領史及びヴァラダンの役僧 Roger の小著 Miserable Carmen これなり。ロージヤーの書には、ペストの僧正 Jean に上るの文を卷頭に載せたり。ロージヤー韃靼人のヴァラダンを屠れる當時、附近の森林に匿れ、夜に乘じて Karæsch 河畔の獨逸人の市街、Pant Thomas に脫れしも、その危險なるを思ひて更に、防禦工事を施せる Marosch の島に避難したり。然るに間もなくトーマス橋の切掠を聞き、同島を去りて林間に潛みしに、翌日韃靼兵は來て、同島を略奪して虐殺を行ひたり。住民の多くは森林に逃れ、三日の後、敵兵既に去れりと爲し、出でて食物を搜索せしに、韃靼人は陰に之を窺ひ、出でて之を殺戮せり。ロージヤーは深く潛みて、夜中を窺ふて出でて食物を求め、二十日以上この窮地を脫するによしなかりしが、韃靼人が鄕里に歸り來るものには、害を加へずと約するに至り、鄕里にありて死を俟たんよりは如かず、韃靼人の許に投ぜんにはと思ひ、曩に投降して蒙古人に屬せる一匈牙利人に仕ふることとなせり。即ち半身裸體となりて、馬車の別當を勸めつつありしが、一日韃靼人クーマン人が多數の掠奪品を携へて各方面より歸來せることあり、これ即ち夜に乘じて附近村落の住民を悉く、屠れるなりき、住民は小麥、葡萄の收穫に使役せられたるなりき(二十四、三十六章)。拠諸公子の韃靼に歸らんとするや、匈牙利よりクマニアに入りたり。玆に於てロージヤーは逃走を企て、危險を冒し飢餓と戰ひつつ數日にして Albe に至りしに滿目唯、教會邸宅の壁と人骨の殘亂せるとあるのみなりき。之を距る十哩にして俗に Frata と稱する田舍の邸宅あり、その附近の高山には避難者多く潛匿して、ロージヤーに黑麵包を與へたり。同地に止ること一箇月、ベラ王の還御せらるるに及びて初めてこの地を出發したり。(四十章)ロージヤーはベネヴエント公領に生れ、初めトレドのカルヂナル Jean に仕へて數〻教會の用務を帶びて匈牙利に派遣され、蒙古兵入寇の當時は、ヴァラダン僧院の役僧たりき。以上の危難を免れて後、法皇の知遇を受けて、スパラトの大僧正に任ぜられ、國王ベラの同意を得ること困難なりしも一二五〇年就職し(Thomas の Hist. salon. 四十八章參看)以て一二六七年その死するの日に及べり(サロナ幷にスパラト大僧正補任第三册參看)。

リーグニッツの敗戰と獨逸の境上に於ける蒙古兵の恐る可き蹂躙とは、獨逸帝國を通じて人心を戰慄せしめたり。この野蠻人は、基督教徒全滅を圖れるものなりと信じて、十字軍の必要は熱心に教壇に說かれ、財產を有するも戰爭に適せざるものは、共同防衞の爲にその資產を提供するに至れり。Eccard, Chronicon Luneburgicum 羅馬法王グレゴリウス第九世が信者に訴へて、速に波蘭人を援けんことを促したる詔書は痛く、憂愁恐怖の念を刺激したり。曰く『極めて重大なる種々の事件は常に吾人の念頭を去らず、靈地の慘憺たる現狀、教會の苦難、羅馬帝國の憂惧す可き狀態、即ちこれ

なり、而も吾人は之を告白す、吾人は以上の慘事を悉く閑却して可なり、吾人の殊に寒心に堪えざるは、韃靼人の招きたる禍患にして、基督教の今日韃靼人の爲に全滅せらる可しとの思想は、惟り吾人の骨を破碎し、吾人の髓を憔悴せしめ、吾人の身體を消耗し、吾人の精力を挫折し、吾人をして憂愁痛苦に堪えざらしめ、吾人は實に輾轉反側して、如何に一身を處す可きやを知らず』と Dlugoss の Hist. Polon. 第七卷六八二頁參看。

而も獨逸は侵略の危險を免れたり。公子貝達爾(バイダル)の軍は匈牙利に進み、殆んど三年間、同地方を化して、殺戮破壞の大舞臺と爲せり。ベラ王は歐羅巴各帝王の援助を要めしも、その効なく皇帝フリードリッヒ第二世と、羅馬法王グレゴリウス第九世とは、當時恰も疾視反目して、交戰中なりき。羅馬法王は、伊太利をして、獨逸人の統治を脫却せしめんとし、且、從來威風を恃みて敢て法權に屈伏せざりし皇帝の位を覆さんとし、その宿仇に向て教會の雷火を降し、臣民忠誠の誓約を解除し、之を教唆して叛亂を企てしめ、すべての基督教徒を驅りて反抗せしめたり。フリードリッヒは、奮然この攻擊に當り、兵を率ゐて法王の煽動によりて蜂起したる伊太利領土の戡定に從事したり。かくて皇帝の伊太利淹留中、ベラ王の派遣したるヴァーツの僧正は王の宸翰を齎らし、切に韃靼人に對する救援を求め、且之が報酬として、貢賦を致さんことを提言したり。フリードリッヒ帝はベラ王に答ふらく、若し戰爭の終了せざるに先て、伊太利の地を去らば、獨逸

はその權利を主張するが爲に犧牲に供せる鮮血と軍資との果實を失ふ可し、若し野蠻人に對して進軍せば、羅馬法王の怨恨恐る可きものあるより、自國の領土は侵略を受くるの危險に瀕す可し、而も軈て、基督教の世界に平和を確立せんことを欲するが故に、伊太利の國情鎭靜に歸し、帝國の安固保證さるるに至らば、多數の勇士を拉して進んで韃靼人を擊破す可しと。Friderici II の史官 Petri de Vineis の書簡集第一册二十九章、一五六六年出版、

而もフリードリッヒは皇子コンラード幷に爾餘の獨逸諸侯に命じて、警戒して野蠻人を擊退せしめ、又各國の國王に向て、一は宗教の爲、一は自國の安寧の爲、爭て共通の危險に對して、防禦の策を講ぜんことを要めたり。その英國王に寄せたるの書に曰く『若し夫れ韃靼人の入寇するに方りて之を阻抑するに足る可きの障壁に遭遇せずんば、爾餘の諸國も忽ちにして、暴風の襲來を受けん。蓋しこの暴風たるや罪惡の塵世を汚し、人間の信仰冷却せるが爲、上帝の降し給へるものに外ならざるなり。閣下夫れ能く、先見の明を失はず、共通の仇敵の隣國に於て兇暴を逞うするに方り、之に抵抗するの策を講究せられよ。何となれば、韃靼人は西邦を征服し盡し、基督教を根絶せんとの目的を抱きてその本國を出發したればなり。而も是れ上帝の好ませられざる所なり。望むらくは、從來恩惠を垂れ援助を假して、能く仇敵を打破することを得しめ給へる主耶蘇基督により、韃靼地方より突進し來れる仇敵の、西邦の兵と會戰して、その自負心を挫折され韃靼人の韃靼に擊退されんことを』と。前記一二四一年七月三日附書簡抄出。

皇帝の許を去りて、ヴァーツの僧正は羅馬に赴き、國王の宸翰を捧呈して、同じく法王廷の援助を求めしが、法王の回答は、その滿足ならざるの點はフリードリッヒ第二世の回答に讓らざりき。基督教徒が韃靼人より苦難を蒙るは、痛憤措く能はずと雖も、これ教徒の罪惡甚しきが爲、神怒を招けるに外ならずと斷じ、上帝恐怖の念を失はざるものは、毛布の法衣を纏ひ、黃楊の灰を額にして、上帝の慈悲心に訴ふ可しと命じたる後、グレゴリウス第九世は、ベラ王に向ては、その王國と、世人の知れるが如く野蠻人の殊に嫉視せる基督教との爲に、勇敢に防戰せんことを要め、助言を以て之を助け、且有效なる援助をも與へんことを約束したり。卽ち國王と王族とに法王廷の保護を與へ、國王は勿論、十字架の軍旗の下に匈牙利の防禦の爲に進軍するものにはすべて、宗教會議に於て靈地の十字軍戰士に授けたると同一の贖罪券を與ふ可しと告げたり。之と同時にグレゴリウスは詔書を各國の帝王に與へて、匈牙利にして若し征服され蹂躙されんか、爾餘の歐州諸國も亦同一の運命を免れざる可しとて、進んで匈牙利を援助せんことを命じたり。

ベラ王に寄せたる第二の宸翰に於ては、法王は王に向て深く上帝の慈悲を恃まんことを勸め、上帝は、罪惡の兇暴にして堪え難きを怒り、信徒に復讐の刑罰を下し給ひしも、嚴酷に次ぐに慈愛の親切を垂れ、懲治の鞭に次ぐに慰撫の手を以てし給ふ可しと云へり。卽ち勇氣と恒心とを保たんことを勸め、常に助力と忠言とを與ふ可きことを約して更に曰く『若し所謂皇帝フリードリ

ッヒにして、誠心過を悔いて、その行を改め羅馬教會に服從せば、教會は喜んで、皇帝と媾和を圖る可く、これ上帝の光榮たると共に宗教の幸福たり、これ基督教世界を平穩ならしむ可きと共に、貴下にも亦最も有力なる援助を與ふることを得しむ可し』と。Odor. Raynaldus の Annal. Eccles. 第二册二五九頁幷に二六一頁、この兩詔書は共に Laterano 宮殿に於て認められ、一は一二四一年六月十六日附、一は七月一日附なり。

亞細亞に於けるが如く、西邦に於ても、時人は、韃靼人を以て、人世の罪惡を懲戒するが爲天より降したる手段なりと信じたり。敬虔の徒は是れ卽ち聖書に所謂、基督（アンチクリスト）の敵の出現に先ちてこの世に來るべき民族に外ならずと恐れ、Thomas の Hist. Salonita 三十八章 基督教を全滅せんが爲、東邦の終點より渡來せるものなりと信じたり。この世紀に方りては、帝王の政權は封建的貴族によりて弱められ、歐羅巴は嫉視反目せる小國に分割され、何人も議會を召集せずんば、何等の策をも施し難く、共通の利害の爲に、協力すること能はず、僧院的思想と、幼稚なる信仰心と、空虛なる迷信とは、天然の睿智を昧まし、理性の發展を妨げたれば、基督教國は、之に向て刼掠を試みんとせる野蠻人の隊伍に對して、何等防備の手段を講ずるの餘裕なく、その危禍を免れ得たるは、思ふに窩闊台（オゴタイ）の殂落して、拔都（バツ）以下の諸公子が、新皇帝の推選に參與せんが爲、已むを得ず韃靼に歸りしが爲ならん。この好都合なる事情なくんば、蒙古人の戰術に卓越せるより、爾餘の歐洲諸國も亦露國匈牙利波蘭の如く悲慘なる運命に陷りしや疑ふ可からず。不幸なる經驗の示す處に據れば、當

時の軍隊は鐵甲を纏へる少數の騎兵と半身赤裸々なる多數の農民とを以て組織され、秩序立たず、服從の精神を具へず、命令は統一されず、且戰術の練習を經ざりしを以て、百戰の功を積み、規律能く整ひ、一般の方略に於て將た戰場の進退に於て奇策縱横にして且その進退輕快なる多數の蒙古騎兵に敵すること能はざりき。蒙古騎兵は駿馬に跨り、遠矢を放て、長槍、刀劍、鎚矛を手にして奮鬪せる勇士の奮戰苦鬪を冷眼に附せり。

ベラ王の王城に歸るや間もなく、兇報は韃靼兵新に入寇すと傳へたり。韃靼人の帝國は、遠くガリチア幷にモルダヴィアの兩端に達し、以て匈牙利と波蘭とを威嚇したり。羅馬法王グレゴリウスは一二四一年八月二十一日を以て殂し、Célestin は僅に數日間ペテル聖師の法座に就きしのみにて一二四三年六月二十五日まで法座は空位の儘なりき。インノーセント第四世のこの空位を充せし時、ベラ王は宸翰を寄せて匈牙利國を憐み、之が防禦の爲に十字軍を起さんことを哀願したり。インノーセントは一刻も猶豫せずアグラール管長に命じて獨逸の人民を說きて、十字架を握り、起て匈牙利人を救援せしめんとせり。而も幸にしてベラ王の憂懼は實現せられざりき。Odor. Raynaldus 一二四三年の條參看、インノーセントがアグラール管長に寄せたる信書は Anagni にて認めたるものにて、一二四三年八月カレンヅ前十二日（七月二十二日）附なり。

二年の後、リヨンに召集したる宗教會議に於て、法王インノーセント第四世は、之を召集したる主要なる理由のうちに、韃靼人に對して歐羅巴を防衛するの策を講究するの必要を擧げたり。

神怒を和げんが爲、斷食と莊嚴なる祈禱とを命じ、蒙古兵の侵略を蒙れる人民は城市の防備、道路の梗塞に關して忠告を受くるを得可く、且布教師をして法王の親書を携へて、この蠻民の首領の許に至らしめ、將來基督教徒の血を注がず、眞信仰に改宗せんことを勸誘す可しと決議したり。一二四五年の宗教會議が、この國難に際して、基督教界の爲に立てたる畫策は實にこれに止まれり。同上、第二册三三二頁。

ベラ王は王國の一半を擧げて、韃靼兵に蹂躪せられたる時に於て、フリードリッヒ第二世の援助を求め、一定の時期に先ち皇帝若し來て援助を與ふるか、若しくば皇子なる羅馬人の王コンラードを派遣されなば、忠誠を表せんと約したり。フリードリッヒは皇子をして匈牙利防禦の爲に進軍せしめんと公言せしが、而もこの約束は履行されざりき。數年の後ベラ王は、この公約を口實として皇帝の匈牙利に對する宗主權を主張せんことを恐れて、書を法王に致せしに、法王は、回答を與へてその憂懼を去らしめて曰く、條件履行されざるが故に契約は無效なり、將來何人も之を理由として、ベラ王幷にその後嗣に對して要求を提起せざる可しと。Odor. Raynaldus 一二四五年の條第二册三四二頁インノーセントの書は一二四六年九月カレンヅ前十二日（八月二十一日）リヨンにて認めしもの也。

法王アレクサンドル第四世が、一二五九年に於て匈牙利王に寄せたる書狀によりて見れば、ベラ王が蒙古の君侯より同盟の提議に接せしことを知る可し。ベラ王は、法王に對して、前年流離

困頓の苦を嘗めし當時、羅馬法王廷の態度極めて冷淡なりしことを痛言し、韃靼人より提言し來れる同盟の議を成立せしめて、憤懣の情を慰めんとて威嚇を試みたり。アレクサンドル乃ち之に答へて曰へり『貴札の冒頭に記されたる怨言は吾曹をして不快を感ぜしむ。曰く、貴國の無殘にも韃靼人に刼掠せられたる時、貴下は吾曹の先代グレゴリウスに援助を求めしに、グレゴリウスは、貴下と貴下の先代との至誠上帝の爲に盡せし事を忘却せるが如く、行爲に於ては勿論、言論に於ても、貴下の臣民の虐殺に對して、同情の態度を示さんとせず、グレゴリウスの殂後、法王の缺位となりし當時は又、カルヂナル等より、將來の法王は、貴下の國境より野蠻人を擊退せんが爲畫策す可しと約して、貴下を安慰せしも、而も、その希望も亦貫徹せられざりきと。而して韃靼人の新に入寇せんとするに對して、教會の援助と忠告とを求めつつ、貴下は教會が前年の危難に際して貴下を遺棄し、蔑視したりと說く。而も貴下にして、若し、當時に於ける教會の位地の多事なりしことを一考せば、吾曹は信ず、貴下の能く之を寬假し、貴下の不服を訴ふる懈怠なるものは、全く、時世の不利と、當時教會を煩はせしものの罪惡とに基けることを諒とせらるる可きを。蓋し皇帝フリードリッヒは法王廷に對して最も橫暴なる抑壓を加へ、そのすべての權力を蠶食し、かくて結局、その親ら抑損す可き時に方り、天下赤子の教會の保護を奪はれて、征服されんとする時に方り、惟り至高の榮譽に浴せんとせるなり。教會は赤子と共に自由を擁護せんが爲に莫大の經費を投じ、巨額の負債を起し財政困難の極に陷りたれば他に救助を與へんことは思ひもよらず、その歲入は、以て借り入れたる負債の全部を償却するに足らざりき。次に新法王の卽位後、カルヂナル等の約束せし所を履行せざりしは、救助の最早必要ならざりしが爲にして、韃靼人は夙に貴下の領土を撤退したりき。貴下は更に附言すらく、彼の有力なる仇敵に抵抗せんことは不可能なれば、若し將來法王廷の援助を受くること能はずんは、遺憾ながら、已むを得ず、韃靼人と和戰の同盟條約を締結す可しと。貴下の所言に從へば、盟約は數〻韃靼人より强いられ、貴下の取捨に任せて、或は貴下の公子に韃靼君位の公主を妻し或は貴下の公主を韃靼の公子に嫁す可し、との提議を受けたりと云ふ。而して和約の第一に明記す可き條件は、貴下の公子は全國民の四分の一を率ゐ、韃靼兵の前衞を組織して遠征を企て、基督教徒を全滅す可く、貴下は或は殺戮され或は降服したる基督教徒の財產幷に戰利品の五分の一を收む可しと云ふに在りて、その他貴下は毫も韃靼人に貢賦を納むるを要せず、韃靼人は貴下の領土に入らず、交涉の用務を帶びて使節の來る時はその隨行員は百名を超えざる可しと。而も、這般の條件を悉く、沈默に附せんこそ寧ろ策の得たるものなれ。蓋し、貴下は彼の仇敵に對して、救援を恃む能はずとなすも、宗教の爲に正義の爲に戰ふ時は、通常寡を以て衆に勝つの常なれば、上天の援助期して俟つ可く、又貴下を威嚇するの危難は爾餘の君侯も共通に感ずる所なれば地上の援助亦望あり、假りに然ら

ずとするも、而も信徒たる國王がかかる辱づ可く賤む可き條件によりて、地球上の最優麗なる王國は勿論その一身一族の生命を保たんとするは恐る可きことたり。』法王は之に次で美德名譽宗教の本義より演繹したるすべての理由を擧げて、國王のかかる提議を排斥す可きことを諭し、韃靼人は從來爾他の國民に對して信義を守りしことなければ、國王と雖もその言質に安ずること能はず、韃靼人は容易に國王を陷擠せんが爲誘惑を試みたるに過ぎざれば、俗界の利害より見るも又その提議に應ず可らずと論じ、人民の蒙れる災禍は、上帝より降されたる懲罰に外ならずと明言せる後、熱誠を以て、正義と敬虔との世に行はれんことを努めて、王國をして懲罰を免れしめんことを戒め、弩師千人を送附せよとの要求に應ずること能はざるを謝し、法王廷の十字軍戰士に授くる贖罪券は、國王に取りて至大の援助たる可きことを保證せり。Odor. Raynaldus 一二五九年の條、この書は第五年十月イデス前二日（一二五九年十月二十二日）附 Anagni にてと署せり。

歐羅巴は常に新に蒙古兵の入寇ある可きを恐れて動搖し、法王アレクサンドル第四世は、基督教徒に向て野蠻人擊退の方略を講ぜんことを求めたり。その一二六〇年を以て、ボルドー大僧正に寄せたる信書に於ては、法王は一國の兵力は能く獰猛なる群衆の亂入を驅逐するに足らざれば、基督教國の兵力を悉く合同せんことを求め、且苛酷なる刑罰を以て威嚇を加へ、基督教徒をして破廉恥にも韃靼人と同盟することを得ざらしむ可しと云へり。而も危險の敢て切迫せりと云ふに

在らねば、少くも佛國に於ては、毎月第一の金曜日に、禮拜行列を擧行し、その他祈禱、斷食、布施等の勤行を怠らざれば可なりとなせり。Martenne 幷に Durand の Veter scriptor. et monumentor. amplissima collectio 巴里一七二四年發行第七册一六八頁一七〇頁

同年の初、法王は佛國王に報ずるに、韃靼人進んでシリアの都會を征服せんとし、パレスチナの基督教徒は戰々兢々たりとの旨を以てせるより、ルイ第九世は、巴里に王國の貴族僧侶を召集せしに、この會議は禮拜行列を行ひ、連禱、祈願を捧げ基督幷に聖師を惡罵することを避け、漁獵、奢侈、美服、肉食を禁ず可しと命じたりと、Guillaume de Nangis は云へり。ギーヨーム・ド・ナンジ Annales de saint-Louis 二四七頁。

翌年アレクサンドル第四世は復活節（パーク）に際して宗教會議を羅馬に召集したりしが、韃靼軍西邦に向て進軍すとの報に接して、會議の期日を延期し、匈牙利に入れる韃靼兵國王ベラに擊破せられて、五萬二千の死傷者を出したりとの情報を得て、恐慌のその跡を收めしに及び、六月の末に至りて漸く開會したり。Harduinus の Acta Conciliorum 巴里一七一四年發行第七册、五四六、七頁、一二六一年韃靼人、匈牙利に入寇して敗北したりとのことは、この書に宗教會議に關する史籍に基きて記載しあれど、確かに虚報にして匈牙利の史家は之に就て記することなし、但し George Pray の Annales regum Hungariæ 第一册三〇九頁は事實として之を收む。この會議に於て、兇猛なる蠻族の威嚇に對し、基督教國を保持するが爲、如何なる方畧を取る可きやを討議したり。法王は勅諭を發せしめんとせり。

し各國の王侯に軍備を整へんことを要め、人民に訴へて十字架の軍旗の下に基督教の仇敵を擊退

一二六五年、ベラ王は、法王クレメントに向て、韃靼人將に匈牙利、波蘭に侵入せんとすと通報せしより、法王は、兩王國幷に之に隣接せる獨逸の地方に於て十字軍を勸誘せしめたり。Odo.r Raynaldus 一二六五年の條 而も敵兵は來らざりき。實に一二八五年に至りて、匈牙利は再び蒙古兵の入寇に遭ひしが、蒙古兵の王國に侵入せしは、國王、László (Ladislas) に叛けるクーマン人に誘はれしが爲にして、刼掠を試みて深くペスト附近に至り、戰利品を携へて退却したり。Joh. de Thurocz 匈牙利年代記七十八章

波蘭は、遙に野蠻人の刼掠に遭ひたり。一二五九年リトワニアを侵略して、山林沼澤に避難し得ざりし住民を悉く虐殺せる後、蒙古兵はその軍旗の下に收容して進軍せしめたる露西亞リトワニアの軍隊と共に波蘭に入れり。Sandomir の市街を燒きて、その內城を圍みしに、市街幷に附近村落の住民は貴重なる財寶を携へて之に籠れり。露軍の將校中、ガリチア王ダニエルの同胞なる Vassilko と王の實子なる Lew とは同地の守將、Peter of Crempa と會商するの任務を帶び、若し來て蒙古の將軍の面前に俯伏せば容易に投降條約を定むるを得可しと說きかくして內城に籠れる多數基督敎徒の助命を圖る可しと勸め、その一身に危害を加へざる可きを保證したり。深くこの辭を信じてペートル・オブ・クレムパは貴族の有力者と共に敵營に赴きしに、その蒙古の頭領の前に跪きて、憐を乞はんとするや、忽ち襲擊され、その被服を剝がれ虐殺せられたり。茲に於てか野蠻人は直ちに鯨波を作りて、最早安全なりと信ぜられし內城を攻擊して之を力取し、

男子は之を虐殺し、女子は之を助けて、奴隸となし、その殺戮に倦むや爾餘の人民を驅てヴィスチュラ河に擠れたり。火を內城に放てる後、蒙古兵は疾驅してクラカウに進みしに、何等防備を試むるものなかりしかば、之を焦土と化せり。ボレスラーヴ貞夫王は匈牙利に亡命したり。蒙古兵はこの地方を刼掠して Oppeln 領の Bythom に至り、三箇月の後戰利品を携へて、露國に歸れり。その後復た露人幷にリトワニア人と相合して數〻波蘭に入寇し、常に同一の蠻行を反復したり。Cromerus の Rer. Polonicar. 第十卷

露國は波蘭匈牙利よりも更に薄倖にして、甚く蹂躪せられたる後、二世紀以上、蒙古人の恐るる可き統治を受けたり。大公幷に從屬諸侯は、朮赤(チューチ)の後裔なる汗の臣隸となり、汗は黑海裏海北方の地に君臨し、ヴォルガ江畔の薩來 Séraï に都城を置けり。諸侯は數〻宗主たる蒙古汗の朝廷に赴きて忠誠を表せざるを得ざりき。その領土の所有權に關して、數〻紛議を釀せしより是非曲直を蒙古汗に訴へて之が裁決を仰がざるを得ず、而して訴訟に勝たんとせば、貴重なる進物を捧呈せざるを得ざりき。蓋し貪婪飽くなきこと蒙古汗幷に大官の如きは他にその類例なければなり。大公の死するや、その位を襲はんと欲するものは、往きて拔都(バツ)の子孫の愛顧に與らざるを得ざりき。その所領もその生命も一に蒙古宗主の恣に左右する所なるが故、常に之を奪はれ之を失ふの危險に瀕せるを以て、諸侯は數〻薩來(セライ)の朝廷に參覲し、競爭者の告訴に對して辯護せざるを得ざ

りき。諸侯の薩來(セライ)にあるや屈辱的儀式を課せられ、野蠻人特有の暴慢なる態度を以て遇せられたり。蒙古の官廳は、露國の各州に創設せられ、誅求壓抑は何等の制裁なく行はれたり。汗より派遣せる使節の露國大公の朝廷に着するや、大公は徒歩して城外に之を迎へ、宗主の使節の面前に俯伏し、之に馬乳酒 Coumiz を盛りたる杯を捧げたり。かくて使節の脚下に黑貂の皮を敷くや、使節は高聲汗の命令を朗讀し、大公は地上に跪きて之を聽けり、Karamsin 露帝國史第四、五、六册、Cureus の Silesiæ Annales 六七頁 露人は人頭稅として毛皮を蒙古人に納め、之を得るの資力なきものは、數〻奴隷の境遇に沈淪したり、Carpin の Voyage 第七章。

露國に對する蒙古人の統治は、第十五世紀の終まで繼續したり。朮赤(チューチ)の子孫の間に王位相續の爭起りて內亂を誘起せしが爲、薩來(セライ)の汗の權力を弱めたり。汗の帝國の分れて數國となりし時に方り、露國の大公は、都城を莫斯科に定め、一族親王の采邑たりし領土を直接併合して、益〻權勢を加へ、結局、蒙古汗に貢賦を納めず、その宗主權を承認せざることとなり、次でその領土を奪取するに至れり。

蒙古人露國統轄の初年に方りては、その刼掠を北方に及ぼし、遠く Permie に達せしものの如し。一二一七年より一二六三年迄、那威の王位にありし Haakon 第二世の治世中、多數のペルム人は韃靼人の蠻行を避けて、那威に移住し來れり。王は之を基督教徒たらしめ、Malanger

灣沿海の地を之に與へたり。Thormod Torfœus の那威王國史 一七一一年出版第四册三〇三頁

第四章（定宗紀）

窩闊台の殂するや、帝都附近の道路は悉く監視せられて、何人も出發することを許されず、飛使は各方面に派遣せられて、行旅はすべて途上に淹留す可しと命ぜられたり。窩闊台は當初その最も寵愛せる第三子、曲出（闊出、斡赤）Goutchou を皇太子に定めしが、この青年公子は一二三六年湖廣に於て軍中に殂し、その長子失烈門 Schiramoun は窩闊台の寵を恣にし、宮中に於て撫育され、太孫と稱し皇嗣と目されたり。然るに皇后脫列哥那は太宗の長子貴由（古與）を皇帝たらしめんと欲したり。（チに據る。この親王の名は Couyouc 又は Gouyouc と發音せるが、Vincent の Miroir Historique には Cuiuc と記せり。但し他書に Cuine と記せるは全く誤寫なり。）貴由は一二〇六年を以て生れ、諸王、按赤帶 Adjitaï に從て金國の征討に與り、而もその親王を捕虜となせり、（ハに據る。太宗嘗命諸王按只帶伐金帝、以皇子從虜其親王而歸（定宗本紀））其後拔都の西征に從ひしが、一二四一年一月、窩闊台より部下を率ゐて歸國す可しとの命令を發せられ、かくて貴由は歸國の途上父帝の訃音に接したり。

皇室の諸公子幷に、軍隊の將軍は、訃報と共に、脫列哥那の發したる窩闊台の斡耳朶に來りて皇嗣を選定すべしとの召集狀を受けたり。その間、察合台以下爾餘の公子は、監國のことをこの

皇后に委ねたり。皇后は元來、蔑兒乞部兀洼思氏の長、帶亦兒兀孫の妻なりしが夫の成吉思汗に叛きし時、共に捕虜となり、皇子窩闊台に與へられてその配となりしなり。

監國皇后は先づ右丞相鎭海 Tchingcaï を免職したり。窩闊台のこの右丞相は、畏兀兒部の出身にして、（鎭海性烈台氏、以軍伍長從太祖……尋拜中書右丞相、己丑、太宗卽位、扈從至西京、攻河中河南鈞州、癸巳攻蔡州、以功賜恩州一千戶、先是收天下童男童女、及工匠、置局弘州、旣而得西域織金綺紋工三百餘戶、及汴京織毛褐工三百戶、皆分隸弘州、命鎭海世掌焉、定宗卽位、以鎭海爲先朝舊臣、仍拜中書右丞相、薨年八十四、子十人（元史一百二十鎭海傳））その本任の外、別に日々皇帝の嘉言を記錄するの任務を託せられたり、（チに據る。察合台は又支那人を左右に置きてその言を錄せしめしとぞ。）これ往古より支那皇帝の朝廷に於て行はれたる慣例なり。

この頃曩に商品を携へて蒙古に到りたる回教徒、奧都剌合蠻 Abd-our-Rahman（元史語解、奧都剌、合蠻を溫都爾、哈瑪爾と改め、說明すらく、溫都爾高也哈瑪爾鼻也と、是れ例の曲解也）は深く脫列哥那の信任を得たり。奧都剌合蠻は窩闊台治世の晚年に於て、支那の課稅を買撲せんことを建議したり。初め耶律楚材は黃河北部諸州の課稅を定むるに方りて、歲に銀五十萬兩を得可しと計算せしが、河南征服後、歲入は次第に增額して、一百一十萬兩に達せり。奧都剌合蠻は一二三九年に於て年額二百二十萬兩を以て、收稅を受負はんことを獻策したり。耶律楚材は之を增額して五百萬兩となすも敢て不可能にあらずと雖も、而も納稅者を壓碎せずんば止まざる可しとて、極力回教徒の提議を論爭し、聲色俱に厲しく、言、涕と俱に下りしを以て、窩闊台は爾ぢ搏鬪せんと欲する耶と云ふに至れり。窩闊台は課稅買撲の議

を嘉納したり。耶律楚材は痛く之を慨き乃ち曰く不平の精神は早晩之が爲に起らんと。（イ、ロに據る。）耶律楚材は新爾來その信任は漸く衰へ監國皇后は、奥都剌合蠻を帝國財政の長官に擧げたり。財政長官が、皇后の要望せる金銀を徵收せんとして壓抑の手段を用ゐ、爲に多年の苦心經營せる治績の破壞されんとするを見、深く之を遺憾とせり。かくて一二四四年六月を以て和林に卒せしが、時に年五十五歳なりき。〔太宗十一年己亥、十二月、商人奥都剌合蠻、買撲中原銀、課二萬二千錠、以四萬四千錠、爲額從之。十二年庚子、春正月、以奥都剌合蠻、充提領諸路課稅所官。甲辰年、夏五月、中書令耶律楚材薨（元史二）〕人あり攝政皇后に譖して、楚材は永く支那財政の事務を管理したれば、必ずや巨額の財産を蓄積せるなる可しと說けり。玆に於て命じて家宅搜索を行はしめしに、唯樂器、書籍、地圖、賞牌、碑石等を發見せるのみなりき。〔後有譖楚材者、言、其在相位日久、天下貢賦半入其家、后命近臣麻里札、覆視之、唯琴阮十餘及、古今書畫金石遺文數千卷（耶律楚材傳）〕

耶律楚材は支那史家の批評に從へば、天資英邁にして遙かに時人の上に出でたり。その蒙古の朝廷に仕ふるや、正義を持して、敢て權勢に屈することなかりき。國家の利病と生民の休戚とを陳ずる毎に辭色懇切なりき。窩闊台も亦時にその諫言を懌ばず、一日楚材に語て曰く『汝又百姓の爲に哭せんと欲する耶』と。耶律楚材の課せられたる任務は高尙なるものなりしが上、政權を擁せる無智蒙昧なる外國人の間に孤然として孤立せるよりその苦衷察す可きなり。窩闊台の一世嗣は、その功を記すが爲、廣寧王に追封し、〔追封は至順元年のことなり。〕文正と謚したり。（イ、ロに據る。）アベル・レミュザ

ーの新亞細亞雜纂第二册、六四—八八頁に耶律楚材の傳あり。耶律楚材の子耶律鑄 Tchu は父に嗣で、中書左丞相となり、孫耶律 Thott houssé は忽必烈帝以下に仕へ、也孫鐵木兒（泰定）帝の時一三二七年に逝けり、蒙古史に關する著述あり。○Hyacinthe 師はその二九四頁の註に述べて曰く、耶律楚材の墓は、北京を距る三里半なる萬壽 Ouanscheou 山下に在り、一七五一年政府は命じてその墳墓に近く、新に一寺を營み、且碑文を立てしが、舊寺觀も一六二八年まで存せり、楚材夫妻の坐像あり、楚材の長髯は膝に達すと。○波斯の史家は、窩闊台の時牙老瓦赤 Mahmoud Yelouadj 支那に於ける蒙古領の政治を掌ると云ひ、支那の史家は耶律楚材なりと云ふ。窩闊台の死後 Mahmoud Yelouadj も耶律楚材と同じく、失意の人となりしが、蒙哥の治世に至り、一二五二年を以て再び支那の政治を委ねられたり、且又 Mahmoud Yelouadj は回教徒にしてその子 Mass'oud bey は察合台に仕へて土耳其斯坦、トランスオクシアナを治めたり、耶律楚材は成吉思汗の西征に從ひしが、Mahmoud Yelouadj も從征し、哥疾寧の知事に任ぜられたり、これ或は同一人なるにあらざるか。

土耳其斯坦幷にトランスオクシアナの行政長官にして牙剌控赤 Yelvadje の子なる馬思忽惕 Mass'oud bey は拘引されんことを慮りて、公子拔都の許に避難したり。阿兒昆 Argoun は波斯の行政長官闊里吉思 Keurgueuz を拘引す可しとの命令を奉じて同國に派遣せられ、攝政皇后の許に引致せしに、皇后はこの大官に對する宿怨を晴さんが爲之を禁錮し阿兒昆を以て之に代へたり。皇后は一女官の言を聽きて、之に左右されしが、この女官は名を法特瑪 Fathma と呼び、蒙古兵が曩に波斯の Thouss を刼掠せる時、捕虜となれるなり。世人窩闊台の在世中最も有力なりし多數大官の失意の地位に陷りしを以て、この回教女子の勢力に歸せり。

窩闊台の殂後間もなく、叔父帖木哥斡赤斤は帝位を奪はんとして、聊か計畫する所あり、手兵を引率して帝都に近けり。脫列哥那は婉言を以て、何故に多數の護衞兵を從へて女子の許に來れるやを問ひ、窩闊台の宮中に滯在せるその子を遣せり。時に貴由既に Imil 河畔の龍庭に歸着せ

りとの報あり、帖木哥(テムゲ)はその計畫を遂行するの時機にあらざるを思へり。玆に於てその踵を返して、監國皇后には、その不幸を弔せんが爲に來れるに過ぎずと答へたり。

總會議は先帝の常に夏季に淹留したる科依揭 Gueuca 湖附近の一地(元史には達蘭達砲 Dalandaba とあり、七十嶺の義なり、)に召集されしが、一二四六年の春まで、成立するを得ざりき。かく遷延せしは全く拔都(バツ)の踟躕せしが爲にして、拔都は攝政皇后をも、その子貴由をも好まず、辭を足疾に託して庫哩勒台(クリルタイ)に赴かず而して拔都こそは宗族の長者なるより、皇族の爾餘の公子はその不在に乘じて新帝推選のことを擧行するを欲せざりき。皇后の要求懇切なりしより、拔都も結局來會を約せしが、而も遂に來らず、會議は、その不在なるにも拘らず開會されたり。この會議の召集は、亞細亞の王侯を動かし大陸の各地より韃靼の中心に向ひたる各驛路は、行旅を以て果され、宗族の公子は多數の士卒を率ゐて之に赴きたり。皇帝推選の地に集まれるは、八十人の男子を伴へる斡赤斤(ウヂユークケン)、その諸子を從へたる拖雷(ツルイ)の寡婦、窩闊台(オゴタイ)、朮赤(ヂユーチ)、察合台(チヤガタイ)の子孫幷に之に隨行せる諸延幷に各軍隊の長官、支那に於ける蒙古領の軍政民政長官、波斯の總督、阿兒昆(アルグン)、土耳其斯坦幷にトランスオクシアナの總督、馬思忽惕(マスウド)、その一行に加れる同地方の君侯、貴族、Roum のセルジューク朝の支丹 Rokn-ud-din、露國の太公ヤロスラーヴ、グルジアの王位を爭ひ何れも David と呼べる兩公子、Aleppo の君侯の弟、バグダードのハリフハの使節、Alamout の Ismaïliyen 宗派の君侯、

Moussoul の君侯、Farss の君侯、Kerman の君侯の使節ありて、何れも美事なる貢物を齎らせり。而して亞細亞的豪奢を競へる多數の堂々たる群衆の間にありて、二人の歐洲の僧侶はその質樸なるによりて、殊に注意を惹けり。この僧侶こそは卽ち、韃靼人の間に福音を說き之をして將來基督教徒に對して干戈を弄せしめざらんとして羅馬法王の派遣したる宣教師なりき。昔喇斡(シラオ)耳朶(ルツ)と呼べるこの地には、二千の帳幕設けられしも、以て來會せる多數の公子君侯、使節の宿舍に充つるに足らず、何れも只管新皇帝の面前に俯伏するの時を俟てり。商人は亞細亞各國の貴重なる產物を携へて夥しく集まれり。皇帝の帳幕の附近は、群集、殊に著しく、食物は漸く缺乏して、極めて高價に賣買せられたり。(へ、チに據る。兩書とも、此際佛國の使節來會したりと記せるが、その法王の派遣せる二人の宣教師を指せるや疑ふ可からず。)

宗族の諸公子と諸將軍とは、能く二千人を收容し得可き大帳幕に於て集會したり。この帳幕より稍〻隔りて、繪を以て蔽ひたる欄干を廻したりき。帳幕に二個の出入口あり、その一は皇帝の出入に充てて毫も警備せず、蓋し何人も敢てこれより入らんとするものなかる可しとなせしが爲にして、その一は弓と刀とを以て武裝せる兵士之を看守せり。會議に與れる人々は、日中まで政務に關して協議し、次で馬乳より釀せる酒を痛飲して之を樂み、且日每に着色を異にせる衣服を纏ひたり。貴由(クユク)は推選されざる以前より特別の待遇を受け、その帳幕より出る每に唱歌を合唱して、敬意を表し、又その前には深紅色の羊毛の房を以て末端を飾れる數條の竿を傾けたり。推選

の時期近くや、皇后をはじめとして、總會議に集まれる人々は、昔喇斡耳朶を距ること三四哩に位せる一地に赴き、黄金斡耳朶と稱する帳幕に於て會合したり、かのかく稱せらるるは、延金を以て覆はれたる柱によりて支へられ、黄金の釘を以て固められたるが爲なり。Carpin に據る。宗族の諸公子幷に部族軍隊の各首領は、新帝推選のことを商議し、先づ窩闊台の子孫のうちより、之を擧ぐ可しと決したり。失烈門は豫め祖父より皇嗣と定められしも、會議に集れるものは、監國皇后に左右されて、この公子は未だ成年に達せざれば、貴由を選む可しとの意見を纏め、全會一致を以て之を投票したり。貴由は慣例に從ひ、帝位に即くを拒み、一々爾餘の公子を擧げてその遙かに適任なるを說き、身體の健康ならざるを理由として、辭意を述べたり。永く抵抗を試みたる後、結局會議の意見に從ひ、帝國の重任に當る可しと言明せしが、而も之が條件として帝位は必ず余が子孫に傳へらる可しと要求せり。來會者は乃ち一の決議書に署名して次の如く約束したり、曰く『卿の血統にして若し膏若しくば叢のうちに投ずるも狗も將た牛も喰はざる一片の肉塊の存する限り、我等は他の何人にも汗の位を授けざらん』と。次で何れもその帽を脫し、その帶を解き、貴由を黄金の玉座に陞らしめ、汗の尊號を以て之を祝せり（一二四六年八月）。會議に集れるものは、九度跪きて新皇帝に誠忠を表し、平野に充滿せる群集、附庸國の君侯、外國の使節等、敬意を表して、皇帝の帳幕の柵外に立てるものは、之と同時にその顏を地上に伏したり。新

臣民より忠誠の表示に接したる後、貴由は宗族の諸公子幷に將軍を從へて帳幕を出で、三度膝を屈して太陽を拜したり。これらの儀式了て饗宴となり、皇帝は玉座に即き右には公子、左には公主各〻床几に坐したり。食物は唯、獸肉のみより成り、葡萄酒と馬乳酒とを盛にまはし飲み、音樂は軍歌に伴奏されて、酒宴は深更に達せり。第十三世紀の旅行家にして、蒙古皇帝の即位式に就て記述せるもの二人あり、一は Prédicateurs 僧派の Simon de St. Quentin にして一二四七年波斯に駐在せる蒙古の將軍 Baïdjou の營に赴き、Goutyouc 汗推選當時のことを錄せり。（Bergeron の叢書に收めたる Carpin の旅行記第九章）但しシモンは韃靼に赴けるにあらず、アルメニア公 Haiton もその著東邦史（ベルジュロン叢書）に於て、Changius（成吉思）の即位に就て記せり。この饗宴は相次で七日間反覆されたり。宴會了りて、貴由は父汗の寶庫に藏められたる金銀、布帛、寶玉を來會者に賜ひ、之が分配を拖雷の寡婦、唆魯忽帖塔尼 Siourcoucteni に委ねたり。これ庫哩勒台に集まれる人のうち最も重ぜらる可き人物なるを以てなり。下賜品は何れも位階に從て與へられ、先づ皇室の公子公主よりはじめ、次で之に奉仕せる人々に及び、以下、諸延、將軍、各將校より、隷屬諸國の王侯大臣幷にその隨行員までこの恩惠に浴せり。新皇帝は、その金錢を吝まざることに於て、父汗をも凌がんとし、七萬巴里施の價格を有する商品を購ひ、征服國に課す可き賦稅擔保の手形を以て之を支拂ひたり。官吏は皇帝に從てこの貨物を護送すること困難なるより之を和林の倉庫に藏めんとせしに、貴由は之を貯藏するも何の用かあるとて、之を士卒は勿論來集せるすべての人にも亦分配せしめたり。即ち先づ右翼左翼の部族に豐かに施して、孫提もなほ且、恩賜に與らざるものなからしめ次に外國人に及ぼし、從僕

も亦皇帝の恩施を受けたり。この分配の後なほ夥しき貨物殘りしかば再び之を分配せしもなほ盡きざりき。結局貴由は一日殘れる貨物の堆きを見、命じて之を掠奪せしめたり。Carpin も皇帝の帳幕を去ること遠からざる丘上に金銀絹布を滿載せる貨車五百輛以上あり、皇帝は親王と貴族とに之を分配し而して、何れも之を臣下に賜へりと云へり（十二章）。

汗が第一に視たる政務は、公子斡赤斤の行爲を糺問するに在りき。その行爲たるや極めて愼重の調査を要し、之を公開審問すること危險なりしを以て、公子蒙哥幷に鄂爾達をして、惟り之が事實の調査に當らしめたり。この審問は斡赤斤の部下なる多數官吏の處罰によりて一段落を告げたり。

皇后の制稱四年以上繼續せる間、宗族の諸公子は、その配下に領内賦稅擔保の手形を與へ、又種々の人々に公租免除の特許狀を授けたり。貴由は嚴かに之を叱責し、これの授與されたるものを悉く無效としたり。この弊政を行はざりしは、親王妃唆魯忽帖塔尼とその諸子とのみなりしかば、汗は皇室の爾餘諸公子を詰責すると共にその行跡を賞讃したり。之と同時に、窩闊台の詔勅をすべて、確認せしこと恰も窩闊台の成吉思汗の詔勅を確認したりしが如く、且父帝の朝に授與されたるすべての特許狀に署名して、之を允准したり。

察合台はその殂するに方りて領土を孫哈剌旭烈 Cara-Holagou に傳へたり、その父莫圖根 Moatougan は Bamian 包圍攻擊に際して仆れたるなり。新帝は、察合台の子也速蒙哥 Yissou-

Mongco を好み、子を斥けて孫を取るは奇怪なりとて、父の領土を之に授與したり。貴由は宋朝に對する攻戰を繼續し、速不台・察罕の兩將軍を南部支那征討軍の司令官となせり。高麗も亦獨立を主張せんとするより、之に對して軍隊を進行せしめたり。一軍は將軍、野里知吉帶 Iitchi-kadai 指揮の下に波斯に派遣され（一二四七年八月）、〔定宗二年丁未、八月命野里知吉帶、率搠思蠻部兵、征西（元史二）〕この遠征軍を組織する爲、宗室の諸公子に命じて、何れもその軍隊に就き十人毎に二人宛を出さしめたり。野里知吉帶は波斯に駐屯せる蒙古兵の指揮をも掌ることとなり、同國に於ても十人毎に二人宛を徵發することとなれり。グルジア幷に Roum の兩王國、Moussoul, Diarbèkir, Aleppo の三公國も、その獨裁的統轄の下に置かれ、且以上諸國の貢賦を獨り徵收するの權利を與へられたり。皇帝は親ら西征の途に上らんとの決心を發表し、この野里知吉帶の軍隊を以て先鋒に充てんとせるなり。Carpin も亦貴由に西征の計畫ありと云へり（三一卷三六章）。阿兒昆は波斯の總督、馬思忽惕は土耳其斯坦幷にトランスオクシアナの總督たること、故の如く、その官職の符たる、獅頭を飾れる小牌を授けられたり。兩總督の保護を受くる大官はすべて、何れも辭令と官符とを以てその職司を確認せられ、この地方の多數の小君侯も亦勅書を得て何れも依然としてその領土を保つことを得たり。支那領土の新財務長官、奧都剌合蠻は死刑に處せられ、前任者たりし麻合沒的・牙剌控赤之に代り、鎭海は新に丞相に任ぜられたり。

小亞細亞なるセルジューク朝の王國も蒙古の統御を受くることとなり、服從條約の規定に從ひ支丹 Yzz-ud-din Keï-Kavouss は、新宗主の朝廷に弟 Rokn-ud-din Kiliidj-Arsslan を派遣したり。この少年公子は巧に皇帝を動せしかば、皇帝は之に Roum の王冠を與へて、その兄を廢したり。（ヘ、チに據る。）

グルジアの兩青年公子は何れもその名を David と稱し、共に太汗の朝廷に來りて、グルジア國王の位を爭へり。その一人はグルジアの最後の王 George Lascha の庶子にして、一人は同胞 George の位を嗣げる女王 Rhouzoudan の子なり。貴由（クユク）はこの兩競爭者の間にグルジアを配賦し、Khartli を彼に、Imirette を是に與へたりしが、女王ルーズーダンの子は、國王として、ジョオルジュ王の庶子に忠誠を盡さざるを得ざりき。（Saint-Martin アルメニア史要并にチに據る。）キリキアなるアルメニア民族の王 Hethoum 第一世の弟 Sempad も、貴富なる獻上物を携へ、この小國の君の獻芹の微衷を新汗の許に表したり。ハリフハの使節大法官 Fakhr-ud-din は波斯駐在の蒙古將軍より、この法王に對する陳情ありしが爲、威嚇の傳言を以て、歸還を命ぜられたり。而して Ismaïliyen 宗派君侯（これ即ち歐洲に於ては寧ろ Assassins 暗殺宗派として知らるる Bathiniyes 宗派の管長にして、波斯の Deilem 城塞に住へり。上卷一六一—二頁參看。）の使節は、冷遇せられ、提出を命ぜられし訴願に對し、極めて苛酷なる勅答を得て歸途に就けり。一般の政務はかくの如く規定せられて、會議は解散し、諸公子は新に決定せられたる軍事的遠征の準備を爲

さんが爲出發したり。（ヘ、チに據る。）

貴由（クユク）推選の會合に列席したる二人の歐洲人の僧侶はフランシスコ僧派に屬する Jean de Plan Carpin と Benoit となりき。上述せるが如く、一二四五年リヨンに開ける宗教會議は、韃靼人の許に宣教師を派遣し、之に人道を說き之を基督教に改宗せしむ可しと決議したり。法王インノーセント第四世は、書を巴里なるドメニコ宗派修道院長の許に寄せて、同派の僧侶中より、この任務を託し得可き多數の法弟を選擇せんことを求めたり。修道院長の僧侶を集めてこの法王の書簡を朗讀するや、會衆は相競ふて是に當らんことを求め、涕泣してその眞情を表せり。同胞の幸福に向て一身を犧牲に供するの許可を得たるものは喜んで涙を流し、その然らざるものは遺憾の色を面に顯はせり。選擇せられたる四人の僧侶卽ち Anselme de Lombardie, Simon de Saint-Quentin, Albéric 并に Alexandre は往きて、法王の脚下に跪き、法王より韃靼人の首領に寄せたる書狀を受け、波斯に於て初めて遭遇せる韃靼軍の許に至る可しとの命令を受けたり。（Vincent. M. Fontana の Monumenta Dominicana 一六七五年羅馬發行、五二頁。）これらの四人は將軍拜住 Baïdjou の營に赴けり。聖師フランシスコの僧派に屬する他の三人の僧侶卽ち波蘭人 Benoit 葡萄牙人 Laurent 并に Jean de Plan-Carpin は韃靼に派遣せられたり。その兩托鉢僧派は約半世紀前に、特に福音の光明を邪教徒の間に普及するの目的を以て創設せられたるなり。（Odor. Raynaldus 教會年代紀第二册。）

この宣教師の二隊は一二四六年を以て出發したり。フランシスコ僧派の一隊はボヘミア、シレジア、幷に波蘭を通過し、Lenciscに於て蒙古の君公に拜謁を得んとせば、獻上物を納めざるを得ずとの事情を審にせり。而もこの托鉢僧はその糊口を他人に託し、本來無一物なれば、コンラード公、公の夫人、Lenciscの僧正、波蘭の貴族等は一行を助けて、毛皮を與へ、之を以て進物に充てしめたり。宣教師はキエーフに赴き、同地より六日にして、ドニエプル江畔に陣せる蒙古の前哨の許に達したり。かくてこの境上の蒙古兵を指揮せる公子の本營に案内されしが、その携へたる拉丁文の書簡を飜譯し得るもの幕僚のうちになかりしが爲、この將軍は宣教師を拔都(バツ)の朝廷に遣れり。宣教師等は、大齋節(レント)の第一月曜日を以て出發し、毎日四五回宛乘馬を換へて疾驅すること三十九日にして、ヴォルガ江畔の拔都(バツ)の本營に達したり。その宿舍として、大本營を距る約一里の地に帳幕は設けられたり。拔都(バツ)の式部官より、君王の前に出でて跪伏の禮を許さるる時、果して何をか獻上せんとするやと問ひしかば、主君たる法王は使節の果して能くその目的地に達し得可きや否やを知らざるより、獻上物を携帶せしめず、加之、途上極めて危險なる地方を通過せざるを得ざりしも、親ら備辨したるものを獻納せんと答へたり。かくて獻上物を呈し、且その旅行の目的を告げしより、拔都の許に案内せられたり。之に先ちて二箇處に火を焚きてその中間を通過せしめられしが、これその拜謁を許すも、之が爲に起り得べき不祥を祓はんとせるなり。

その火に接して樹てたる二本の槍には、一條の紐を濟し、之に布帛の細片を着けたり。淨めらるべき人馬物品は、この紐の下を通過するに之と同時に、二人の女は左右に分れて、咒文を唱へつつ水を注ぎたり。宣教師は君侯の帳幕の前に於て、三度左膝を屈せざる可からず、且決して入口の閾に觸る可からずと注意されたり。拔都(バツ)は高座の上に着席し、妃妾の一人側に侍せり。王室の一族幷に大官は帳幕の中央に据えたる一脚の長椅子を占め、その背後には下級の人々地上に坐せるが、男子は右に女子は左に集れり。宣教師はその膝を屈して、拔都(バツ)に奏上せざるを得ざりき。次で携帶し來れる書簡を捧呈し、通事をしてこれを飜譯せしめんことを乞へり。宣教師は君侯の帳幕に於ては左側に置かれ、右側には大汗の朝廷より來れる使節着席せり。この帳幕は廣闊にして、精選の麻布を以て成り、匈牙利王より奪へるものなり。うちに一脚の食卓あり、種々の酒を滿せる金銀の杯を載せたり。拔都の之を飲む毎に、樂聲に和せる歌謠は聞えたり。Carpin の旅行記。なほ同書に據るに拔都の馬に騎るや、日傘を翳せしが、他の宗室の公子その配も亦しかせりと云ふ。

法王の書簡は數通あり一二四五年三月の nones (七日) より三日にリヨンにて署せるものにて、韃靼の國王と人民とに寄せたるものなりき。その書簡の一に於ては、神の子の犧牲によりて人類の贖罪のなし遂げられたること、その復活昇天に先ちて、この地上の名代を定め靈魂の保護と天國の鎖鑰とを託し給へること等、基督教の主たる教理を説明せる後、法王は、假令その器にあら

ずとも、この名代の位を襲へるものとして、韃靼人君臣の救濟を計らんことを望むと說き、且親ら各地に赴くことを得ざるが故、權能を、葡萄牙の Laurent 師幷にその法弟に委ね、音物を携へて往きて基督教の教理を傳へしめんとすと云へり。他の書簡は下の如く記されたり『惟り人類のみならず、道理を失ひたる動物も、否、宇宙の元素に至るまでも、上帝が永遠の平和の國に於て行はしめ給へる天意に倣ひて緣族の念を抱きて、相協和合同せるが故に吾曹は卿等が、基督教國その他の國を侵略せりと聞き、卿等が之を恐る可くも荒廢に歸せるを聞き、而して卿等の刼掠に耽るや天然の緣族の關係を悉く打破し、老幼をも女子をも助けずすべての人を悉く殺戮するを聞きて、甚しく驚駭せずんばあらざるなり。吾曹は平和の神に倣ひてすべての人の等しく主を畏懼するに至らんことを欲するが故に、將來決して、基督教徒を攻擊せず、從來の罪惡によりて招きたる神の赫怒を和げんが爲、之に匹敵するの悔悛の實を擧げんことを戒め祈り勸めんとするものなり。蓋し今日までは、上帝も各國民が卿等の攻擊によりて仆るることを不問に附せしも、之を觀て將來益〻大膽にその暴行を續行し得可しと思はば大なる過なり。上帝は時に暫く暴慢なるものを懲治せざることあり。暴慢なるもの親ら反省して、抑損せずんば上帝は現世に於けるその罪惡を罰することを怠らざるのみならず、卽ち他の世界に於て、更に完全なる復讎を加へ賜ふ可し』。この書簡の結尾は、之を捧呈するの任務を帶びたる僧侶を厚遇し、その法王に代りて述ぶる所の言、殊に平和の樹立に關する所の言を信賴せんことを望めり。法王は最後にこの書に於て、極めて率直に、他の民族を滅亡せんとの志を促したる理由幷に將來に對する計畫を知らんことを求めたり。Odor Raynaldus 教會年代記第二册第三二一頁。

これらの書簡は蒙古語露西亞語亞剌比亞語に飜譯されしが、之を捧呈せる後、數日にして、拔都（バッ）は法王の使節に向て、新汗推選擧行の地に赴く可しと告げたり。且隨行の人を多少歸國せしめんことを提言せしかば、宣教師は同意を表し、而して法王へ宛てたる報告の傳達を之に託したり。而もこれらの隨行員は、宣教師の西歸せるまで、露國の國境附近に抑留せられたり。

Jean de Plan Carpin とその同行者とは Carpin は大齋節の當時、高粱と鹽を混じたるものを食ひ、融氷を飲みて、餓を凌ぎし爲身體疲勞し、馬上に在るに絕えず、死地に就くが如く涙を流して出發したりと云へり、（第三一卷第二十三章）。○この宣教師は又 Michel と呼べる露西亞の諸侯拔都（バッ）の許に來り、成吉思汗の畫像の前に跪伏することを担みし爲兵士に蹴られ爲に死したりとのことを記せり。カラムジンの露國史、第四册三十四頁にもこのことを叙し、ミハイルはチエルニゴーフ侯にして、一二四六年拔都の許に赴き、部下貴族の一人 Fedor も殉死し、共に聖師と崇められたりと云へり。○第三一卷第六章には又露國 Sarvogle 公 Andre なるもの、韃靼より馬を盜みたりとの罪狀によりその證據不充分なりしにも拘らず、死刑に處せられたり。故人の弟と夫人とは拔都の朝廷に赴きて、領土を沒收せざらんことを乞ひしに、拔都は韃靼の習慣に從ひ、兩人夫婦となる可しと命じ、之を拒みしも强て同衾せしめたりとあり。○又三一卷第五章には韃靼人は他國の君侯を蔑視し、皇帝の朝廷にありては、露國の太公もグルジア王子も毫も禮遇を受けず。之が護衞の任に當れる韃靼人も亦傲然たりきとあり。○又露國太公ヤロスラーヴは皇太后の許に招かれて饗應になれる後遽に殂せり、而して七日後屍體に黑斑を生じたれば毒殺されしこと疑ふ可からず（第三十六章）。復活節の日を以て、二人の韃靼人を案內として拔都（バッ）の大斡耳朶に達せしは、七月二十二日にして、ドニエプル江附近に於て蒙古の領土に入りしより本營を出發し、案內者は皇帝推選式前に到達せんが爲、急行す可しとの命令を受けたり。而もそ

實に約五箇月の日子を費したり。宣教師の一行は貴由(クユク)の卽位せる後數日、八月の末を以て多數の君侯使節と同時に拜謁を許され、丞相鎭海(チンカイ)は謁見者の姓名を高聲に讀上げたり。謁見者はすべて、四度左膝を屈し、その刀劍を藏せざるや否やを愼重に調べられ、又帳幕に入るに方りて門の閾の上なる木片に觸るる勿れと注意されたり。これ等の人は皇帝に夥しき貢物を捧げしが、その貢物は主に、美麗なる織物、絹絲と金絲とをもて織れる帶、貴重なる毛皮より成り、又、鐵鎖又は皮革を以て覆へる馬幷に騾馬もありき。法王の使節に如何なる獻上物を齎せしやと問ひしかば、使節は最早無一物なりと答へたり。

この第一回の謁見の後、暫くして、皇帝は鎭海(チンカイ)を介して、宣教師に向て文書を以てその使用の目的を述べしめたり。法王の書簡に答ふるに先ち、法王の朝廷に蒙古語、露西亞語若しくは亞剌比亞語を解するものありやと問ひしかば、宣教師は之れ無しと答へたり。數日の後(二月十一日)皇帝の大臣喀達克(元史三の合答か)Cadac 鎭海(チンカイ)幷に巴拉 Bela はあまたの書記を從へ、宣教師を訪ふて、汗の法王に寄せる復書を飜譯し、宣教師は拉丁文にて之を筆記したり。皇帝の官吏は、宣教師の記したる文字を一々說明せしめて、その誤解なきや否やを確めたり。而も御璽を捺したる皇帝の本書を交付するに方り、之に亞剌比亞語の譯文を添へたり。(この回答の內容は明ならざれど。思ふに法王に服從せよと命ぜしならん。キプロス王がアルメニアの監軍より接手して一二四八年の末その首府 Nikosia に於て佛國のルイ第九世に致せる書に、我等の主、法王は合罕に使節を派して基督教徒なりやと問ひ、且何故に世界を蹂躪せんとするやと問ひしに、合罕は、上帝朕が祖先幷に朕をして罪惡ある

民族を全滅せんとし給へりと答へ、且朕が基督教徒なりや否やは上帝これを知り給ふ、法王之を知らんと欲さば、乞ふ來り見よと答へたりとあり、Vincentius の Spec. Hist. 三一卷九十二章)二日の後、宣教師等は皇太后に拜謁せしに、皇太后は、各、表に毛ある狐皮の裘と絹服とを一着づつ給ひたり。かくて十一月帝都を出發せしが、滯在一箇月中宣教師等は營養不足に苦めり、蓋しその四日毎に給與さるる食物は一日を支ふるに足らざりき、幸にして貴由に仕へし露國の金工に Come と云ふありその厚意によりて飢を凌げり。拔都(バツ)の朝廷に到着せしは翌年(一二四七年)五月の末なりき。その拔都(バツ)に法王に對する回答を要求するや、拔都は皇帝の返書に記されたるの外には別に回答す可きことなしと答へ、宣教師等はその行程を繼續して法王の朝廷に赴けり。Vincentii の Speculum Historiale に Jean de Plan Carpin の紀行を收む。このフランシスコ僧派の宣教師とドメニコ僧派の Simon de Saint-Quentin とそは歐洲に蒙古人に關する詳細の記事を傳へたる嚆矢なれ、フランシスコ僧派の Jean de Planocarpino は初めザアクセンにて僧院長たりしが次で獨逸の監督となり、ボヘミア、匈牙利、那威、ダキア、ロートリンゲンに僧派を擴張し、一二二五年使節として西班牙に赴き、韃靼より歸りて、法王インノーセント第四世に歡迎され、滯在三箇月にして Antivari の僧正に任ぜられたり。(Paolo Pansa のインノーセント第四世傳)

Anselme 師の一行は、更に近距離の地にある韃靼軍の許に赴く可しとの命令を受け、一二四七年波斯なる將軍拜住(バイヂユー)の營 Simon 師はこの營はサン、ジヤンダークルを距る凡そ五十九日程の Sitiens 城附近にありきと云へるが、その所在は不明に到着せるが、その携へたる書簡に於て法王は、韃靼人に再び基督教國に於て刼掠を行はざらんこと幷にその從來行ひたる刼掠を悔悟せんことを要めたり。これらのドメニコ僧派の宣教師等は、拜住(バイヂユー)に親しく面會して、その委託されたる使命を果さんことを望みしかば、將軍幕下の將校はその何處より來れるやを問へり。乃ち基督教徒が、爾餘の何人よりも優れたりと認め、父とし主として尊敬せる法王より派遣せられたりと答へたり。この陳述を聽きて激しく怒りたる蒙古の將校は、この外邦人に向

て、汝等は如何にしてしかく無禮にも、敢て汝等を派遣せるものを以て、爾餘の何人の上にも立てりと揚言するやと詰りて曰く、『汝等の主人は汗が神子にして、拜住(バイヂュー)諸延のその代官たるを知らざるか、汗の君臣の名は、何れの地にも知らるる可き筈なり』と。一行の長者たるアンセルム師は之に答へて、法王は汗の何人にして、拜住(バイヂュー)の何人なるやを知らず、曾て汗君臣の名を口にするものを聽きしことなし、その耳にせしは唯、韃靼と稱する民族が東邦の邊疆より出で、幾多の邦國を征服し、無數の人命を奪ひたりと云ふの事實あるのみ、若し夫れ法王にして、汗とその代官との名を知らんか、焉んぞ之を委託せられたる書簡に記さざるの理あらんや、法王は虐殺の頻々として行はれ、殊に基督教徒の殺戮されることを痛嘆し、カルジナル諸師の意見に從ひ、一行に命じて直ちに出發して、その邂逅したる第一の韃靼軍の兵營に至り、その軍の主將幷にその部下一般に向て、法王に代て爾來生民殊に基督教徒を虐殺することを避け、且悔悟して兇暴なる犯罪を贖んことを勸告せんとせるなり、書簡の持參者は、更に之をよく說明せんと云へり。

拜住(バイヂュー)部下の將校と通詞とは、將軍の許に赴きて、アンセルム師の陳述を傳へ、暫くして歸り來りて、宣教師に法王の許より獻上物を携へ來れるや否やを問へり。アンセルム師は答へて、法王は獻上物を送る習慣なきが故に何物をも携へ來らず、之に反して法王は基督教は勿論、邪教徒よりも貢物を受くと云へり。蒙古の將校は復た、主將の帳幕に赴き、軈て歸り來りて、宣教師に告げて曰く『如何にして卿等は空手以て、主君に拜謁せんとするか、何人も之を敢てせしものなし』と。アンセルムは乃ち、獻上物なきが爲將軍に拜謁するの許可を得ずんば、法王の書簡を將校等に託して將軍に傳達を乞はんと答へたり。

將校等は、復た往きて主將の命令を乞ひ、往返する毎にその衣服を變へたり。歸り來りて、宣教師等に向て若し親ら法王の書簡を諸延拜住(バイヂュー)に呈せんとせば、神の子にして地上の主たる皇帝拜謁の際に於けるが如く三度膝を屈して、敬意を表せざる可からずと言明したり。宣教師等は、この儀式は、法王と基督教會とが蒙古皇帝に服從せるの徵候として認めらる可く、亞細亞方面に於ける教會の仇敵をして勝利を博したりとの思を爲さしむ可しと信じて之に同意することを拒み、聲明すらく、將軍は汗の代表者たれば、主君法王に對すると同一の儀式を用ゐて敬意を表す可く、その受けたる提議は、基督教を侮辱するものなれば、之に服從せんよりは寧ろ死を潔とす可しと、而も、その傲慢心より提議を拒絕するにあらざることを示さんとして保證すらく、若し諸延拜住幷に部下の將校にして、基督教徒たらんことを欲せば、敢て踟躕することなくして跪拜の禮を行ふのみならず、上帝の爲にその足部に接吻す可しと。この陳述を聽きて蒙古の將校等は激昂して之に告て曰く『汝等は吾輩に向て基督教徒たれ、汝幷に汝の法王の如く犬となれと勸むるか』と、怒氣紛々として去れり。然るに將校等は復た還り來りて、宣教師等に如何にその主君に敬禮を表

するやを問へり。アンセルム師は、頭巾を後方に稍〻引き、聊か頭を傾けたり。蒙古人は次に如何にして上帝を禮拜するやを問へり。アンセルムは禮拜の方法一二に止まらず或は、拜伏し、或は跪坐し、その他種々の式ありと答へたり。將校等は率直に口を開きて曰く『汝等基督教徒は、木石を崇拜しつつ、焉んぞ神の子たる汗が、朕に對すると等しく之に對して敬意を表す可しと命じ給へる拜住(バイヂュー)諸延に向て敬禮を拒むことを得可き』と。アンセルム師は乃ち之に答へて、基督教徒が崇拜するは、木石によりて現はされたる上帝なり、蒙古の將軍は毫も之と比較し得可くもあらずと。

拜住(バイヂュー)の將校等はその場を去りて再び歸來し、宣教師等に對して、須らく汗の朝廷に赴きて、法王の書簡を捧呈し、その威儀權勢を目擊し、之を主君に報告す可しとの意を傳へたり。アンセルムは之に答へて、法王は曾て人の大汗に就て語るを聞かず、單にその遭遇せる第一の韃靼軍の許に赴く可しと命じたるのみなれば、この訓令の趣旨を貫徹すれば足れり、故に將校等にして、敢て傳達の勞を執らば法王の書簡を之に交附す可く、然らずんば之を携へて歸らんのみと云へり。茲に於てか將校等は曰く『如何に傲慢なればこそ、汝等基督教徒は敢て、法王を以て、その尊嚴に於て爾餘のすべての人類の上に立てりとは云ふぞ。汝等の法王は神の子なる汗が神佑に依りて獲たるよりも多くの王國を領有せりと云ふものあるを曾て耳にせしものありや。法王の名は、彼

の東邦の邊疆より、地中海黑海までの地方に君臨せる汗の名の如く、全世界に傳はり、その恐怖尊敬を受くと云ふものあるを曾て聞けるものありや。果して然らば汗は名譽に於て權勢に於て、汝等の法王幷に爾他のすべての人類に優れり』と。アンセルム師は之に答へて曰く『吾等の主なる法王は爾餘のすべての人類の上に在りと云ふは、上帝がペテロ聖師とその繼嗣に、世界の滅亡に至るまで、宇内教會の權威を與へたるが爲なり』と。かくて師はこの信條の說明を始めしが、忽ちにして拜住(バイヂュー)部下の將校等の叱咤罵詈により中止せしめられ同時に議論の他の點に答辯することをも妨害せられたり。

將校等は突如として立ちしが再び來り、拜住(バイヂュー)に代て宣教師等に告げて、その委託せられたる書簡を交附せんことを求めたり。アンセルムは之が傳達を委託したり。將校等はこの信書を携へて一旦その場を去りしも、暫くして歸來し、宣教師等に向て之を波斯語に飜譯せんことを乞へり。四人の宣教師は、拜住(バイヂュー)の部下なる譯官幷に史生と共に、一の帳幕に退き、すべて法王の書簡を波斯語に飜譯することに從事し、次で波斯語より蒙古語に飜譯し、之を拜住(バイヂュー)の閲覽に供したり。

この將軍の將校等は、大汗の一大臣を伴ひて再び來りしが、この一大臣は重臣にして、今將に朝廷に歸らんとするの際なりしかば、宣教師等に對して、一行のうち二人はこの大官の案内にて、皇帝の大本營に赴き、親ら主君の書簡を皇帝に捧呈し、その復書を得、且その光榮權勢を目擊せ

んことを勸めたり。アンセルムは既に論述したる理由を以て之を拒絶したり。

かくの如く、この第一日の交渉は極めて不成績にして困難を極めしが、宣教師はこの夕空腹を忍びて、拜住(バイヂュー)の本營を距る一哩の地なる帳幕に還れり。四日の末に到り、再び將軍の本營に赴き、復書と共に出發の許可を得んことを求めしがその效なかりき。茲に於てか反覆往返し、約九週間に亙り、殆んど毎日本營を訪ひ、六七月の炎暑に際し、數時間絶えず、赫灼たる日光に暴されしが、その要求は顧られず拜住(バイヂュー)の部下は、之に近づき之と語を交うることをも厭へり。シモン師は曰く『これらの韃靼人は宣教師を目して、賤劣の輩囘答を與ふるに價せず、恰も犬の如しと爲したり。拜住(バイヂュー)は宣教師等が無遠慮にその意見を發表せるを憤り、深く之を憎めり、その激昂の極、之を殺戮せんとし、三度之を命令したり』と。拜住は、蒙古部、亦速特氏 Yissoute の出身にして、哲別の近親なり、初め出兒馬昆の部下として千人に將として波斯に赴きしが、拔擢せられて Touman 卽ち一萬人の長となりたり。ルームのセルジューク朝の王國を征服したるは拜住なり。チの蒙古部亦速特氏の條參看。

七月二十五日に至り漸くにして、宣教師等は法王に寄せたる拜住(バイヂュー)の復書を得て、西歸を許されたり。復書に曰く『神聖なる汗の命により、拜住(バイヂュー)諾延は卿に答ふること下の如し、法王よ、卿の使節は來りて卿の書簡を齎せり、卿の使節は尊大の語を爲せり、吾曹は卿が果してかかる陳述をなせと命令したりや、將た又使節が恣にかかる傲慢の語をなせるやを知らず。卿の書簡には又、特に貴下等は多數の人を殺したりと記せるが、而も神の命令、全地上の主たるものの吾曹に下せる命令には、吾曹に從ふものは何人たりとも依然としてその地その水その家產を所有し、全地上の主にその兵力を交付す可きも、吾曹に抵抗するものは全滅さる可しとあり。吾曹はこの命令を卿に傳ふるが、之に依れば、卿若し卿の地と卿の水と卿の家產を保たんと欲せば法王よ卿親ら吾曹の許に來り、次で全地上の主たるものの前に出頭せざるべからず。而して卿若し神の命令にも將た地上を支配するものの命令にも從はずんば、吾曹はその結果如何を知らず、之を知るは惟上帝あるのみ。吾曹に使節を致して、卿の果して之を欲するや否、卿の吾曹の友たりや將た敵たりやを吾曹に報じ、吾曹が、Aybeg 幷に Sargis を經て發送せるこの命令に速に囘答を爲せ。七月二十日 Sitiens 州に於て認む』と。

外國人に對する處分の方法に關して、拜住(バイヂュー)に與へたる一般的訓令の謄本は、この書簡に添えられたり。この訓令は、神の子にして而して上帝の宇宙の主たるが如く地上の主たる成吉思汗の名を以て、神の子の命令に服從するものは助けらる可きも、之に抵抗するものは滅さる可しとのことを各地に布告せんことを命じたるものなり、Vincent の Speculum Historiale 三一卷四十章乃至五十二章に收めたる Simon de Saint-Quentin 師の記事に據る。拜住諾延の名は Bayothroy と記されたり。アンセルム師は Anselin とも Ascelin とも稱せるが一行と共に波斯に滯在すること一年に近く、出發後三年七箇月にして、法王の朝に歸るを得たり。四人の宣教師は拜住の營に赴くに方りドメニコ僧派に屬する他の二人の宣教師と邂逅したり、その一人 Andre de Longjumel は基督教を傳へんが爲既に東邦に來りし人にして、Guichard de Crémone にはチフリスにて遭へり。

皇太后脫列哥那(ツラキナ)は、實子の卽位後二箇月にして殂せり。茲に於てか、法特瑪(フアトマ)に對するあまたの

仇敵は陰謀を廻らしてこの嬖人を失はんとせり。撒馬爾罕の回教徒に希雷 Schire と呼べるあり、法特瑪の巫術によりて、皇帝の弟公子闊端を病に罹らしめたりとて、之を告訴したり。闊端も亦その病に罹りたる時、一將校を貴由の許に遣し、所謂巫女を非難し、その處刑を要求せり。而も闊端の卒せしが爲、鎭海は乃ち汗に皇弟の請求を執奏し、法特瑪を糺問す可しとの命令は下されたり。或は棍棒を以て打ち、或は拷問してその罪狀を自白せしめたる後、面部その他全身の所謂九竅を縫ひ、氈に包みて之を河中に投じたり。この婦人の友人も亦極刑に處せられたり。暫くして、希雷も亦貴由の子、勿察 Khodja. Ogoul に妖術を施したりと告訴され、妻子と共に死刑に處せられたり。

貴由は一二四八年の春を以て出發し、葉密爾 Imil 河畔の采邑に歸らんとせり、これその氣候の健康に適するがためなりき。途上到る所住民に遭ふや、之に貨幣絹布を配賦せしめたり。然るに親王妃、唆魯忽帖塔尼は貴由が拔都の來て忠誠を表せざるより、之に對して敵意を抱て前進せるを疑ひ、陰に拔都に告げて警戒を嚴にせしめたり。然るに貴由は畏兀兒國 Ouïgourie の首府、別失八里 Bisch-Balic を距る七日程の地に崩ぜり（一二四八年四月）、時に四十三歲なりき。〔定宗二年丁未秋西巡、三年戊申春三月、帝崩於横相乙兒之地、在位三年、壽四十有三、葬起輦谷（元史二）〕

貴由は莊重にして嚴格なりき。その卽位したりとの報のみにて能く攝政皇后の優柔なる施設中、

帝權を蠶食せるものをして、再び本分を守らしむることを得たり。而も貴由は激しく、僂麻質斯に犯され、過度の飲酒と、淫慾とはその健康を損ねたり。その常に疾病に苦しみしが爲、親ら政治を視る能はず、乃ちそが裁決を大臣なる喀達克と鎭海とに任せたり、而して兩大臣共に基督教徒なりき。貴由の師傅たりし、喀達克は、貴由をしてその信奉せる宗教を贔屓するに至らしめたり。かくて基督教徒が特にその朝廷に於て保護を受けしより小亞細亞、シリア、バグダード、Ases の國幷に露西亞より多數の僧侶は來會して、至大の勢力を宮中に博し、侍醫も亦基督教徒たりき。（チ、ヘ幷に Brun譯 Aboul-faradji 一七八九年出版第二册五二五頁參看。）Carpin もその帳幕の前に、基督教の禮拜堂ありて、毎日祈禱式の擧行さるるを認め、貴由は基督教の僧侶に報酬を給與せり、これその改宗の希望を有せることを信ぜしむるものなりと云へり。（Carpin の韃靼旅行記第十一章に據る。この宣教師は貴由の帝位に選ばるるや、年四十又は四十五にして、身長中庸、極めて聰明にして態度は莊重なりきと云へり。）史家、ラシッドも亦貴由在世中、回教徒の蔑視されたる事を慨嘆せり。

貴由の印璽には、上天の神、地上の貴由汗神威に依れる全人類の皇帝と署せり。（Carpin の旅行記三十四章に據る。）

（一三五〇年頃支那に旅行せる英人 Jean de Mandeville は蒙古帝の御璽には『天を治むる神、地上の合罕、地上の主の璽』と署し、その宸翰には『神の子にして、全地上の高貴なる所有者、他人の主君たるものの主君たる合罕』と記しありと云へり。Bergeron の集に收めたる Voyages de Mandeville 二十一頁參看。）

貴由の殂ける後二年にして、當時監國のことを行へるその皇后の朝廷にルイ聖王の使節來着したり。ルイ聖王は、一二四八年埃及に赴かんとして、偶〻キプロス島の首府 Nikosie に在りし

時、基督降誕節を以て、波斯蒙古軍の司令官、野里知吉帶（イルチカダイ）當時の記錄には Erchalchaï 又は Ercalay と書せり。より派遣し來れりと稱せる兩人の使節 David 幷に Marc に謁見を許したり。使節は將軍に代りて波斯文にて記せる書簡を捧呈せしかば、前年拜住（バイチュー）の營に於てダヴィデと相知りしドメニコ僧派の André de Lonjumel 師をして之を拉丁語に飜譯せしめたり。この書簡は冒頭に於ては、ルイ王の治世の永久に繁榮せんことを祈り、且回教徒に對して基督教徒の軍隊の成功せんことを祈り、次で蒙古の將軍は、基督教徒を奴隷の境遇より救ひ、貢賦その他すべての負擔を免除し、之を尊敬し、優遇し、何人をもその財產に一指をだも染めざらしめ、破壞せられたる教會の再築を怠らざらしめ、黃銅盤（東邦の基督教徒の鐘に代へて用ゐるもの）を鳴らすの自由を享有せしめ、何人も能くその大汗の治世の爲に靜かに祈禱するを妨げざらしめよとの命令を帶びて、波斯に來りたりと述べ、佛國王を我子よと呼びて、この書簡の傳達を託されたる兩使節 Sab-ed-din David 幷に Marc の代て述ぶる所を信賴せんことを求め、地上の王は眼中十字架を崇むるものは、悉く之を同一視せるが故に、敢て拉丁、希臘、アルメニア、ネストリウス、ヤコブ各派の間に何等の區別をも立てざることを知らしめ、かくて堂々たる國王の各派の間に區別を立てず、その博愛をすべての基督教徒の上に及ぼさんことを祈れり。（王命によりて、ものせるこの書簡の拉丁譯は Vincent の Spec. Hist. 三一卷九十一章に出づ、『ルイ聖王年代記』に收めたる Guillaume de Nangis の佛譯には誤謬あり。）

この書簡は何れの點より見ても僞書たるの痕跡歷々たるに、ルイ第九世は何等の疑をも挾さま

ず、謄本を作りてその一を王妃 Blanche の許に寄せ、その一は之を法王インノーセントの大使なるカルヂナル Eude de Château-Raoul に託してその主君に致さしめたり。基督教徒は餘りに自負して、韃靼人を以て將に基督教を信奉せんとするものなり、回教徒に反對して援助を與へんとするものなりと信ぜんと欲したるを以て、輕々しくその意見を助くるの事情を悉く信用せざるを得ざりき。成吉思汗の波斯を征服して、住民を虐殺して遺さざるや、東邦の基督教徒は、韃靼人の君侯を以て基督の宗教を奉ずるものなりと信じ、少くもこの信仰を傳播したり。その傳播したりし小說に從へば、この征服者は Jean の子なる Israël の子にて David と稱せりと云ふ。（卷末附錄第三參照）基督教徒は、Mahomet の宗教を全滅するものを目して、好んで保護者なり若くば援助者なりと爲し、回教の仇敵なりと信じたる蒙古人の向ふ所敵なきを見るや、數世紀以來、抑制屈辱を受け來りしも、今やこの窮地を脫却するの希望を抱き得可しと爲し、法王の派遣したる宣教師の報告は、その幻想を滅却せしめしにも拘らず、十字軍の戰士は空想を抱きてその勇氣を維持したり。かくてルイ第九世は、所謂、野里知吉帶（イルチカダイ）の使節を禮遇したり。國王は大臣法王の派遣せる大使幷にその他の高僧の列坐せる席に於て使節を引見し、種々下問する所ありしが、その答辯の態度は自ら無學なることを暴露せり。使節は、國王に向て、大汗の多數の公子幷に蒙古將軍と共に洗禮を受けたること、野里知吉帶（イルチカダイ）も同じく洗禮を受けたること、その君侯によりて派遣せられた

るは、基督教徒を援けて、靈地を克復し、エルサレムを克復せんが爲にして、佛蘭西國王の交情を望むこと深く、その近くキプロス島に來着す可きことを知れることを說き、最後に明春バグダードを攻擊するの計畫なれば、國王に埃及を攻擊せんことを乞ひ、以て之をしてハリフハを應援し難からしめんことを望めり。ルイはすべてこの報道を喜んで迎へ、大臣を集めて大汗の許に使節を派遣するに決し、且この使節は先づ、野里知吉帶（イルチカダイ）の營に赴く可しと定めたり。David は諷して、蒙古皇帝への最も貴重なる進物は、帳幕の形を爲せる禮拜堂なりとの意を示せしかば、國王はこの種の禮拜堂を製作せしめ、之が材料たる深紅色の織物は美麗なる刺繡を以て飾られ、神告、生誕、洗禮、苦難、昇天、聖靈降臨等耶蘇基督一代記に關する主要なる事蹟を現はせり。その他、聖餐杯、經典、裝飾物を始として、すべて聖餐禮を擧行するに方りて必要なるすべての物品を之に添えたり。國王は又、蒙古の皇帝と、將軍野里知吉帶（イルチカダイ）とに十字架の用材を遣さんとせり。その君臣に寄せたる書狀に於ては、慈悲を垂れて、神聖なる名を知らしめ且熱誠を固執せしめたるものに對して、忠順なる敬意を表するの義務を盡さんことを求めたり。法王の大使は又、大汗、母后幷に波斯總督に書を寄せて、神聖なる羅馬教會は、その基督教に改宗せるを聽きて喜悅に堪えざれば、之を愛兒のうちに加へ、之に向て、毅然として正教の信仰を維持し、羅馬教會を以てすべての教會の慈母なりと認め、その管長を以て耶蘇基督の代官にして基督教を信奉するもの、

すべて服從を要するところなりと認めんことを望むものなりと告げたり。この使節の任に當れるは三人のドメニコ僧派の僧侶にして、André de Longjumel, Jean 幷に Guillaume これなりき。アンドレ・ド・ロンジュメルは佛人にして、Joinville の言に從へばサラセン語 Sarrazinois を解し、曩にアンセルム師と共に拜住（バイヂュー）の營に滯在せる僧なり。一行は一二四九年二月十日ニコシアを出發し、David, Marc の兩僧も之に伴ひ、外に、二人の史生と二人の國王附武官とを隨行せしめたり。Olonis, episcopi tusculani Epistola ad Innocent. IV, an. 1249. apud Luc. d'Achery, Spicilegium 巴里、一七二三年第三册六二六頁 Iehan de Joinville のルイ聖王史巴里一七六一年二九頁、ギーヨーム・ド・ナンジのルイ聖王年代紀二〇四頁 Vincentius の Spec. Hist. 三一卷九十章以下參看。

二人の說教僧は途をトランスオクシアナに取りて韃靼に赴きしが、その到着に先ちて貴由（クユク）は殂せしかば、攝政皇后に書狀と携へ來りし獻上物とを捧呈して、朝廷に於て歎待せられたり。而もこの遣使の結果は毫もルイ第九世の希望に副はざりき、Amelricus Augerius de Biteris の Actus Pontificum Romanorum 參看 使節は一二五一年を以て王の許に歸着せしが、時に王はパレスチナなる Césarée 築城の工を督しつつありき。蒙古の朝廷はこの使節とその齎らせる獻上物とを認めて、佛蘭西國王より臣服し來りし證據なりとし、ドメニコ僧派の兩僧に伴はしめたる使節の携へたる復書は、例の如く、服從して貢賦を納め、親ら來りて蒙古帝國の元首に忠誠を盡す可しと命令せるに過ぎざりき。故に佛蘭西王は使節を派遣せることを痛く悔いたりとジョアンヴィルは云へり。Joinville の一〇三頁參看

第五章（憲宗紀）

貴由の崩ずるや、例の如く警戒して、帝位缺けたりとの事實の蒙古の有力なる首領輩に通報さるるに先ち、一般に傳播することなからしめんとし、交通を遮斷し、行旅を抑留し、急使は親王妃、唆魯忽帖塔尼と公子拔都との許に派遣され、この事實を知照せり。

是より先、拔都は漸くにして、ヴォルガ江畔を發して貴由の許に來りて忠誠を表さんとし、Cayalic を距る七日程なる阿勒塔克 Alactac 山に到着せしに、恰も貴由の訃報に接せしかば、乘馬休養を要すと唱えて同地に淹留したり。監國のことは、蒙古部の慣例に從ひて、之を先帝の皇后中にありて格式第一に位せる斡兀立海迷失 Ogoul-Gaïmisch に託したり。皇后は衞拉特部長忽都哈別乞 bey Coutouca の女なりき。之と同時に拔都は、總會議を阿勒塔克に召集したり。窩闊台統の諸公子は、之に參會するを拒み、皇帝選任の總會議は、蒙古人の故土に於て之を開會す可しと論じたり。而も、和林の總管、帖木兒 Témour 諸延を代表者と爲して之に參會せしめ、拔都并に多數公子の決議せることに署名す可しと命じたり。この庫哩勒台は主として尤赤并に拖雷の後裔と札剌亦兒部の出身なる將軍伊兒吉台等より組織せられしが、先づ第一に窩闊台の卽位

に際しその子孫の肉塊一片だも存する限り、成吉思汗家の他の一族を推選せざる可しと擧て誓約せしことを回想したり。公子忽必烈は、之に答へて曰く『實に然り、然りと雖も、卿等は既に律法を破り、且窩闊台の意思に背きたるにあらずや、第一に卿等は、成吉思汗の律法を無視し、裁判を行はずして阿兒塔隆 Altaloun（これ成吉思汗の愛女にして札費兒色辰 Djaver-Satchan の妻也）を死刑に處せり。蓋し律法の規定に從へば、宗族親王會議に於て裁判さるるにあらずんは、宗族を罰すること能はざるなり。第二に卿等は失烈門を以て繼嗣と定めたる窩闊台の意志に反して、公子貴由を帝位に卽かしめたり』と。

窩闊台の子孫より帝位を奪ひ去らんとの決心を有するものは、この兩點を擧げて、その擧措の不當ならざることを辯解せんとせり。窩闊台の一族を敵視せる拔都は、唆魯忽帖塔尼と妥協して、殊に軍隊の間に有力なる黨與を有せるこの親王妃の長子、蒙哥を推選せんとせり。

成吉思汗の遺命によりて軍隊の大部分を親王拖雷に與へたるが爲、拖雷家は爾他親王の子孫に對して、著しく有利の地位に立てり。皇帝位に在るに方りては、軍隊はすべて最高元首の命令に服從せるも、一度その空位となるや、その直接隷屬せる親王を長官として承認するのみ。（チに據るに、皇帝は宗族親王の所部を左右するの權を有せず、拖雷の卒後、窩闊台帝は、皇子闊端に與ふるに拖雷の部下たりし、蘇尼特部千人速兒都思氏二千人を以てせしに、その將校等は拖雷の妃を訪ふて陳情し、皇帝に上奏せんとしたり。王妃、唆魯忽帖塔尼は陳情を以て理ありと爲せしが、三千人は公子等の遺產中の一小部分に過ぎざれば、以て皇帝を煩はすに足らず、加之、吾等自身も合挙に屬し合挙はすべての人の君主なれと答へたり。將校等は茲に於て沈默を守りしが、窩闊台は、王妃のこの陳情を抑止したるを德としたりとあり。）拖雷の卒後、その軍隊は、四子蒙哥、忽必烈、阿里不哥并に莫哥 Moga に分配されし

が、諸公子幼冲なりし間、王妃、唆魯忽帖塔尼は非凡なる愼慮を以て多數の部族を統御し、將校等より敬重せられ、拔都その他の公子より禮遇せられたり。故に拖雷の公子を擧げて帝位に卽かしむるは、窩闊台統の公子を擧ぐるよりも遙に容易なりき、蓋し窩闊台統にありては、失烈門の外に貴由の子、忽察斡兀立 Khodja-Ogoul も亦帝位を窺窬せしが、共に年少にして未だ衆望を繫ぐに足らざりき。（ヘ、チに據る。）

將軍忙可撒兒 Mangoussar は總會議に於て率先して親王蒙哥を帝位に卽かしむ可しと提議し蒙哥の父拖雷に從ひて支那に轉戰し、又親王拔都の指揮の下に西邦に奮鬪したりし偉績を述べてその精神と勇氣とを讚えたり。（ロに據る。）而も諸公子は先づ成吉思汗一族の長者たる拔都に帝位を捧げたり。その之を辭退するや、乃ち何人を推選す可きか之を指名せんことを拔都に求め、且その意見に從はんとの誓詞を認めたり。玆に於てか拔都はその希望を容れ、翌日の會議に於て、かかる大帝國を統御せんとするものは成吉思汗の札撒 Yassa に精通せる有爲の親王たらざる可からずとして、親王蒙哥を指命したり。蒙哥はこの榮譽の任に當ることを拒み、會議の懇願に抵抗すること數日に及べり。最後に蒙哥の弟末哥斡兀立 Mogaï-Ogoul は起立して述べて曰く『吾曹はすべて拔都親王の裁決に從はんことを約したり、若し蒙哥にして食言せんか他の諸公子も將來之に倣ふてその約を守るものなからん』と。拔都はこの陳述を稱揚し、推選せられたる蒙哥は遂

に抵抗を撤回するに至れり。かくて蒙哥の承諾せるより、庫哩勒台の來會者は悉く恆例に從ひて、合罕に敬意を表し、拔都は之に盞を捧げたり。

總會議は又明春を以て斡難、克魯倫の本土にして Rubruquis 第三九章には Onan, Kerule は Moal の朝廷ここに在りと見ゆ。Rubruquis の吉思汗の舊龍庭 Yourt 卽ち領土に第二回の庫哩勒台を召集して、諸公子幷に軍隊の諸將軍をして悉く、蒙哥を承認せしむ可く、且その間皇后斡兀立海迷失をして依然として監國のことを行はしむ可しと決したり。皇后は二皇子、忽察斡兀立幷に腦忽 Nagou と政權を行使せしが、この三監國の爲す所は各所領に對して約束手形を發行し、豫め國庫の歲入を處分するに過ぎざりき。斡兀立海迷失は妖術に耽りて、術師 Cames と共に密室に退きて光陰を消し、蒙古帝國は將に無政府の狀態に陷らんとせり。

然るに忽察と腦忽とは、代て蒙哥の推選に同意したる代表者の行動を否認し、拔都に書を遣して、成吉思汗の鄉國を離れて開會され、且不完全なりし總會議には服從すること能はずと云へり。拔都はその新なる庫哩勒台に參會せんことを求め、且來會したる諸公子は、かかる厖然たる大帝國に君臨するに足る可き最も適當なる人物を推選せるにて、その決議は撤回す可からずと言明したり。蒙哥の黨與は不平家を說きて之を承認せしめんとし、競爭者はその推選に對して抗議を試み、彼此の間使節の來往頻繁なりしも何等の效果をも見ずして、その年は暮れしかば、拔都は兩

弟、伯勒克 Barcai 幷に脫哈帖木兒をして、多數の軍隊を引率して、蒙哥に隨行して克魯倫河畔に至り、王妃、唆魯忽帖塔尼の召集したる總會議に於て、之を成吉思汗の帝位に卽かしめんとせり。然るに窩闊台の子孫幷に察合台の實子にしてその嗣君たる也速蒙哥 Yissou Mœngga は參會するを拒み、蒙哥の選擧は不法にして帝位は當然窩闊台統に屬せざる可からずと主張したり。拔都と唆魯忽帖塔尼との派遣したる使節は、反覆之に向て、その反對によりて帝國を四分五裂の厄に陷らしめざらんことを乞へり。拔都は之に書を與へて、孫提は決して成吉思汗の庖大なる遺領を支配すること能はずと云へり。而も諸公子は斷然拒絕して止まざりしかば、伯勒克は猶豫すること一年の後、拔都の命を求めしに、拔都は最早遲滯せずして蒙哥を卽位せしむ可しと令し、國家の紛擾を釀するものはその首を以て之を償ふ可しと聲明したり。

朮赤、拖雷兩家の諸公子幷に成吉思汗の諸姪（土耳其人の慣例に從ひ、中亞に定住せる成吉思汗家の諸公子は、右翼親王、左翼親王と稱したり。例へば成吉思汗の三弟、朮赤哈薩兒、哈準、斡赤斤諸延はその領土、韃靼の東境に位せるより左翼に屬せり。韃は指定の地元史には闊帖兀阿蘭 Couitun-Ola 語解には奎騰冷也、勃拉山也とあり）と見ゆ。に集まり、窩闊台、察合台兩家の領袖を說きて、來て會議に與らしめんとし、最後の勸說を試みたり。卽ち一人の將校は斡兀立海迷失とその兩子との許に、他の將校は也速蒙哥の許に派遣され、諸公子は既に來會したるを以て、今や唯貴下等の到着を俟て會議を開始せんとすと告げしめたり。失烈門、忽察、腦忽は最早抵抗その效なきを認めて、來會せんことを約し、その到着の時日を定めたり。而もその

時期に至るもなほ諸公子は來會せざりしを以て、命を占星家に下して、卽位式の日と時とを指定せしめたり。

蒙哥は時に年四十三（元史に據るに一二〇八年一月の初を以て生れたり。窩闊台はその幼なるや恒例に從ひて帝位に卽けり（一二五一年七月一日）。而して諸公子がその帶を肩にして九回膝を屈して敬禮を表するや、皇帝の帳幕を圍んで行列せる一萬の將士も亦同時に之に倣へり。蒙哥は命を下してこの日は人民皆その職業を廢し、宿怨を忘れ、全く歡樂に耽る可しと告げ、且爾餘の生物無生物をもその饗宴に與らしめんとし、馬に騎し、馱獸に載せ、獸類を殺してその肉を食ひ、狩獵し、漁獲し、地を掘し、水を亂し、又は濁らすことをも禁じたり。

翌日蒙哥は華美なる毛氈を敷きたる帳幕に於て、盛宴を張れり。玉座の右には宗族の諸公子左には諸公主着席し、同胞七人は、蒙哥の前に起立し、將軍幷に諸延は、忙哥撒兒を始として整列し、文官、史生、地方官、侍從等は、孛魯合（孛爾該）Boulgai Aca を筆頭として式部官の指定したる席に着き、帳幕の外には、將校士卒武裝して着座したり。この饗宴は一週間に亙りて行はれ、來會者は日每に着色を異にせる服裝を纏ひたり。その日々消費せる所、牛馬三百頭、羊五千頭、葡萄酒幷に馬乳酒二千車に達せり。

この宴樂の半ばに方り、皇帝の帳幕の門戶に現はれて、皇帝を始として來會せる諸公子に對す

る陰謀を發見したりと奏上せるものありき。その語る所に據れば、騾馬の失踪せるものを搜索せんとして、偶然一隊の兵士のあまたの荷車を護衛せるに邂逅し、當初之を以て、庫哩勒台の爲に食料品を供給せんとするものなりと思へり。かくて青年の傍を過ぎしに、その青年は、之を以て同僚なりと認め、助力してその荷車を修繕せんことを求めたり。騾馬の持主はその名を克薛傑Kischk と呼べるが、荷車に兵器を滿載せるを見てその目的地の何處なるやをこの青年に問へり。青年は之に答へて、他の荷車も亦之に等しと云へり。茲に於てか騾夫は大に驚き巧みに他の人々に問ふて、失烈門、腦忽幷に忽察 Coutoucou 等の公子が、斷然世人の擧て歡樂に耽る時機を利用し蒙哥幷にその黨與を擊破せんと決して、軍隊を率ゐて、庫哩勒台に來會せんとするを知れり。騾夫は、この事實を一刻も早く皇帝に奏上せんとして、行軍三日程の地を一日に疾驅し來れり。この陳述は痛く總會議に參集せる人々を驚かしたり。而も頗る信じ難きものありしより、反覆奏上せしめしに、克薛傑の態度如何にも誠實なるを示せしかば、すべて疑惑は氷釋せられたり。各公子は何れも親ら往て事實を糺問せんとせり。かくて武將中の首席を占むる忙哥撒兒に二三千人の士卒を授けて、往きて總會議の地を距ること行軍二日程に過ぎざる諸公子の許に赴かしむることに決したり。忙哥撒兒は拂曉その舍營地に着し、之を圍ましめて百騎を從へてその帳幕に近づき、叫ぶらく、卿等の惡意を抱きて來れることを皇帝に上奏せるものあり。この上奏にして無實

ならば、直ちに皇帝の斡耳朶に赴きて辯解する所ある可し、然らずんば、命に從ひて敢て親ら案內の任に當らんと。この言を聞くや、公子等はその帳幕を出で、初めて士卒の既に之を圍めるを知れり、乃ち蒙哥に忠誠を表せんとして來れるが故、更に繼續して前進せんと欲するものなりと云ひしも、忙哥撒兒の嚮導を受け、その部下の士卒も二十人以上は之を隨行せしむるを得ざりき。斡耳朶に着するや、皇帝に貢物を捧げしが、この貢物は九種の珍奇より成り、且つ何れも九個宛を數へたり。當初二日間は三公子も饗宴に與り、毫もその陰謀に關して訊問されざりしも、第三日に至り將に皇帝の帳幕に入らんとするや、その所領に士卒を送還す可しと命ぜられ、且三公子とも拘引せられたり。〇ヘ、チに據る、Rubruquis 第三章にも亦同一の記事あり。

翌日蒙哥は床几に坐して、親ら訊問したり。先づ三公子に對する告發の極めて信ず可からざるものあるを述べ、而もその虛僞たることを確めて、以て些細の嫌疑をも一掃し盡し、告發者に對して嚴罰を課し來者を戒めざる可からずと云へり。三公子は斷乎として告發の趣旨を否定したり。蒙哥は次に失烈門の師傅を糺問したり。杖を以て拷問を加へて能く之をして陰謀を白狀せしめしも、而もその爾他の將校と共に陰謀を企てしことは三公子の全く關知せざる所なりと聲明し、劒を拔きて自刎したり。

茲に於てか將軍等を擧げて裁判官となし、忙哥撒兒を裁判長となし、三公子部下の將校に對し

て審問を行はしめたり。審問の結果陰謀は白狀せられたり。蒙哥(モンゲ)は之を特赦せんと欲せしも、一族將軍等は、宿仇を打破するの機會を逸するは不可なりと說けり。玆に於てか蒙哥(モンゲ)はその忠告を容れて、激しく有罪の將校を鐵鎖に繫ぎしも、軈て之を中止せしめ、優柔不斷決する能はず、一日左右に侍せる大官に命じて、陰謀に與れるものを如何に處分す可きやに就て各〻その所見を述べしめたり。大官等は悉く意見を陳述せしも何人も傾聽するに足るの言を爲さざりしより、蒙哥(モンゲ)は、麻合沒的(マームード)・牙剌挖赤(エルウアヂエ)の謙遜して帳幕の一端に在るを見て、長老の何故に一言をも發せざるやを詰れり。かくて之を麾きて、進み近かしめしに、牙剌挖赤(エルウアヂエ)は、君主の命なりとあらば、乞ふ目下の事件と極めて類似せる史上の一例を援かんと語りて曰く『今は昔、波斯を征服し了れるアレクサンドルの將に印度に進まんとするや、將校の多數はその命令を拒み、何れも親ら自立せんとせりアレクサンドルは之に對して如何に處分す可きやを決する能はずアリストテレスに諮りたり。この非凡の大臣は、使節を庭園に案內し、共に逍遙しつつ命を下して根蔕深き大木を拔かしめ、その跡にか弱き若木を植ゑしめたり。使節は何等の回答をも得ずして歸りしが、アレクサンドルは使節の目擊せることに就きて報告を得て、アリストテレスの眞意を覺り、將校の野心を罰するに死刑を以てし、その子を以て之に代えたり』と。

蒙哥(モンゲ)はこの實例に就て悟る所あり、拘引せる將校等を死刑に處するに決し、その數七十に上れ

り。刑せられたるものの中に、波斯に於て司令長官の任に當れる野里知吉帶(イルチカダイ)の二子あり、石を以てその口を塡充して之を殺せり。父野里知吉帶(イルチカダイ)は、ホーラサンなる八脫吉斯 Badghiss に於て拘引せられ、拔都(バツ)の許に致されてその殺す所と爲れり。

蒙哥(モンゲ)は卽位の後、主たる大臣幷に厖然たる帝國の各地に於ける代官總督を任命したり。諾延、忙哥撒兒(マングサル)は斷事官に任ぜられ、ネストリウス派の基督敎徒、孛魯合 Bolgai は記錄局長たると共に財務內務の長官を兼ねたり。記錄局は之を數課に分ち、波斯人、畏兀兒人、支那人、西藏人、唐古人等の書記官之を分掌し、これらの國家地方との通信に當れり。晃兀兒 Councour は和林の知事に任命せられて宮城寶庫の監督をことし、阿藍達兒 Aldar は之が副知事となれり。

皇帝は、弟忽必烈(クビライ)を大砂漠南方領土の總督に任命し、察罕 Tchagan は東南に方りて蒙古帝國と宋帝國とを分界せる淮水境上蒙古支那兵の司令長官となり、帶荅兒 Dandar は四川に駐屯せる軍隊、和里觧 Khortaï は西藏に駐屯せる軍隊の長官となれり。佛敎の僧侶海雲(ハイユン)は支那に於ける釋敎のことを掌り、道士、李志常 (Taoca-li-tcheng) は道敎のことを掌ることとなれり。但し、蒙哥(モンゲ)が全帝國の佛敎の長官となせしは西藏の喇嘛、那摩 Namo にして、皇帝は之に國師 Ho-schi の稱號を與へたり。

麻合沒特・牙剌挖赤（マームード・エルヴァヂエ土耳其語使節之義）は支那に於ける蒙古領の總督に、その子馬思忽惕（マスウド）はイルチシュ河とアム河の間に位せる地方の總督に任命せられたり。波斯の政治は之を阿兒昆（アルゲン）に委ね、その統轄權はアザールバイジャン省、ヂアルベキル省、モスール、アレッポ幷にグルジア、ルーム、小アルメニアの三王國に及べり。阿兒昆（アルゲン）に隨行して來れる君侯幷に文武官吏はすべてこの總督の代て乞へる恩典に浴せり。

阿兒昆（アルゲン）は宗族諸公子が波斯の歲入を擔保として夥しく約束手形を發行せるが爲、その財政の困難を來せる事情を述べ、租稅のうちより之が支拂を受けんとて來往するもの頗る多數に上り住民はその經費を支辨し得ざるが爲、殆ど零落の淵に陷れりと說けり。租稅は極めて專斷に增加され、農夫はその收穫を擧げて之を提供するもなほ能く之を完納し得ざりき。蒙哥（モンゲ）は阿兒昆（アルゲン）に隨行せる波斯各地方の代官に命を下して、各〻別紙に奏議を認め、その管轄せる地方の政弊を擧げ且之を匡救するの方策を上らしめたり。代官等はこの命に從ひ、翌日擧て、皇帝の許に奏議を上りしが、その意見の歸着する所は要するに、人民の困難は重稅の致す所なれば、波斯に於ても亦麻合沒（マームード）的・牙剌挖赤（エルヴァヂエ）のトランスオクシアナに施ける徵稅制度を採用す可しと云ふにありき。この制度に從へば、納稅者財產の多寡に應じて人頭稅を徵收するのみにして、一年に一回之を納付せるものは爾餘の租稅を免除せられたり。この奏議は嘉納せられ、波斯に於ては人頭稅の最高額は七的那

dinar 最低額は一的那と定められたり、但し支那幷にトランスオクシアナに於ては最も貧しきものは金一片、最も富めるものは金十五片を賦課せられたり。（チに據る。ヂューヴェニに從へば支那とトランスオクシアナとに於ては最高金十片最低一片を課せられたりと云ふ。）この租稅の收入は、軍隊、驛馬、勅使の費用に充つ可しと命ぜられ、如何なる名義を以てするも、個人に對して誅求することは禁ぜられたり。家畜稅は Countchour と呼び、牛馬各百頭に就き一頭と定められ、その百頭に達せざるものは免除されたり。蒙哥（モンゲ）は又成吉思汗幷に窩闊台（オゴタイ）の詔勅を追認して、司祭を始として基督教、回教、佛教の僧侶（への著者はこの事を述るに方り、蒙古人は基督教徒を Arcaoun 偶像教の僧侶を Toutines と呼べりと記せり。Rubruquis も佛教徒を Toutiniens と呼べることは一六三四年ベルジエロン校訂本三一章幷に四三章に見ゆ、蒙古人が佛教徒を Touin と呼べることと以て知る可し。基督教徒の稱呼に關しては蒙古人が之を Arkhaïoun と稱せること、Étienne Orpélian の Orpélian 史にも見ゆ、サン・マルタンのアルメニア研究錄第二册一三三頁を參看せよ。）幷に親ら生計を營むこと能はざる各國の老人廢人に對してすべて課稅を免除したり。猶太教の僧侶はこの恩典に浴すること能はざりしかば、イスラエル人は深く之を憤れり。

蒙哥（モンゲ）は租稅の怠納金を追徵するを禁じ、國庫を充實せんよりは寧ろ人民を愛撫せんことを思ふこと深しと云へり。貴由（クユク）の崩御以來、皇太后幷に宗族の諸公子は、その部下に屬せるすべての人人に對し、夥しく納稅免除の特典を與へたるを以て、皇帝は命じて成吉思汗の崩御以來下附されたるすべての免稅特典を廢し、且宗室の爾餘の公子の豫め地方の代官に交涉せずして命令を發することを禁じたり。公子は何れも莫大の采邑を有せしも、而も征服地を以て成吉思汗の子孫の共

有財産なりと見做し、當然皇帝と共にその歳入を分配す可きものなりと信じたるを以て、この大帝國の元首の權力は夥しき一族に蠶食せられ制限せられたりき。

皇帝は又、使節急使の私人の馬匹を徴發し、各驛站に於て十四頭以上の馬匹を更代として請求し、旅行中規定以上の給養を要求し、その通路に當らざる町村に入ることを禁じたり。窩闊台の治世以來、爲替業者、商估、宮中御用達等は韃靼の地を往來するに方りて驛馬を給せられたり。然るに蒙哥は私利を營まんが爲に旅行するものが、官吏の便を圖りて設けたる制度を利用するは、奇怪のことなりとてこの惡弊を中止せしめたり。

多數の商人は、皇帝貴由の爲に調達する所あり、之が代價として地方の歳入を擔保とせる約束手形を受領せしも、皇帝の急に崩御せしが爲、未だ之を正貨に換ゆることを得ざりき。皇帝の崩御後も亦皇太后、皇子、皇姪等は、その購求したる物品に對して、同じく種々の歳入を擔保として手形を發行したり。蒙哥の位に卽くや、この商人等の多數は、その手形に對して毫も支拂を受けざりき。而も新皇帝の名聲盛なるを聽きて勢を得、その寛仁大度ならんことを信じ、爭てその斡耳朶に赴けり。內帑を管理せるものは、皇帝は敢て先帝の債務を辨償されざる可く況んやその仇敵の債務をやとの意見を抱き、皇帝はこの問題に關しては何等躊躇する所なかる可しと云へり。然るに蒙哥は內帑の正貨を以て之を支拂ふ可しと命じ、その額は銀貨五十萬巴立施以上に達せり。

一二五二年二月、蒙哥は卽位後皇太后の尊稱を上れる生母、唆魯忽帖塔尼を失へり。この親王妃は基督教徒なりしも而も回教徒にも亦恩惠を垂れて厚く之に施せり。卽ち黃金一千巴立施を下賜して蒲花羅に回教の學院を建設せしめ、且之に多大の土地を與へたり。この學院 Médrèsse は喀尼 Khani と稱し一千の學生之に出入したり。皇帝窩闊台は深く敬意を示し、大事ある每に必ず、先づ之に諮り、その使節に對しては最も鄭重に之を禮遇したり。窩闊台は又再醮して皇子貴由の配たらんことを求めしが、子女の教育に全力を傾注せざるを得ざるが故、遺憾ながら貴諭に應ずること能はずと答へたり。かくて第四子阿里不可と共に阿爾泰山附近の地に住へり。而してその夫幷に成吉思汗の墳墓の傍に埋葬せられたり。（チ、ヘに據る。）蒙哥は父拖雷を皇帝の位に進め、支那の慣例に從ひて、祖先の靈廟に於て謚號を贈れり。（謚號は卽ち眷宗なり、Gaubil はその一〇九頁に於て、spirituel 幷に respectable の義なりと解せり。）

皇帝は一二五二年八月を以て和林に赴き、曩に卽位に反對したりし諸公子諸公主の運命を定めたり。皇后斡兀立海迷失は曩に、合罕の使節の來りて新帝に忠誠を表す可しとの主旨を傳へたるに對して、蒙哥も亦爾餘の諸公子と共に、窩闊台の子孫に非ずんば之を皇帝と仰がじと誓約したるにあらずやと答へしを以て、皇帝は特に之を怒り、その雙手を一の革囊に收め之を縫合して來らしめたり。その皇帝の本營に着するや、失烈門の母と共に唆魯忽帖塔尼の采地に移し、斷事官忙哥撒兒は悉くその衣服を剝ぎて裸體となし以て訊問を加へしより、皇后は皇帝の外何人の眼に

も觸れしめざりし身體を辱めたりとて憤然として詰問する所ありき。兩人共に妖術を以て蒙哥の生命を短縮せんと企てたりと判定され、毛氈に裹まれて溺死の刑に遭へり。失烈門以下の三子は既に皇帝を承認する勿れと煽動せるは我等が母なりと白狀したりしなり。海迷失の輔弼の臣のうちにありて首席を占めし喀達克、鎭海を死刑に處したり。鎭海を殺せしは丹尼世們哈求魄 Danischmend Hadjib なりき。察合台の孫不里 Bouri〔元史譯文證補に太宗孫不里とあり。〕は之を拔都に交付せしに、拔都はその曾て酒興に乘じて罵詈を加へしを怒り、之に報ゐんとしてその生命を奪へり。

蒙哥は骨肉の懿親を思ひて、三公子の罪を問はざりき。忽察斡兀立は和林の西なる蘇里該 Souligai と稱する地方に遷され、腦忽と失烈門には出征軍に加はる可しとの命令を受けたり。間もなく任に支那方面に就かんとて出發せる忽必烈は失烈門を愛せしより、兄なる皇帝に之を同伴するの許可を得たり。然るに後に蒙哥の親ら支那に赴くや、嫉妬の念之を抑へ難く、曾て皇帝の繼嗣となれるこの青年の公子を溺死せしめたり。窩闊台の實子は多く各地に左遷され、その父より讓り受けたる軍隊を奪ひ去られたり。而して皇帝は之に忠誠を表したる諸公子に分配したりしが、合丹 Cadan と蔑里 Mélik と闊端の諸子とは、快く來て奉仕したれば、敢て之を懲戒せず、依然としてその軍隊を統率せしめしのみか、各〻之に窩闊台の斡耳朵一個とその寡婦一人とを與へたり。

如上の復讎を以て滿足せず、蒙哥は帝國の範圍內に於て窩闊台統の爲にせるものを盡く羅致せんと欲し、禁軍の士卒は、和林山脈より Otrar に亙りて一連鎖を爲し、判事貝喇 Bela を察合台の領土に遣して、罪あるものを糺明して之を死刑に處せしめ、更に他の審理官を支那駐屯軍の許に派したり。之と同時に二個の軍隊は、乞兒吉思人幷に倔倔助人特の地方に派遣せられたり。

（ラシッド曰く爾來蒙古人は內亂に耽り、常に相一致して政權を保ち領土を失ふ勿れと戒めたる成吉思汗の遺訓を忘却したるが如し、成吉思汗は一日和協の利を示さんとて、箭より一本の矢を取り之を折りて皇子等に示し更に二本三本乃至十本を拔きて腕力あるものの之を併せ折ること能はざるを示し、卿等の恃む可きは實にこの一致にありと諭せりと。）

宿敵を全滅して帝位安固なるを得たれば、茲に於て新皇帝は、庫哩勒台に來會したる諸公子諸將軍を歸還せしめたり。伯勒克 Berca と脫哈帖木兒とは、美事なる下賜品を得、親ら之を拜受せる上、兄拔都の許にも之を齎らせり。忽剌旭烈 Cara-Houlagou は祖父察合台の遺領を授けられ、且皇帝貴由より汗の位を與へられたる叔父也速蒙哥を死刑に處す可しとの命に接せり。忽剌旭烈は往きてその所領に主たらんとするの途上に於て卒せしも、その妃、倭耳干納 Organa は皇帝の命を實行して也速蒙哥を殺したり、也速蒙哥は常に飲酒に耽りて政治の處決一にその妃に待つの極に陷りしなり。倭耳干納は政柄を握りて十年間之を保てり。蒙哥は驟馬の御者克薛傑の功を賞することを忘れず、答剌罕 Terkhan の高位と特權とを授け、且巨額の金幣を賜へり。

この時に方りて畏兀兒部王の受けたる運命は、以て能く蒙古人のその隷屬君侯に對する待遇を

例證せり。成吉思汗に臣服したりし巴兒朮(バルジュク)はその軍に從ひて先づトランスオクシアナに次で西夏に至れり。その功に酬ゐんとして成吉思汗は、公主阿勒屯別乞 Altoun Bigui を之に許せり。然るに蒙古の大帝の崩御せる爲、婚姻は延期せられたり。窩闊台(オゴタイ)は父の遺志を全うせんと欲せしも、兎角するうちに公主逝き、巴兒朮(バルジュク)も亦その後を追へり。その子怯石邁因 Kichmain 窩闊台(オゴタイ)の朝廷に赴き、畏兀兒(ウイグル)部に於て部長に與へられたる亦都護(イチクー)の尊稱を授けられたり。間もなくその卒するや、監國脫列哥那(ツラキナ)はその弟薩命抵 Salendi(チの畏兀兒の條に據る。)を繼嗣たらしめたり。薩命抵(サランデ)の蒙哥(モンゲ)の卽位式を擧行するに方りて、來朝して忠誠を奏せんとするや、一人の偶像信者の奴隸あり、その不在に乘じ、亦都護(イチクー)は金曜日を以て回教徒の寺院に集まれるに乘じて、別失八里(ビシバリク)を始として爾餘の畏兀兒(ウイグル)部領に於ける回教徒を悉く虐殺せんとの計畫を立てたりと告發したり。當時別失八里(ビシバリク)に駐在したりし蒙哥(モンゲ)部下の將校賽甫曷丁(セイフウッディン) Seif-ud-din はこの告發を受理して使節を國王の許に派して歸國を要めたり。薩命抵(サランデ)乃ち踵を返せしに、奴隸は國王の面前に出でて、陰謀發覺の顚末を述べ、對決を促せり、而も國王は斷乎として告訴の全部を否定せしより、奴隸は須らくこの事件は朝廷の裁判所に於て、審理を乞ふ可しと主張せり。賽甫曷丁(セイフウッディン)は直ちにこの奴隸を帝都に赴かしめたり。間もなく國王も亦上京す可しとの命令に接したり。嚴酷なる忙哥撒兒(マングサル)之を訊問し、且之に拷問を加へしを以て國王は遂に罪に服したり。皇帝は國王を別失八里(ビシバリク)に還してその刑罰を受

けしめたり。かくて一金曜日に於て、夥しき群集の環視を受けつつ實弟倭肯赤 Okendje の爲に頭を刎ねられ（一二五二年）回教徒は太く之に滿足したり、蓋し國王は佛教徒にして、苛政を施きて回教徒の激昂を誘致せしが如く、回教徒は乃ち國王を失はんとして陰謀を企てしに似たり。部下官吏の有力なりしもの二人は共犯罪と判決され、身體の中央より兩斷されたり。第三の白剌 Bela は僥倖にも再びその生命を全うすることを得たり。白剌は曾て監國海迷失(ガイミシ)に仕へて史生たりしを以て、曩に一度拘引せられ、爾他の監國部下の官吏と共に死刑を宣告せられたりしに、偶〻皇帝が危篤の病に罹れる母后の快癒を上天に祈らんとして、その日に處刑す可き豫定の罪人を悉く特赦したりしを以て、既に刑場に致され衣服を剝がれたる白剌(ベラ)はこの特赦の恩典に浴することを得たり。蒙哥(モンゲ)はこの際その生命を助けたるを以て、最早之を死刑に處することを好まざりき。而もその妻妾、兒女幷に財産は擧げて之を國庫に沒收し、シリア幷に埃及に向け使節として派遣したり。蓋し蒙古の君侯の罪人の死を免ずるや、或は之を軍隊に派して君侯の爲に戰死せしめ、或は危險なる媾和使の任に當らしめ、或は風土の北國人に適せずその健康を害ひ易き地方に派遣するを以て慣例となせるなり。告發者たる奴隸は償はれて回教徒と爲れり。その亦都護(イチクー)の處刑了て後別失八里(ビシバリク)に歸るや、告發の危險を感ずる畏兀兒部人は大に狼狽し、爭て之を訪問してその意を迎へ、且之に莫大の音物を致せり。畏兀兒部人のうちにありて、窩闊台(オゴタイ)統に心を寄せたる

ものを悉く一掃し盡せる後、皇帝蒙哥は倭肯赤にこの王國を授與したりへに據る。

この間、一二五一年を以て支那に向て發程したる親王忽必烈は、蒙古領となれる支那帝國の地方が多年干戈の區となれるが爲、人民塗炭に苦めるより、之を救治するの策を講ぜんとして苦心したり。かくて青年の時支那文字の師範たりし支那の學者姚樞を聘して人格の高潔なると學識の該博なるとによりて傑出せるこの哲學者の意見を聽かんとしてその熱心を面に現せり。姚樞は親王の爲に道德政治に關する一書を起稿し、帝王の道と善政の原則とを論述したり。修身、力學、尊賢、親親、畏天、愛民、好善、遠佞は卽ちこの書に於て、八目として論ぜられたり。姚樞は三十條を擧げて、最も切實に改革を要するの政弊を指摘したり。且忽必烈に說きて、主として兵權をのみ持して、行政のことは之を有司に委ね、以て朝廷の怒を買ふことなからしめたり。忽必烈は深くその思慮聰明なるを信じ、事ある每に之に諮れり。

窩闊台崩御以來南方境上に駐屯したりし蒙古兵は數〻四川、湖廣、江南に入寇せしも、主として掠奪の慾に驅らるるに過ぎずして、これらの企圖は帝國の國境を擴むるに至らざりき。蒙古兵は刼掠し、蹂躪し、城市を略取し、而して戰利品を携へて退却したり。

窩闊台崩御の年、曾て鞏昌總帥として金に仕へ後蒙古に降れる汪世顯は將軍塔海部下の一隊を率ゐて、四川を侵し、旣に二度蒙古兵に刼掠せられたる首府成都府を圍めり。制置使、陳隆之は

死を決して之を防守せんとせしも、部下將校の一人、陰に欵を蒙古軍に通じ、夜に乘じて之を城內に導けり。蒙古兵は陳隆之を虜にし、その家族數百人を屠り、成都府の東北十里に位せる漢州城壁の下に之を檻送し、命じて守將に降服を勸めしめんとせり。然るに陳隆之は之を却け、大丈夫は死せんのみ、降る勿れと大呼せしを以て直ちに殺されたり。漢州は蒙古兵に抵抗する能はず、守兵三千人は悉く虐殺に遭へり。

翌一二四二年將軍也可諾延 Yké noyan と耶律朱哥 Yélü-Tchouho は西安府を發して新に四川に入寇し、金沙江北岸に位せる瀘州を圍みしが、宋將孟珙は能く之を擊退するを得たり。

四川遠征中偉功を奏したる報酬として、汪世顯は一二四三年公子闊端 Couitoun より陝西地方二十餘州の總帥に任ぜられ、この任命後間もなく逝くや子汪德臣は之が後任に補せられ、且手兵を率ゐて四川の軍に參加す可しとの命令を受けたり。

更に東方に在りては、將軍張柔は一二四二年を以て淮水を渡り、江南地方に於て揚州、滁州、和州、通州等の城市を奪ひ、通州は、刼掠せられたり。

一二四五年河南の總督察罕は監國皇太后の命を受けてその部下三萬騎を率ゐ、將軍張柔の軍と合して、淮水を渡り、その南岸に位せる壽州を攻めて之を拔き、泗州、盱眙 Soui-tcheou 揚州を圍みしに、偶〻宋の使節來て和を求めしより師を班したり。

蒙古の萬戸史權（天澤の子なり）は一二四六年湖廣に入寇して深く黄州に達せり。この時に方りて（十月）宋の寧武節度使、漢東公孟珙は逝けり。孟珙は支那に於て蒙古兵に當れる最も頑强なる敵將にして、敏捷にして膽畧を具え、數〻蒙古軍の前進を阻止し幾度か之を迎へて擊退したり。爾來一二四七年に將軍張柔の江南なる泗州に攻擊を加へし外、蒙哥の治世に至るまで史上に交戰の記事を見ず。

兩帝國接壤の地方は蹂躙せられ、都城は無人の境と化し、田園は委棄せられて不毛の地となれり。姚樞の獻策に從ひて忽必烈は經略司を汴京に置きて、この荒廢に歸せる地方回復の策を講ぜしめたり。かくて屯田の方法によりて、河南々部に駐屯せる士卒を利用することとなし、之に牛と農具とを授け、宋兵至れば則ち戰ひ、退けば則ち田を耕さしめたり。西は鄧州より東は黄河々口に至るまで一定の距離に於て衞戍を設けたり。

一二五二年皇帝は漢地を分て宗族を封じたり。忽必烈は河南と陝西の鞏昌府とを得、且雲南（大理）に遠征を試む可しとの命を受けたり（八月）。又他の宗族の公子也古 Yégou は高麗征服の命を受けしが（十一月）、也古はその兵を率ゐて曾て怨を懷ける將軍塔剌兒 Talar の營を恣に攻擊せるより、三箇月の後その命令を撤回し、征東元帥の任は之を札剌兒帶 Tchalatou に授けたり。この年又蒙哥は、支那の學者より、祭天の儀式を學びて、山頂に於て嚴かに天に向て

犧牲を供へたり。

蒙哥は一二五三年一月大赦の禮を發したり。又斡難河源に近く召集したる庫哩勒台に於て、遠征軍を波斯に派遣す可しと決議したり。皇帝は之が司令長官として第二子、旭烈兀 Houlagou を選み、旭烈兀はこの年を以て征途に上り、先づイスマイリエン族を伐ちて之を亡し、次にハリフハなるアッバス家 Abbassides の王國を滅し、シリアを侵し、その波斯に建てたる王朝は殆んど一世紀近く繼續したり。旭烈兀幷にその子孫の事蹟は支那に君臨せる蒙古皇帝の事蹟に次で之を說く可し。

皇帝は諾延撒里 Sali をして千人に將として出發し、印度境上の監視軍に聲援を與へしめたり。（チに據れば撒里は塔塔兒部、土土哈里育特氏、Toutoucaliontes に屬せしが、塔塔兒部の虐殺に遭ひし時、同部より出で成吉思汗の妃たりし、也速篇、也速凱特の哀願によりて助けられたりと。）撒里は監視軍の司令官に補せられ、旭烈兀の節制を受くることとなれり。初め成吉思汗は四皇子に命じて各〻千人の聯隊を出してこの監視軍を編成せしめ、かくて、石灘干、塔里堪、阿里阿拔脫、格溫、八迷俺、哥疾寧等の地方に駐屯せしめたり。これらの部隊は印度の北部に入寇したり。（トに據る。）一二四一年十二月窩闊台の殂するに方りてや、蒙古兵は進んで拉火耳 Lahaur 城を圍みたり。的里の支丹の爲に同城を守れる Caracousch は部下の相和せざるを認め、遁れて師を首都に班し、爲に拉火耳は陷りて蒙古兵に屠られたり。この侵略に次で的里には革命起れり。

的里の皇帝伊勒脱迷失 Iletmisch の位を嗣げるその子支丹 Moizz-ud-din Bahramschah は部下の諸將をして新に忠誠を誓はしめたる後、兵を率ゐて進んで蒙古兵に當らんとせり。然るに支丹に陪して從軍せる宰相 Nizam-ul-Mulk は陰に支丹を失はんことを思へり。乃ち軍隊の Biah 河畔に在りし時、宰相は支丹に告げて將校中に異圖を懷くものありと云ひ、機先を制して兵營に赴かんことを促し、然らずんば陰謀の熟したる曉之を鎮定するの全權を宰相幷に軍司令官 Coutb-ud-din Hassan Gouri に授けられんことを乞へり。支丹は厚く宰相を信ぜるより犯罪者は立ろに之を死刑に處す可しと答へ、且暫く反間として盡力せんことを要めたり。宰相のこの勅諭を將校等に示すや、將校等は直ちに宰相の支丹廢立の擧に同意し、的里に軍を進めて、包圍攻擊三箇月半の後、一二四二年五月この都城を奪ひ、在位僅に二年餘に過ぎざりし支丹を殺し Iletmisch の孫 Alaï-ud-din Mass' oud Schah を奉戴したり。

この新支丹の君臨せし時、蒙古人は Candahar 地方より Sind に入寇を試み、Oudja 城に圍を置きしが、的里を發して前進し來れる支丹が Biah 河附近に着したりとの報に接して忽ちにして師を班したり。（巴里文庫藏波斯文寫本 Firische 印度史に據る。）

この同じ一二五三年に蒙哥はその將校の一人なる別兒哥 Berké を遣して露西亞の戸口を調査せしめたり。〔三年遣必闌別兒哥括斡羅思戸口（元史本紀）〕

第六章

一二五三年の末、佛蘭西王の書信を携へたる二人の西僧は、蒙哥の朝に來着したり。初めルイ第九世のパレスチナに滯在するや、タルタリーより歸來せるネストリウス派の基督教徒より拔都の長子、撒里荅 Sartac の基督教徒なるを聽きて、宣教師にしてこの公子の保護をだに得ば、韃靼人の間に眞宗教を傳へ得べしと認め、Rubruquis と呼べるフランシスコ僧派の僧侶に與ふるに撒里荅に寄せたる推薦狀を以てし、書中タルタリーに住ひて、基督教の教旨を說教することをこの僧侶に許可せられたしと要めたり。ギョームは一二五三年パレスチナを出發し、Barthélemi de Crémone 外一人の僧侶を從へたり。コンスタンチノープルに赴きて乘船し、クリミアの Soudac に上陸せる後三日程にして初めて韃靼兵の舍營地に着したるルブルキは『余の之を目擊して且熟視するや恰も新世界に入れるが如きの思を爲せり』と云へり。かくて撒里荅の營所に赴きしが、その所在地よりヴォルガ江までは更に三日程を隔てたり。『スーダクを出發せるより、この旅行に二箇月を費せしに、この間宿泊するに家屋なく將た天幕なく、又村落なく、常に野外又は車臺の下に眠り、途上何處にも又村落なく、廢屋なく、滿目荒涼唯無數の Comans の墳墓

あるのみ』とルブルキは述べたり。撒里荅部下の將校にネストリウス派の基督教徒あり、ルブルキ謁見紹介の任に當れり。時に使僧は身に燦爛たる法衣を纏ひ、手に國王より賜はれる美麗なる聖書と皇后より贈られたる光彩陸離たる裝飾を施せる高價の祈禱書とを持ち、同行の僧は彌撒書と十字架とを携へ、隨員は香爐を捧げたり。門に近くや、慣例を守りて閾に觸れざるやう注意す可しと警められ、且公子を祝福して讃誦の一節を唱へられたしと所望せられ、門に入るに方りて Salve Regina（幸あれ后）を誦したり。撒里荅幷に妃妾は暫し物珍らしげに使僧の服裝書籍を檢めたりしが、軈てルブルキはルイ聖王の宸翰に、亞剌比亞文シリア文二通の譯書を添えて、之を公子に捧呈したり。撒里荅は來翰の内容を審にせる後、翌日使僧に告げて、若し地方に定住せんと欲せば、父王拔都の勅許を要するが故に、父王の朝廷に案内せしむ可しと云へり。ギョームは撒里荅の左右にネストリウス派の僧侶の奉仕するを目擊せしも、而も撒里荅の基督教徒にあらざるを確め『公子は寧ろ基督教徒を嘲弄し蔑視するものの如し』と記せり。（ルブルキは撒里荅の朝廷に止ること四日間に及びしも、毫も飲食の供給なく、唯一回少量のクーミズ即ち馬乳酒を贈り來れるのみと云へり。）

かくて宣教師の一行は、ヴォルガ江畔拔都の朝廷を訪はざるを得ざるに至りぬ。ルブルキは拔都の本營の一大都會も及ばざるの地域を占め、その附近三四里の間に多數の男女の群集するを見て驚けり。拔都の陣營は中央に位し、その出入の門は南面せり、隨てこの方面には幕舍を設くるを許さず、幕舍はすべて本營の右方幷に左方に列り、東より西に向へり。妃妾の幕舍は左方に在りて、品秩に從ひて相次第せしが一投石の距離を以て相互の間隔を保てり、拔都の妃妾は十六人を數へたり。妃妾の帳幕の周圍には幾多の幕舍ありて奉侍せる老少官女の邸宅に供せられ、又家財貯藏の用に供せる小舍ありて、之を覆ふに獸脂或は羊乳を塗抹せる毛氈を以てし、かくて雨水を防げり。這般の幕舍倉庫はすべて車の設ある架上に建てらるるが故一朝住地を變更せんとする時は、之に架するに牛又は駱駝を以てするなり、而してこの地方は茫漠たる平原にして、土地に高低少きを以て、去來極めて容易なるなり。

ルブルキの拔都の朝廷に案内されたる時、拔都は王宮狹隘にして多數の臣下を悉く收容し難きを以て、新に一大帳幕を營ましめたり。ルブルキは云へり、『帳幕を結べる紐は、家の閾と同じく神聖視さるるが故、之に觸れざるやう注意されたしとて數〻警められたり。一行は着衣を更めず、跣足露頂、以て稠人視目のうちに立てり。Jean de Plan Carpin 師は一行に先ちて既に此處に來りしが、彼時は法皇廷より派遣されたるを思ひて、侮蔑を受けざらんが爲なる可く、衣裳を整へたりき。次で一行は帳幕の中央に案内されしが、遠來の使節が通常爲し來れるが如く膝を屈して敬意を表す可しとの請求を受けざりき。故に一行は殆んど詩篇第五十一章を謠ふの間直立不動の姿勢を執りしが、滿廷聞として聲なかりき。拔都は高御座の上に坐せるが、此玉座は三級の階

段に依りて上る可き、金色燦然たる堂々たる床架にして、傍に妃妾の一人着座し、他の人々はこの王妃の左右に列せり。女子の着座せるは拔都の妃妾のみにして、以て一方の席を充すに足らざるが故、男子を以てその空席を占めしめたり。帳幕の入口には一脚の長椅子あり上にクーミズ酒と寶石もて飾れる金銀の大盃とを載せたり。拔都は一行を凝視せるより、一行も亦注意して拔都の面を仰げり。拔都の面貌は聊か赭顔なりき。終に拔都は命じて余に口を開かしめんとせり、而して案内者は一行に求むるに膝を屈して上奏す可き事を以てせり。茲に於て余は人に對するの態度を以て、片膝を地に屈したりしに、案内者は余に向て兩膝を屈す可しとの意を表したり、余は敢て之を拒まずして、衷心上帝に祈願を籠めつつ命ぜらるゝが儘に兩膝を屈して、拔下の如く陳述したり。曰く『陛下よ、我等は上帝に祈禱す、すべての幸福は上帝より出づ、又上帝はすべての現世の利益を陛下に與へ賜ひ、更に復天上の利益をも陛下に與へ賜はんとせらるるを以てなり、而して天上の利益なくんば、現世の利益も畢竟無用の長物に過ぎず。然るに陛下よ、陛下は基督教徒たらざるが故に、決して天上の利益を得させ賜ふこと能はず、何となれば上帝の言葉に、『信じて洗禮を受けたる者は救はるるも、信ぜざる者は呪はる可しとあればなり』と。ルブルキの記事に據るに、この陳述を爲すや、拔都は微笑せしが、蒙古人は總て拍手して一行を嘲弄せり。軈て再び靜寂となりしかば、余は拔都に向て陳述を續けて、余が公子の許に來れるは公子の基督教

徒たることを風聞にて知りしが爲にして、余は我が君侯たる佛蘭西國王より公子の許に差遣され、國王の宸翰を齎らしたれば、余が來意を諒とせらる可き筈なりと述べたり。この陳述を聽取せる後、拔都は余をして起立せしめ、陛下の御名（ルブルキの紀行はルイ聖王への上奏文の體をなせり）并に余の同行者并に余の姓名を問へるを以て、余が通譯は文字に寫して之に答へたり。拔都は更に、陛下が戰爭の爲に軍に將として外國に向はれたりとのことを傳聞せりとて余を詰れり。余は乃ち之に答へて、そは眞實なるも、是れ全く、エルサレムの聖都を占領し、上帝の廟域を汚せるサラセン人征伐の爲なりと云へり。拔都は又陛下より曾て拔都の許に國使を派遣したることなきかと問ひしを以て無しと答へたり。茲に於て拔都は一行に着座を命じ、且馬乳を與へて飲ましめたり。蓋し宮廷にありて拔都と共に馬乳酒を飲ましめらるるは、至大の榮譽なり。余は俯して地上を凝視せしに、拔都は命じて眼を上げしめたり。次で一行は辭し去れり』と。

この謁見の後ルブルキは、拔都公子の敢て地方滯在の許可を與へざること、皇帝蒙哥の勅裁を要すること、并にルブルキ親ら蒙哥の朝廷に伺候して之を請願す可きことを通知せられたり。ヴォルガ江に沿ひ前後六週間、兵車に乘じて拔都の本營に隨行せる後、兩僧は拔都の命によりて案内役となれる千夫長の子と共に、九月十五日馬に乘じて出發し、途上三箇月以上を費したり。ルブルキは記して曰く『この長途の旅行に際し一行が飢渴に苦み寒威に惱まされ疲勞困憊せし事實

は到底之を筆紙に盡し難し』と。一行は蒙古人の征服に先ち、康里人 Cancalis の領域たりし茫漠たる曠野を横斷し、更に土耳其斯坦卽ち、哈剌乞觧（カラキタイ）、畏兀兒（ウイグル）人の地域、乃蠻（ナイマン）部の故地等を通過して、十二月二十七日大汗の朝廷に到着したり、時に蒙哥（モンゲ）は和林（カラクルム）の南方數日程の地に在りき。この旅行中糧食、馬匹、車輛は例規に從ひ徵發に應じて、往く所として無償に供給されざるはなかりき、何となれば、宗族親王の派遣せる人々は、皇帝の使節と等しく、途上一切の費用を臣民の負擔たらしむることを得たればなり。到る處、拔都（バツ）の部下將校を歡迎せざるはなく、何れも簞食壺漿して郊外に之を迎へ、人々その前に集りて手を拍ち歌を謠ひて祝意を表したり。

兩僧は直ちに旅行の本意に就て尋問を受け、百方辯解せしにも拘らず、皇帝幕下の官吏はその派遣せられたるは、和を乞ふて、君公の爲に服從の誠を現さんとするものなりと認めたり。ルブルキは反覆その佛蘭西國王の使節にあらず、公子撒里荅（サルタク）を以て基督教徒なりと信ぜるより、國王より公子に宛てたる推薦狀を携へ來れる一宣教師に過ぎざるを述べたり、蓋しルイ第九世は夙にタタール人が使節の派遣を認めて服從の行爲と爲す可きを知りしを以て、ギヨーム師を戒めて、決してその使節たりと信ぜしむること勿らしめたるなり。（ルブルキは蒙古人の尊大にして世人を擧げて人貢の意あるを信じ、一行に對して佛國にも又牛羊馬匹多きやと問へり。蓋し之を掠奪し盡さんとの精神ならんと云へり。一行は撒里荅拔都の部下よりも數〻かく問はれたり。（第三十二章）） 宣教師の一行は一二五四年一月四日、大汗に拜謁を許されたり。ルブルキは記して曰く『宮廷門前の氈卷き上げられて、一行は宮內に入れ

り。當時なほ降誕節終らざりしを以て、一行は讃美歌 A solis ortus cardine 云々の一篇を謠ひたり。讃美歌終りて、一行の刀劍類を隱し持てるやを疑ひて、殘る隈なく身體を檢査し、通譯さへも劍と帶とを門衞に渡さざるを得ざりき。宮廷の入口に一脚の長椅子あり、上にクーミズ酒を盛れり。一行の通譯はその側に直立し、一行は他の長椅子に座して婦人と相對せり。謁見の席はすべて覆ふに金色の布を以てし、中央には一個の火鉢あり、荊棘丱にこの地方に夥しく繁茂せるニガヨモギ卽ち absinthe の根を集め、牛糞を加へて熾んに之を燃せり。大汗は床上に坐し、毛皮を裏地となし、海豹の皮の如き光澤ある美服を纏へり。身長は通常にして、面貌は稍〻扁平に、年齡は凡そ四十五歲位なりき。若くして頗る濃艶なる皇后は、大汗の側に坐し、公主の一人に Cyrina と呼びて既に婚期に達せるも、容姿の振はざるもの之に陪せり。他の幼少なる公子公女は更に附近の床上に坐せり。汗は一行に向つて葡萄酒と、米より造れる térasine 酒と、純粹の牛乳より造れる cara coumiz 酒と、又は蜂蜜より製せる ball とのうちにて何を好めりやと問へり、蓋しこの四種は多季の飲用として用ひらるるなり。余は之に答ふるに一行は餘りに酒を嗜まざる旨を以てし、何にてもあれ陛下の下賜せらるるものは喜で之を受く可しと述べたり。かくて汗は命を下して一行に米より造れる térasine を賜へるが、白葡萄酒の如く、無色透明にして甘味あり、余は命ぜらるゝが儘に聊か之を味ひたり。然るに通譯が頻りに盃を重ねて、云ひしこと爲

せしことも覺えず、遂に熟睡するに至れるは、一行の甚だ不快に感じたる所なりき。次で汗は幾種かの肉食鳥を齎さしめて、之を掌上に載せ之を凝視すること多時に亙れり。かくて後汗は一行に命じて來意を述べしめたり。汗の側には通譯としてネストリウス派の僧あり、一行も亦通譯を伴ひしが上述の如く痛く酒に醉ひたり。玆に於て一行は膝を屈し、余は口を開きて『願くば上帝に感謝する所あらん、蓋し上帝は我等一行を導きて遼遠の地方より長途恙なくこの地に來り、地上の大權勢を與へ賜へる蒙哥大汗に謁見して敬意を表することを得しめたれば也。而も又我等の主耶蘇基督の等しく祝福を垂れ賜はんことを乞はん、何となれば、我等の生も死もすべて主の力にて主は陛下に幸福なる永生を與へ賜はんとせらるればなり。（かく云へるは蒙古人の祈願を望むは唯〻長生を得んとするが爲なるを以てなり。）余は更に言葉を添え、我等の故國にありし時、撒里荅公子の基督教徒たるを傳聞し、諸教徒甚しく之を喜びしが、就中佛蘭西國王は、之により て和親を表せる宸翰を一行に託して、一行の何者たるやを證明し、以て一行を公子の許に派遣して、永くその地方に淹留するの許可を得んとせり、殊に一行は所屬僧派の規約に隨ひ、上帝の律法に基きて生活せんとせば如何にす可きやを世人に說得せざるを得ず。扨撒里荅公子は玆に於て一行を父王拔都の許に送り、拔都大王は更に復一行を遣りて、上帝より地上に大帝國を授けられたる皇帝陛下の許に來らしめしかば、敢て辭を卑ふして上帝に祈らんとす、願くば陛下をして一

行の領域内に滯在し、上帝に服事して命令を行はしめ且陛下と后妃と公子との爲に祈禱せしめ賜はんことを。我等は金をも銀をも寶石をも有せず、唯〻上帝に服事して絕えず陛下の爲に上帝に祈禱する所あらん。而も我等は少くも嚴寒の候の過ぎ去る迄、滯在の許可を乞ふものなり。加之余の同僚は經來れる長途の旅行の爲、疲勞困憊したれば、生命の危險を冒すに非るよりは、直ちに旅行の途に上ること全く不可能なり、故に同僚は余に逼て數日間淹留の許可を陛下に乞ふの已を得ざるに至れりと。大汗にして若し特別の恩典を下して淹留の許可を下すにあらずんば、一行は直ちに拔都の許に歸還す可しとの命令ある可きを憂へしを以てかく陳述せるなりき。大汗は乃ち一行に向て答へて曰く「太陽の光線の照さぬ隈なきが如く、朕の勢力も又拔都の勢力もすべての地方に及べり、汝等の金も銀も朕は敢て之を要せず」と。是までは余は兎にも角にも通譯の言ふ所を耳にせり、然れども、余は毫も爾餘の勅語を了解すること能はざりき、或は通譯泥醉せしならん、但し余は蒙哥も亦聊か酩酊せりと思へり。その後一行は着席を命ぜられ、瞬時の後大臣數人と共に退出せり。一行の寓所に歸らんとしたる折、通譯來りて、蒙哥は一行を憐み、寒氣の衰ふる迄、二箇月間滯在するの許可を下せる旨を語れり。蒙哥は又一行に傳言して同地の近傍に和林と稱する一都會あり、一行若しその地に赴かんと欲せば、同地に於て日常品を供給す可し、但し皇帝幕營の地に供するを便なりとせば、同じくすべての必要品を支給す可きも、而も朝廷に

追隨して各地に來往する時は、多大の困難苦楚を忍ばざる可らずと云へり。』

皇帝の朝廷に滯在中、ルブルキは蒙哥をはじめ皇族の人々は、基督教徒、回々教徒、佛教徒の儀式に等しく參列し、基督教に就ては單に香を焚き酒杯を祝福し十字架を崇むる等の外形上の儀式を知れるのみにて、その cames 卽ち巫師の外、這般三教の僧侶を欵待するは、欲求せる幸福を得、恐怖せる災禍を避くるに於て遺算勿らんとの念慮に出で、宗教上の儀式に他の目的のありを得可きことに想到せざるの狀態を視察したり。ルブルキの記事に據るに、蒙哥の朝廷に仕ふるネストリウス派の僧侶は無學無識にして飲酒に耽り宮中に宴會あるや、基督教の僧侶先づ皇帝の爲に祈りて酒盃を祝福し次に回々教の僧侶現れ、最後に邪教徒出でて興を助くとあり。又曰く耶蘇出現節 Epiphanie の末日に蒙哥の正妃忽都台 Coutoucta' 長子班禿 Baltou 以下の諸子を從へ、あまたの官女と共にネストリウス派の禮拜堂に來れり。何れも地上に伏し右手を以て聖像に觸れて脣に當て、了て來會者と手を握れり、これネストリウス派の慣例なり。蒙哥も亦この禮拜堂に來り、王妃と共に祭壇の前の金色の長椅子に座し、ルブルキをして讃美歌を唱へしめたり。皇帝は間もなく還御せしも、正妃は止りすべての基督教徒に下賜さるる所あり。次で Tarassoun 葡萄酒幷に Coumiz を齎し皇后は盃を手にし膝を屈して祝福を求めその盃を傾けらるる間僧侶は讃誦を唱へたり。次に僧侶は交る〳〵酒を飲みてその日を送れり、夕と成りて皇后も銘酊せられ馬車にて還御あり僧侶之に隨從して、絕えず讃美歌を唱へ甚しきは喧騷を極むと。ルブルキは更に曰く大齋前第三主日の前夕土曜日卽ちアルメニヤ人の復活節に我等一行はネストリウス派の僧侶幷に一人のアルメニヤ人と共に相列りて蒙哥の宮廷に赴けり。我等の入らんとする時一人の官人羊の肩胛骨を黑燒にせるを携へて出で來れるより怪みてその理由を問ひしに此地方に於ては何事を爲すにも先づこの骨の占に問ふを常とし、大汗の或る計畫を立つるや、先づ三片の骨を齎らさしめ、之を兩手に挾みてその事に就て熟考したる後、扨之を燒かしめ、骨の碎けざる時は吉、碎けたる時は凶と判ずと云へり、(卷末の註第一を見よ)蒙哥の前に進むや、ネストリウス派の僧侶は香を齎し蒙哥は之を器に投じて燒けり。次で僧侶は酒盃を祝福し、我等も之を强いられ、了て一同酒を味へり。我等は更に班禿 Baltou の邸に赴きしに、公子は一行の近くを見るや忽ちに座を離れ地上に俯伏して十字架を崇め、更に立ちて之を新なる絹布の上に載せて前面の臺の上に置けり。師傅 David ネストリウス派の僧なりしより之を敎へたるなり、但しダヴィデは醉漢にして我等の着席せる後、公子先づ盃を擧げて我等をして之に倣はしめたり。我等は更に第二、第三、第四王妃の邸を訪ひしが、何れも十字架を崇めて之を拜し、之を臺上に置けることのみ、その基督教に就て知れるすべてにして、其他は全く巫祝偶像禮拜者の習慣によれりと。(第三十六章乃至第三十九章)更に下に曰く復活節の前夕、卽ち一二五四年四月十九日和林に於て洗禮を受けたるもの六十人以上基督教徒は大に之を喜べりと(第四十二章)

この三宗教の僧侶等は蒙古人の間に改宗者を得んとて努力し、殊に皇帝を改宗せしめんとせり、されど蒙哥は成吉思汗の遺訓を尊重し、何れの宗教にも優遇を與へず、平等に之を待遇したり。一日ギヨーム師に向て宗教上寬容なる可きことを訓戒して、我宮中に出入する男女はすべて唯一にして永生を有する同一の上帝を崇拜するが故に各自思ふが儘に上帝を禮拜するの自由を有せざる可からずと語れり。その各宗派の男女に向て恩惠を施せるより、各自皆わが宗教こそ優遇せられたりと信じたり。歷史家 Alai-ud-din に據れば、蒙哥が最も便宜を與へたるは回教徒なりとて、その好遇の例證として、次の逸事を記しあり。卽ち回教紀元六百五十年(一二五二年)の Beyram 節の日に當り、蒙哥の朝廷に扈從せる回教徒等は、皇帝の斡耳朶の前面に集合して莊嚴なる儀式を以てこの祭を行はんとせり。忽氈出身の大法官 Djémal-ud-din Mahmoud を會長として、大祈禱會(namaz)を營める後、この僧官は斡耳朶に入りて皇帝の爲に祈れり。蒙哥はあまた度祈禱を反覆せしめ、回教徒の祭日に方りて、美麗なる織物、金銀の貨幣を滿載せるあまたの馬車を之に下賜し、且大赦を行ひてこの祭日を祝せんと欲し、勅使を地方に馳せて、牢獄に呻吟せるすべての囚徒を解放す可しとの命令を下したりと。(第二編への註)之に反して基督教徒の歷史家は Haython も Étienne Orpélian も、兩人共に、蒙哥が基督教に對して恩惠を施せることを證明し、而して佛陀の信者は疑もなく皇帝佛教を厚遇せりと信じたり。支那の歷史に據れば、

佛教は實に當時既に國教となれりとあり。

ギヨーム師の視察せる處に據れば、蒙古の僧侶即ち巫師の長は、皇帝の帳幕の前、一投石の距離に寓し、偶像を載せたる馬車を守護せり。この巫師は、占星術を行ひ、且日月蝕を豫言したり。かかる現象の現はるるや、巫師等は大鼓を打ち鉦を鳴らし絶叫して止まざりき。巫師は又何事に關しても日の吉凶を示すが故に、その意見を詢はずしては何事をも企てざりき。宮廷所用のすべての品物幷に皇帝への獻上品を火にて淨むるも巫師等にして、報酬として豫めその一部を私するの權を有せり。兒女の誕生するや、その運命を卜せんとて星占を之に託し、又病氣の平癒を望むときは之が呪文に賴む所ありき。巫師等の人を喪はんことを思ふや、之を誣るに妖術を用ゐて世人に損害を與へたる或る災禍を誘起せることを以てせり。而して詰問に遭へば、狂氣の如く猛りて大鼓を打ちつつ魔神を迎へ、次で精神昏迷の狀態に陷り、眤懇なる魔神より回答を得たりと詐り、之を託宣として揚言するなり。

ルブルキの紀行第四十五章に巫師の陰險にして蒙古人の迷信甚しきことを示せる一話あり。和林にて之を語れるは匈牙利にて捕虜となり、後に基督教徒たりし蒙哥の王妃に仕へるメツツ生れのPaquetteと呼べる婦人なりき。嘗てこの王妃の美しき裘の獻上を受けし時、巫師は例の如く火もて之を淨め、且その一部分を私せり。然るに王妃の御衣を保管せる右の婦人は巫師の私せる部分甚だ多かりしを認め之を王妃に告げしを以て、王妃は巫師を叱責したり。間もなく王妃大患に罹り巫師の占を求めしに、巫師は是れ全く曩に我等に賊名を負せたる婦人の所爲なりと應へたり。茲に於てか、婦人は前後七日の間拷問に遭へり、既にして王妃大漸せしより、婦人は寃枉を清めんとし殉死を乞へり、されど皇帝は之を許し賜はず、婦人を放免したり。又巫師は王妃の逝去せるは全く公主の保姆の所爲なりと誣ひたり、是れそのネストリウス派高僧の妻なるを以てなり。拷問されたる時保姆は王妃の寵を得んとして呪を行ひたることはあれど、王妃を害せんとしたることはなしと抗辯したり。されど遂に死刑に行はれたりと。其後蒙哥の王妃公子を生める時、巫師は星運を卜して、公子の高齡を保ち大帝王と爲り、空前の盛代を見る可しと豫言したり。然るに數日にしてこの公子病に仆れしを以て王妃は失望遣る方なく巫師を召して之を叱責せしかば、巫師は是れ全く曩に死刑に行はれたる保姆が魔術を行へる爲なりと陳謝せり。王妃は之を聞きて大に怒り、保姆に報ゐんとてその遺子二人を殺戮せしめたり、而して男子をば男をして殺さしめ、女子をば女をして殺さしめたり。蒙哥の之を知るや赫怒して王妃を責め、之を禁錮すること七日の後更に一箇月の間宮中より遠からしめ、且青年を殺したるものの首を刎ねて之を少女を殺したるものの頸に繫ぎ、更に燃えたる木材を以てその女子を亂打し遂に之を死に致したり。（第四十七章）

復活節の頃ルブルキは大汗に隨行して和林（カラクルム）に至れり、ルブルキは和林（カラクルム）を以て佛蘭西は巴里の北邙サン・ドニ市にも劣り、同市の伽藍は蒙哥の宮殿全部に比して十倍も大なりと爲せり。二條の通衢あり、一は回教徒通と稱し幾多の市場茲に集まり、皇帝の滯留せるより和林（カラクルム）に來れる多數の外國商人幷に各國より派遣されたる幾多の使節等茲に來住せり、一は漢人通と稱し、工匠是に住へり。この都會には官廳に充てたる幾多の建築物を始として、邪教各派の寺院十二、回教寺院二、基督教會堂一を數へたり。都城は之を繞らすに土壁を以てし四門あり、東西南北の四方に對せり。この門の側に種々の市あり、東市にては高粱その他の穀物乏しきを以て之を賣り、西市にては羊と山羊とを賣り、北市にては馬を賣り、南市にては牛と車輛とを賣れり。

宮城は壘壁に近く位し、繞らすに煉瓦の壁を以てし、北より南の方向に及び、南に面して三門あり以て之に入る可し。宮城の內に大廣間あり、その構造基督教會に似たり、卽ち二列の柱を以て圍まれたる本陣あり。儀式の日には皇帝はこの大廣間の一端に据ゑられたる一段高き玉座に着き、その傍に稍〻低き玉座を設け、正妃之に座せり。公子その他の宗族親王は右に公主は左に着

席せり。玉座と相對して銀製の大樹を立てその根に同じく銀製の獅子四箇を安置し、その顎より葡萄酒、クーミズ酒、蜂蜜水幷に tarassoun 迸り出でて四箇の銀盤に注げり。樹の頂には銀の天使あり、その喇叭を奏する時大膳職は酒泉と通ずる外部の貯藏器を滿さざる可からず。この細工は巴里の金工 Guillaume Boucher の製作に係れるものにて、ギヨーム・ブーシエは匈牙利のベルグラード市に於て蒙哥同胞の一人に捕へられて此地に來れるなり。而してこの報酬として銀三千馬克を下賜されたり。（ルブルキに同じくベルグラード市にてルーアン市に近きベルヴィル生れの僧正も捕へられたるが、その甥當時和林に在り、その他和林には匈牙利人アラン人露西亞人グルヂア人アルメニヤ人等の基督教徒多數住せりとあり。）

皇帝の朝廷に淹留すること五箇月の後ルブルキは出發の準備を爲せり。思ふにルブルキは強て永くタルタリーに住するの許可を乞はんとせざりしものの如し。蒙哥は使節を派遣して之と同行せしめんことを欲せしが、ギヨームは旅行者に對して何等の保證なき地方を通過することなれば、使節の安全に就て責任を負ふ能はずと答へたり。茲に於て佛蘭西國王の宸翰に答ふる可汗の勅書を託されたり。ルブルキはこの勅書を傳達せる後復び歸來して、タルタリーの同地方に住せる基督教徒の精神に慰安を與へ得可きやを問へり。然るに蒙哥は之に對して何等の回答をも爲さず、長途の旅行に上ることなればすべての必要品を充分に整へよとの注意を與へ、別盃を汲みて拜辭せしめたり。（ルブルキは率直に記して曰く余は拜辭するに當り、上帝の惠によりてモーゼの昔行へるが如き奇跡を許し玉はば、或は可汗を改宗せしむるを得んと思惟せりと。）

ルイ第九世に寄せたる蒙哥の勅書は、蒙古語を畏兀文字にて記せるものにて、冒頭に成吉思汗の時の如く降伏勸告の意を述べたり。曰く『是れ不朽の上帝の命令なり。天には唯一の上帝あり、地には唯一の帝王、卽ち上帝の子成吉思汗あるのみ。耳能く聽き、馬能く步まん處、何處にもあれ之を知れ、朕の命令を受けて之に從はず、或は武裝して抵抗するものは、眼あるも見ず、手あるも用ゐるを得ず、足あるも蹇とならんことを。是れ卽ち永遠の上帝と、地上の上帝卽ち蒙古人の帝王の命令なり。

『この命令は是を蒙哥可汗より佛蘭西國王ルイ幷に同王國內の領主、僧侶幷に百姓に告げて以て卿等をして從來曾て聽くことを得ざりし、朕の勅諭と不朽の上帝の成吉思汗に下したる命令とを知らしめんとするものなり。

『曾てダヴィデなるもの蒙古人の使節として至りしことあるも、是れ詐欺漢なりき。卿はダヴィデと共に使節を貴由汗の許に派せしに、使節は貴由の崩後漸くにして來廷せるを以て、皇后海迷失は卿に贈るに絹布と書狀とを以てせり。而も狗よりも卑しきこの婦人（ルブルキは註して可汗親らこの惡婆は妖術を以てすべて我が血統を亡せりと語れりと云へり。）焉んぞ能く和戰の問題を解し國家の大事を知らんや。

『扨この兩僧は卿の許より撒里荅を訪ひ、次で拔都の許に遣られ、更に拔都の命により當地に來れり、これ蒙哥可汗が蒙古人の君長たるを以てなり。朕は兩僧と共に使節を卿の許に派するの

意ありしも、兩僧は我國と貴國との間にはあまたの敵國介在し道路も危險なるを以て、兩僧は使節の安全に貴國に到着するを期し難きを慮り、ルイ國王への命令を載せたる宸翰を齎らさんことを申出でたり。故に朕は兩僧を介して不朽の上帝の命令を卿に傳ふるものなり。卿夫れ之を聽かば、須らく使節を朕の許に致し、和戰何れを望むかを回答す可し。若し夫れ上帝の命令を誤解し、卿の國の極めて隔在し高山大海深潭の之を保護せりと思はんか、苟くも難事を容易にし、遼遠なる地方に近づくことは、是れ朕の能くし得る事なるを知らざる可からず』と。

ルブルキは蒙哥(モンゲ)の書簡を携へ、一二五四年六月を以て發程し、皇帝の命令に依り先づ拔都(バツ)の朝廷に向へり。途上七十日を費せしが、僅に一村落を見たるのみ、而もその地に於て麵包をも得る能はず、時には二三日間クーミズ酒の外一の食物をも得ざりしことありき。蒙哥(モンゲ)は從兄拔都(バツ)に書を寄せて、佛蘭西國王に與ふるの宸翰に於て、思ふがままに加除せしめたり。數週間拔都(バツ)の野營に隨行せる後、ルブルキは途をカウカサス地方に取りて、サン・ジアン・ダークルの修道院に歸り、同地に於て既に佛國に向て出發せるルイ聖王に宛てて旅行の記事を報告したり。Relation du Voyage en Tartarie de Frère Guillaume de Rubruquis, P. Bergeron 版、巴里、一六三四年出版、この宣教師の本名は Guillaume de Ruysbroek なり、フラバント人なれば思ふにブリュツセル市の南方一リーグに位せる Ruysbroek 村の出身ならん、

蒙哥(モンゲ)は又同じ頃小アルメニア國王 Hethoum 第一世の來訪入貢を受けたり。小アルメニアは Sis を首府とせる小王國にして、當時キリキア、コマゲネ地方とカッパドキア、イソウリアの數

部落とに君臨せり。パグラート家 Pagratides の最後のアルメニア國王 Kakig 第二世の死後間もなく、國王の親戚 Roupen なるもの一〇八〇年を以てキリキアの山地數郡を奪て割據せり、故國はセルジューク朝の土耳其政府の有に歸せしを以て、一世紀以前よりその抑壓を避けてこの山地に定住せるアルメニア人少からざりき。ルーパンの子孫は希臘帝國を蠶食してその領土を擴張し、小亞細亞なるセルジューク朝の土耳其人に對して勇敢に之を防衛したり。共同の利害は小アルメニアをして十字軍の戰士と互に相連盟せしめ、或は之が援助を受け或は之が爲に援兵を出したり。ルーパンより九代目の Léon は希臘人幷に土耳其人を破りて版圖を膨脹し、一一九七年使節を羅馬法王セレスチン第三世幷に皇帝ハインリッヒ第六世の許に遣して、要求する所あり、始めて王號を得たり。蒙古の將軍拜住(バイヂュー)が Roum の支丹 Key-Khosrou を破り、その領土の一部を侵せる時、レオンより三代目の國王 Hethoum は蒙古兵のキリキアに近けるを見て和親を結ぶを以て最も策の得たるものなりと認めたり。故に一二四四年使節を拜住(バイヂュー)の許に派して降を乞ひ、かくてアルメニア國王は蒙古皇帝附庸の一人となりぬ、是れ窩闊台(オゴタイ)治世當時のことなりき。更に貴由(クユク)の卽位に際して國王 Hethoum が陸軍司令長官たる王弟 Sempad を遣して祝意を表せしことは上述の如し。其後種々の事情に妨げられしが遂に國王は一二五四年に至り親ら本國を發して蒙哥(モンゲ)の朝廷に至り君臣の義を結びたり。先づ Derbend 街道を經由して、拔都(バツ)、撒里荅(サルタク)父

子に敬意を表し、次で皇帝の宮廷に赴き殊遇を受けたり。アルメニアの歴史家 Kirakos Kaïdzaketsi 著「Hethoum 王大汗の朝廷に至るの旅行記」はクラプロート氏の註を添え新亜細亜雑誌第十一卷二七三頁以下に出版されたり。逗留五十日の後 Hethoum は帝都を辭せるが、時に王國領土安堵の特許狀は勿論、小アルメニア王國の貢賦を減ずるのみならず、更に僧侶の課稅を全然免除す可しと保證せる勅書を授けられたり。Michael Chamisch 師原著 Joh. Avdall 英譯 History of Armenia 一八二七年カルカッタ出版二八四頁、Haiton, Hist. orientale 第二十三章參照。「Haiton に據ればその血族たる Haiton 王は蒙古皇帝に向て基督教徒となり、全國民をも改宗せしめんことを第一に乞へり、その他なほ六箇條の請願を受けて後蒙哥は政廳にアルメニア國王をも參列せしめて、扨勅語を下して曰く、アルメニア國王は遠來の珍客なれば正當なる請願は須らく之を容れざる可からず、アルメニア國王よ朕は卿の請願を是認し洗禮を受けん、かくて基督教徒の信仰を守り、臣下にも之に倣はしむ可きも、決して何人をも强制するの意なしとあり。この記事は信じ難し。Haiton は之に續けて皇帝はアルメニア國王の尚書たりし僧正より洗禮を受け、その他皇室の男女、大官等も多數之に倣へりと記せり。蒙哥は無頓着に宮廷にて保護せる各宗教の儀式に從へるが故洗禮を受けしと云ふは或は然らん。然れども或る特定の宗教を信奉せるにあらず、蒙古人は洗禮を以て一種の齋戒と目せしならん。歴史家 Haiton のアルメニア國王が得たりと傳へたる僧侶寺祿の免租に關する特權に就ては、上にも云へる如く、成吉思汗の法規を窩闊台の是認せるもののうちに、各宗教の僧侶はこの特權を享有す可しとあるあり。Haiton によれば Hethoum 王にはその他、アルメニア國の故土にして蒙古兵の回教徒より克復せるものは還附さる可き事、西邦駐屯の蒙古將軍はアルメニア王の要求ある時は援兵供給の命令を受く可き事、蒙古兵はハリフハ領を攻擊す可く且基督教徒と合同して聖地を回教徒の桎梏より救ふ可きこと等公約せられ、而も這般の公約は間もなく親王旭烈兀之を履行したり。○アルメニア國王の一族にしてタウルス山脈の西南にして、地中海に濱せる Gorhigos 公 Hethoum 一に Haiton は一三〇五年領土を國王 Hethoum 第二世に還附し、Prémontré 僧派に入りキプロス島に渡り更に羅馬より佛國に赴きポアチエーに於て東邦史を著したり、蒙古幷に小アルメニア王國に關する詳細の記事あり。(Saint-Martin アルメニア紀要第一册二〇三頁以下キリキア誌參照)

第七章

忽必烈は一二五二年に雲南征伐の命令を受けたり。雲南には當時幾多の小王國割據し、多くは宋朝の制令を受けざりき。同年の季に當り將軍汪德臣 Vang-té-tchen は四川に於て稍〻勝利を得たり。成都府を掠奪せる後、更に進んで南方三十リーグの嘉定府を奪ひ、以て忽必烈進軍の途を開けり。忽必烈は一二五三年の十月頃陝西の臨洮府に集合せる大兵を引率して進軍の途に就けり。旗下に在りて軍事を總督せるは速不台 窩闊台崩後召集されたる總會議に出席せる後、速不台はドン河畔の陣營に歸任せるが、七十三歳の時同地にて逝けり、(アベル・レミュザー新亞細亞雜纂第二册九十七頁速不台傳參照) Soubout とは蒙古語にて眞珠の意あり。の子兀良合台 Ouriangcadaï にして諸將のうちにありて蒙哥を帝位に卽くることに最も多く貢獻せるより(定宗崩、拔都與宗室大臣、議立憲宗、事久未決、四月、諸王大會、定宗皇后問所宜立、皆惶惑莫敢對、兀良合台對曰、此議已先定矣、不可復變、拔都曰、兀良合台言是也、議遂定(元史兀良合台傳))皇帝の命に依りて特にこの遠征に從軍せるなり。忽必烈は四川を橫斷し、更に軍隊の容易に近づく可からざる山脈を越えて困難なる進軍を爲せる後、金沙江岸に達したり。筏を假りてこの江水を渡るや、摩娑蠻主出でて降れり。白蠻主も敢て抵抗せざりしに、その姪都城を防がんとせり。忽必烈都城を奪ひて之を殺せしも、住民は之を助けたり。南詔國の都城大理は一兵に衂らずして忽必烈の有に歸したり。初め尚書姚樞、忽必烈に語るに、宋の太祖、